第八版

エンゲヂ

内藤千代子著

博文館發賣

エンゲージ

内藤千代子著

はつ春記
春宵はなれ
春たけなわ
五月雨
青葉陰
蟬時雨
雲峰宴
月下の
燃る花
燃る心
箱から出た女
青葉陰
向陵の夜
名残の月
love me little but love me long
旅

エンゲーヂ

内藤千代子著

はつ春

×

「驚いたらう、はゝゝゝゝ。

ヤア、妙、素敵だぞ、高髷がよく似合ふね、何處の美しい令嬢かと思つた。

うちのお嬢さんは如何した、何、居る、居るなら何故出て來んのだ、怪しからん。

呼んで來い。

美いさん、美いさん、おおい、美いさん、どうした。』

『さぞ従姉さまも吃驚なさるでせう、ね、妙。私、えゝ、汽車の中から御一緒になつてね、』

思ひもかけぬ人聲に、我と我が耳を疑ひながら、私は玄關に走り出ました。

『まあ！』

夢ではなかつたのです。なつかしい兄樣の立姿、飛び立つ樣な心壓さえて、優雅に手を突て迎へれば、ぢつと見下して莞爾なすつた。妙は式臺にひざまづいて、花さんのお靴を脫がせて居ました。

『突然で、ホ、、、、。元日から出歩きますと、またお祖母さまに叱られるか知れないけれど、兄樣と邂逅なんて奇遇ですわね』

ふくよかな前髮ふり上げて、花さんは晴やかに笑ひました。そして、すつと立つて、その紫色のマントを脫ぎ捨つるより早く、

『新年お目出度うッ。姉さま、御兩人の御幸福を御祝ひいたします、』

『有がたう、貴女の御幸福もお祝ひいたします、』

ひしと縋りついた肩抱きしめて、その滑つこい黒髪の上へ、ちか〳〵と顔さしよせ、

『今年も仲よくしませうねエ』

『姉さま、きつとよ、』

嬌然一笑。

『取り散らしてますけれど、洋館の方へ——。ほんとによくいらして下すつたわねえ、學校の式から即時と此方へ？　まあ、さう？　えゝ私、本ばつかり讀んでましたの。あら、兄さま、何遊ばして？　どうぞおはいり下さい。』

ホツと頬に觸れる暖爐の温氣、花さんは走り入つて、くづるゝ樣に中央の丸卓へ身を投げかけ、

『外は随分寒うムいましたのね、兄さま。あゝ可笑しい、思ひ出しても……ホゝゝゝ』

止度なく笑ふ。

『よしてくれ御免〳〵。いやもうかね〳〵お茶の水は口が達者だと承つて居ます……』

『ほら、矢つ張そんな事有仰る！　あのね、姉さま』

私は卓子の周圍へ程よく椅子を引寄せなどし、

『どうしてお二人でいらつしやいましたの。何だか狐につまゝれたやうで……兄さまは箱根の福住にとばつかり、思つて居りましたものを』

『ホゝゝゝ兄上様つたらね、私も驚きましたのよ。思ひもつかない戸塚の停車場なんかから、突然飛び込んでゐらつしやるのですもの、えゝ、丁度私の乘つてゐました室へね。

ですから悪い事つて、出來ないものでムいますわネエ、兄さまがあんまり秘密に、姉さまといゝこと遊ばさうとなさるから、』

『馬鹿なことを。』

苦笑ひして被居る。

『まあ何の事？　私には些つともわかりませんわ。そんなにお二人でばかり、仲よしにおなり遊ばして……』

『あら、おひどいわね、姉さま。斯うなのよ、兄さまはね、汽車を乘り越して——ええゝゝ、國府津からですよ。ホ、ゝゝボートレースに御念が入り過ぎ、藤澤なんぞは夢の中、お目がさめたら大船も通り過ぎて、あのトンネルの中でムいましたとさ、ホ、ゝゝゝ。呆れますわねえ。

それで戸塚からまたお乘り返しになつたわけ。そしたら私とかち合つちまつたんですよ、お分かりになりまして、ホ、ゝゝ』

『まあ、それはまあ、』

太刀先しどろに亂れたところへ、折よく外からドアをコツ〳〵。

『何？　紅茶、あゝよし〳〵。お菓子は？　あら、そんなもの……まゝ宜しい。それから——花さんは白葡萄酒飲るのね、いゝえ、お屠蘇の代りなの、いゝのよいゝのよ。あれに林檎そへてね、早く。』

と命じてやつて、

『冷めませんうちに、召し上れなね。兄上樣おいかゞ？』

ガチヤリと紅茶々碗引よせる。

花さんの極彩色、いつもより一層美しくお化粧してるやうだ。濃青磁色勅題模樣の中振袖、白襟衆ゆる首筋に、キユーツと結んだ眞紅のリボン、濃海老の袴の胴は、例のバンドでぐつと締め、眞珠つなぎの時計の鎖を首からだらりと。

水色緞子の長椅子の端に、かう少し横向いて兄上樣とお並びになつたところ、綠

色のカーペットに大まるの袂の先がゆるう引ずつて、燃ゆるやうな振の紅、下着の白、まるで新春雑誌の口絵から脱け出したやう。どんなにか汽車中でも、人目を引いたことであらう。

西窓からオレンジ色のカーテンを透して、春淺い夕陽が美しく映じて居る。

妙がせか〳〵と駈けて來ました。

『美佐子樣、あの、御隱居樣がお召でムいます。ハアお客樣なのでムいますよ、川本樣の奥樣が、若奥樣をおつれになりまして？』

『さう。では兄樣、一寸失禮致します。

花さん、貴女はこつちへ一緒にいらつしやいな。美しい物好の夫人ですから、貴女を見せて羨しがらせて上げますのよ、ホ、、、、』

笑ひましたけれど、その實兄さまと花さんを、一緒に置くのが厭なのでした。

『さう〳〵、私、お祖母さまに御挨拶して來なくつちや、』

と立つて來ながら、

『姉さま、お羽織をお替えあそばしたら……お束髪にも何かお挿しあそばせよ、お正月だと云ふのに、あんまり寂しいぢやありませんの、眞紅な薔薇か何かゝ、うつりがいゝのね、』

無理に引立てられて化粧室に入れば、

『何れに遊ばすの、姉さま。あゝ彼の、あれがいゝのね、ほら、暮に三越へ御注文の……さう〳〵、あれよ。何處にありますの？　左の方の、三番目のひき出し？』

カタ〳〵と簞笥の鍵が鳴つて、取り出された紫縮緬の羽織。これは今度君ちやんと咲子と三人お揃ひに、こしらへて下すつたのですけれど、あんまり美々しく氣はづかしくつて、今までどうしても、手を通す氣にはなれませんでした。

ずつしり後から着せかけられて、大海原の樣な姿見の面に、二人の笑顏が重なつた。

黒地に茶の濃淡で立枠絣の紋縮緬の上着、下着は白地の友禅羽二重、羽織も思つたほど華手ではない、着物との配合がいかにもよくつて……。

藤紫の半襟ゆたかに合せて、少さな眞珠入りのピンで止めつゝ、まだちよいと鏡の中を。

『さア、まゐりませう、お待遠さまでした』

涙れつ、もつれつ、長廊下をお離れへいそぎゆく。

お祖母様は中風で三年越し、左の半身がよくきゝません。八疊のまん中に紫縮子の厚衾重ねて、お炬燵へ倚りかゝつてゐらつしやる。

お客様はお床の間の方を向いて、桐胴の手炳前に控え、首さし伸ばしてしきりとお祖母様と、何かさゝやいてゐらしつたが、

『これは美佐子さま』

と座をお退きなさる。

『はじめまして』

御挨拶もつゝましやかに、蚊の鳴く樣なかすかなお聲、大島お召の割形模樣に唐織オリーブ色地の丸帶、きちんとお大鼓に結んで撫肩の細そりした、俛くまで溫和しさうな奥樣、あまり高くない島田には、小さい金の平打が光つてゐました。

お母さまはお髮もつや〳〵しい丸髷で、金足の珊瑚の簪、藍色がゝつた無地お召の、紋附羽織をぞろりと召して、お色白のお品のよい、お年は四十七とか承れどやう〳〵四十の坂をお越しなすつたくらゐ、まだこの樣なお嫁さまの、お姑さまと申上げるのは似合はしからぬ。

某銀行重役の夫人、お祖母樣とは御懇意になすつて、やつぱり當地に御別莊がおありなものですから、チヨイ〳〵お目にかゝるのですけれど、私は何だか氣の合はない方。相變らずくる〳〵と、お口がよくまはります、齒車に油をさしたやう。折々思ひ出したやうに、銀のべのお煙管を、ポンとおはたき遊ばしながら。

ぢつと俯いてゐらした若奥樣が、ふとお顏お上げになつた、その輪廓と云ひ、色と云ひ、まるで栗です。唇とお鼻の工合は猪に似てゐて、額の高い、白い大きなお眼、薄い眉、お可哀想に、何處が一つ、不具と云ふところもないのですが、まあ、お氣の毒でたまらなくなりましたの。花さんも妙な顏して、下目使ひしながら、袴の襞を撫でゝ居ます。

お祖母さまのお目くばせに、是非なくポン〳〵と手を鳴らせば、妙は次の間からお屠蘇のお道具や、お重詰を持ち出して、黑塗のお會席膳に、松茸の香高き金蒔繪のお吸物椀が、めい〳〵の前にすえられる。

×

やう〳〵お離れの一座を切りぬけて、二人は以前の洋館へ飛んで來ました。夕闇せまる室内に、ストーブの焰のみ紫に赫々、お兄樣は長椅子の上に倒れて、

両手を頸に巻き、制服の肱にお顔うづめてすや〳〵と眠つてゐらつしやる。

さぞ待ちくたびれて、立腹てゐらつしやるか、笑つてゐらつしやるか、焦れてゐらつしやるか、悄げてゐらつしやるか、と心も空に思ひ悶え、座に堪へられぬ程であつたものを、お察しもなく、この有様。あまりの本意なさに、焦ら立つ胸をおさえて力なく、椅子の一つにくづ折れた。

花さんはパチリと時計を開けて、ストーブの火に透かして見ながら、

「一時間半も過つちやつたんですもの、ほんとに長つ尻の客たちだ。お祖母様もお祖母様、何も私たちをあんな人のお相手に、引とめておかなくつたつて宜いぢやありませんか、兄さま、罪のないお寝顔してゐらつしやるのね、笑つてらつしやるやうなお口許だわ。あれ、お近眼鏡かけたまんま、どんな夢をみてゐらつしやるんでせう。」

恍惚した様にほゝ笑みつゝ覗きこんで居たが、ふと向き直つて私の傍へすりより、

『今日はね、あの姉さま、ねえ姉さま、私はお迎へのつもりでまゐりましたのですわ、明日、私と一緒に歸京て下さい、ね、』

『えッ本邸へ！　でもお祖母さまはどうします。』

『お祖母さまなんか、姉さまつたら、』握つた手首をふり動かして、

『焦れつたいのね、お祖母さまなんか何です。

姉さま——アゝ來年の今頃は、もう若奥樣で、澄ましてゐらしつしやるのぢやありませんか、今年がお名殘のお正月です。思ひきり遊ばうぢやありませんか。

池田さんの歌留多會は三日の午後からよ、山下さんと高橋さんのが四日で、今泉さんのが五日の晩よ。

六日は私のお誕生日ですし、お和歌の會やら、松江先生の新年會やら、どんなに皆さんもお待ちして被居るでせう、青山さんは青山さんはつておきゝになりますのよ。

姉さま、後生ですから歸つて下さい、簞笥の中でお召物が泣いてますよ。

まあ、こんなに申上げても、つまらなさうなお顏してゐらつしやるのね、ぢや、姉さまはもう、乙女の春にお飽き遊ばしたの」

「あら、そんな事？　それより貴女や君ちやんや咲ちやんが、お友達澤山引ぱつて來て下すつて、此方でも一つ盛んなかるた會でも、新年會でも開かうぢやありませんか。ね、さうしたら、お祖母樣もどんなにお喜び遊ばすでせう。」

「いやよ〳〵いやよ。」

盛んに頭を振つてたが、

「あの、岩村男爵が姉さまを……つて、あれ、ほんとうなんでせう、それでゞせう、ねえ、ねえ、姉さま。」

「あら、そんな事、」

「お姉さま」

花さんは私の膝へ、泣き伏して了ひました。香水の香の目に滲むやうな、手巾顔におしあてゝ。

美しい少女はやゝしばし、前髪ふるはせてさめ〴〵と泣きつゞける。

『花さん、何も、そんなに心配する事はないんですから、ね、ね、』

岩村男爵、あゝおゆるし遊ばして……おの〳〵花さんの白い頸へ額をおしつけて了ひました。

だつて私には立派な許婚の兄上様の在すものを、あんまりではムいませぬか。恨まれたつてこはかない、こはかないけれど……。

『即興詩人』の「ベルナルドオ」を思ひ浮べずにはゐられない。色こそ日焼に黒みたれ銀の様な長剣輝かして、利かぬ氣は眉目にあふれつゝ、凛々しき美髭の青年士官。

岩村男爵、同族中の姫君を片つばしから撰り分けて、私の面當にして下さるお氣はムいませんの。

舊主の若君ではあり、無下にお斷りも出來かねるつて、お父樣もどんなに御心配なさいましたらう。御懇望のかゝつた頃、私は肋膜を病んで入院中、病後を名としてその後は、お祖母さまもろとも、片瀨の別莊にうつり住むことゝなつた。

岩村男爵が私を始めて御覽になつたのは、去年上野の樂堂でとか、高松邸の園遊會とかであつたさうな。もう〳〵人に顏見らるゝがいや、兄上樣と御一緒でなければ、決して何處へも行きますまいと、堅く心に誓ふたものを。

「あ——眠つた、む——む。

や——、美いさん達、何時の間に來てゐた、おゝ、もう日が暮れたのか。」

花さん、がくと俯ね上つて、

「えゝ、もう先刻からでムいますのよ、兄さま」

パッと電燈をひねる。映ゆさにまぎらせた微紅い瞼で、もう笑ひながら。

卓上の椰子蘭の綠の葉陰に半ば伏し隱れた風情で、卓子掛の端をいぢつてゐる。

『花さん、一曲おきかせ下さいナ。晩餐までにはまだ間がある、丁度いゝ。お願ひいたしますよ』

『あら、駄目よ、お彈初は二日ですつて。お祖母さまに叱られるわ。』

『そんな時ばかり、お祖母樣をだしに使つて、いけない人……』

『花さん、遣り給へ、きいて上げるよ』

とこれは兄さまが。四分一銀の卷莨入から一本ぬき出し、火を點けよと私にさしつけつゝ。

『まあ、』

と流るゝやうに眸をよせてにらむだが、つと立つてピアノの前に掛けた。

眞黑い樂器は兩側の燭の灯に照り榮えて、靈あるものゝごとく輝けば、マーブルをきざんだ樣な頰のあたり、薄すりと紅潮して、鍵盤たゝく手にきらめくダイヤ、妙なる音色は靜寂とした四邊に響き渡つた。

私は兄さまの傍へひざまづいて、我が優肩にまとはれし御手を、今日ばかりはふり拂はふともせず、たゞ戰ける唇を、小指の端におしあてぬ……。

戀ならぬ言葉なれども美し女と
　語りてあれば妬ましきかな
恥かしとうつむく君の小女氣を
我は愛すとのたまひにけり

春宵記

×

青磁に亂るゝ糸柳の
若芽をきざめる片枝がくれ、
かざれる雛の玉の殿を。
誰が子か仰いで獨り笑めり。
紫玉をちらせる金の冠、
龍頭を彫りたる劔太刀の、
花なる御衣を透いて見ゆる、

壯なる姿を君や戀ふる。
春知りそめたる糸柳の、
嫋ひて見ゆるも哀れなるに、
緋桃を浮けたる瓶子あげて、
沈める思ひに注いて見んか。
彌生のみ空と若き命、
いづれか白日の夢に似ざる。

サヤ〳〵と羽二重の裾を鳴らして、君さんが、つとお雛壇の雪洞に火を入れる。
金屏に銀燭榮ゆる春の宵、濃紫の幔幕ゆるうしぼつて、御簾捲き上げし奥深う、
彫龍朱欄香を高み、黒髪長う背にたれて、十二單衣のおん衣、みやびやかな御襟のあたりに、つゝましうゆれる瓔珞、黛匂ふ大裡雛　はづかしげに居たまふを、ぢつと見上げて、

『ねえ、お姉さま、この奥様は餘つぽどお姉さまのお顔に似てゐらつしやいますよ。不思議ですわねえ。お雛さまつてものはきつとどれかしら、所有主に似たのがあるものだつて云ひますけれど、ほんとかしら、私なんぞうちの五人囃の、太鼓を叩いてる糸びん奴に、そつくりと云はれて、イヤで〳〵』

と君さんは、長い袂を胸に抱えて、官女の長袴に散りかゝつた、桃の花片つまみ取る。

『もう姉さまのお雛様を、うちにおかざりするのも今年つきりなのねえ』

いつになくうなだれて、咲子がこんなことを云ひました。

行儀よく緋友仙の座布團の上、そと据えられたかと差俯いた花さん、すつとした鼻筋ばかり、傍立つてゐたのがこの時顔をあげると、眞紅のリボンは後へ消えた。

『ですけれど、あちらへ嫁らしても、姉さまがすぐ母ちやまにお成り遊ばせばいゝわね、赤ちやまのお節句の方が、どんなに嬉しいか知れやしないわ。姉さま、總領

は女の子がいゝわね」

少し居住ひくづし乍ら、擦り寄るやうにしてチョッと小首を傾げる。

「その頃は花さんだつて、もう奥さまかも知れないわねえ姉さま」

トンと高く出した前髪を伏せて、濡れた様に照る紫紋綸子の羽織、つやゝかな白い横顔で、君ちやんはチラと私の方を見て含笑む。

「アラ、有仰いよ、貴女こそ、」

「まア、酷い！」

花のともしび、若やかの面を照らして、笑ひこぼるゝこの宴。あふるゝ思ひくみかはす、甘まし薫りの白酒を、濃い紅の唇におしあつれば、カチリと皓歯が玉盃に鳴る。

「お姉さま、一昨日の紀念祭ねえ、面白かつたのよ。いらつしやればよかつたのねえ——吉村さんや寺尾さんがよろしくつて。どうなすつたつて聞いてゐらつしやい

ましたわ。女の方にも随分お目にかゝつてよ。ええ私たち、それや可笑しかつたの。最初ねえ、綾さまのお兄様に、お願ひしてあつたのですけれど、お兄さまは大変おいそがしいんで、綾さまのお従兄さん——晴雄さまつて方が寮に被居しやるでせうその方にたのんで上げるからつて、連れてつて下さいましたら、姉さま御存じ？、晴雄さまつて妙な方、いやしくも一高生たる我等にとつては神聖なる一日だ、女のお供なんぞしては居られないと、金壺眼を飛び出させて憤慨なさるのよ。それを綾さまの兄さまが、いろ〳〵になだめて、抑付たところはいゝけれど、私たち女ばかりの六人づれ。黄ろい聲をキャア〳〵上げて中にも本田さんて方なんぞ、大きな唐人髷に友禪縮緬のお羽織、眞白く白粉つけて、艶つぽいつたら、まるで半玉見た様で、目に立つてないんでせう——、あんまり諸方から野次られるもので、とう〳〵眞赤になつて怒り出しちまつて、仕末に困つたわ。其處へ折よく木村さんがおらしつて、わけをきいて、そんなら僕が御案内役を引受けて上げませうと有仰るもので

すから、やつと晴雄さまを、放免して上げましたわ。

それからホールでお菓子を食べてますと、何とお思ひになつたんでせう、たのみもしないのに、お茶のお代りなんぞ持つて來て下さるのよ。また怒られるかとビク〳〵しながら、一つ如何ですつておすゝめしましたら、だまつて請取つて、みんなポケットへおしこんぢやつたの。笑つたわ、ホ、、、、、そのポケットには穴が開いてるのよ、ホ、、、、、」

「さう、それは面白かつたでせうね」

「私は寮歌集二十冊買ひましたのよ、ずゐ分でせう、ホ、、、、ええお友達に分けて上げやうと思つて……姉さまの方へも一組お送りしました筈よ。あの、ほら今年のエハガキね、エ、まだ御覽にならないつて！　あら」

「馬鹿つ！」

君ちやんが何をしたのか、咲子は甲高い聲で叫んで、脫いだ被布をば力任せに投

りつける。

颯と鶸色の裏を飜して、膝の上へと落ち來つたのを、君ちやんはだまつて袖疊みにして片寄せる。

巾せまな緋絽子の平常帶、ちよきんと結んで、この頃ふつくり肉づいて來た肩のあたり、もう引結の垂髪も似合はなくなつた。私はふと「たけくらべ」の美登利が、幼な心の移り行くさまを思ひ浮べた。過渡時代の少女と云ふものは、可愛氣のないものです。何となく傷ましい樣な氣がする。

花さんと咲子とは、表面性格が酷似してゐるやうだけれど、けれど心裡狀態はまるつきり相違てますのよ、花さんは幸福な人ですわ、物質上の不足さへ感じなければ、一生幸福で居られる人ですわ。

美人で交際家で、華手好きで快活で、當世中流家庭の現代式令嬢、女生徒の標本は、花さんにおいてこれを見るといひたい。

人懐つこい華やかな態度、あのきれ長の眼、溶けさうな黒い眸、どんな表情も自由に出來、花片のやうな唇動して、誰かれの差別なく甘へかゝる。

それが御自分ではお得意なんですけれど、流石令嬢の品格を失いはしません、やつぱり富貴の家に育つたおかげ、何處までも無邪氣な應揚なところがある。折々はわづらはしいとこそおもへ、憎まうつたつて憎まれはしません。

咲子はあれで家庭でも持つたらば、案外くすぶつて了ふかも知れぬ。責任のない親がゝりの中に、出來るだけ贅澤や我儘をしつくして置かなければ、損だと考へてるやうな子ですから。

君ちやんは苦勞人、從妹のうちでも不運なのねえ。寄生木の身のあけくれに、咲子の專横、ヒステリックな伯母樣(私には母さまですけれど)の皮肉、さぞ、さぞ、眠られぬ夜半もあるでせう、お察しゝますわ。その代りもうこの人ならば、どんなお姑樣に仕へても……手腕の程が窺はれますわ。

私のこの人たちぐらゐの時は——と思ふと、自づと頬が紅らむだ。小柄な私はいつまでも幼くつて、十八でしたけれども……。

お正月、父様に伴れられ、熱海へ避寒して、今から思へば、あれがお見合と云ふのであつたのでせうが、梅林で山田様の一行と邂逅つた。

兄さま、その時は、黒木綿の厳つい紋附羽織召して、痛せぎすな、お鼻の滅方高い、お色の黒い、蟹骨さうな方だと思つたばかり。

ビール樽のやうな伯父様は、父様の御親友で、度々邸へもお見えになり、よく存じ上げて居たのですけれど、その反対に眉の濃い、背のすらりとした、品も威もある老夫人が、しきりと私をお見つめ遊ばすので、何とは知らず恥かしくつて、父様の後にばかり隠れてゐました。

園内の渓流潺湲と鳴り、玉と輝く幾千株の梅花、花下には鮮やかな紫の袂、眞白のボア！　きら〳〵と光る黒髪、肉色リボン。絵のやうだつたその色彩が忘れられ

ぬと有仰つて、今でも菫の花など見れば、きつと、美いさんの被布の色、と云はれ〳〵する。

あの頃は兄さまも、若々〳〵しい無邪氣な坊ちやまでしたわねえ、よく三階の洋館の窓から、書生相手に飛行機凧なんぞ飛ばしてゐらしたつけ。

座が白け渡つて、皆んな默まりこんで了つたのをいゝことに、こんな事考へて居ると、

靜寂を破つて、

『お歸りつ』と喚ぶ抱車夫の聲。

『あら、お父樣ですわ』

袂ほら〳〵馳け出せば、三人もバタ〳〵入りみだれながらついて來ました。

『お歸りあそばせ』

後へまはつて外套お脫がせ申す。君ちやんは車夫の手から黑皮の手提鞄を受取る

と、花さんは渡されたお帽子捧げ持ちつゝ、

『ま、伯父様、好いお顔色ね。まるで樽柿の當つたのだわ、ホゝゝゝゝ』

『酷いことを云ふ、相變らず花さんは口が悪いな。お、美佐ぢやないか！　どうも若いお母さんだと思つた、紅い振なんぞちら〳〵させてな、』

『オホゝゝゝ』

四人は聲を合せて笑つた。

肥え太つたお身體に紺背廣召して、電燈の下に輝き渡る血色澤々しく、今晩は殊の外の御機嫌らしい。

唉子が甘つたれて擦りついて、

『お父様、お節句ですからね、御主人が被居しやらなければ、お雛様がお泣きになりますもの。それで來て戴いたの、それからお母さまは今日午後から、松村さんへお出掛になりました。まだお歸り遊ばさなくつてよ、お遲い——』

『ハヽヽ、左様か、美佐が來たなら、山田のお兄さんも、お招きすればよかつたな。この頃はちつともお見えなさらんぢやないか』

『だつて姉さまがゐらつしやらないですもの』

唉子は不平聲。

君ちやんがお世話して、お召替もすんで、手炳の向ふへ直したお部屋ぶとんの上へゆつたり、太い葉巻のけぶるを右手に、小間使ひの持て來し紅茶をうまげに喫り給ふ。

『お父樣、お仲間入り遊ばして頂だい。ねえ今夜はトランプしませう、お居間へみんなして伺つてもよござんすか、え、え、いゝの！　うれしい。ホヽヽヽお父樣、私、ほら、お約束の歌舞伎座行、あれ、賭けますわ。ね、その代りお父樣は何して下さるの？　え、え、』

『老獪な奴めが、ハヽヽヽ、姉さまを見ろ、溫和しいものだ。だから山田のお兄さ

んの様な、好い婿君がさづかるのぢや。君子も花さんもさうですぞ、なア、山田の兄さんのやうな好い男――」

『父様つたら、御酒を召し上つてゐらつしやると、御笑談ばつかり有仰つて……』

『お父様は姉さまに最負がおあり遊ばすんだもの、温和しい〳〵つたつて姉さまは、駄々をこねる必要もないんだわ。お召だつて何だつて姉さまは、だまつて居てもお出来なさる、私は泣いたりさわいだり、あげくの果にやつとなんですもの』

と札はバラ〳〵バラッと飛ぶやうに咲子の手によつて配たれる。馴れ切つたもの。ふと私は、このやうな勝負事に、趣味をお有ちなさらぬ兄様をうれしく思つた。私等の家庭は兩人さへあらばそれで足る、何しにかゝる楽しみを求めやう。

『あれ、姉さまは如何遊ばして？　早く、早くさ』

焦れ切つて咲子は身を悶く。はつと我に還つて、今更の様に我が手の内を見る。戰ひは始まつた、リングの光る指が烈しく上下しはじめた。

春たけなは

×

花爛漫、薄紫の空は絹絲のやうに光つて、玉と照る春光麗々。百鳥の音も濃やかなる佳日を、新婚祝賀の園遊會、瑞雲たなびく藤代家の邸内。

斯んなお席へつらなる事は、不得手なんでムいますけれど、今日は餘義ない母樣の御代理なり、かつは交際社會へ初舞臺の君ちやんに附添のため。髪も束髪、止袖の裾模樣、愼ましう目止ぬ樣にの心づかひを、あまり皆さんがお美しいので、花の木の間の松の色、短かき袖のかへりみらるゝ。

我知らず花やかな花下の群を離れて、築山の上へ登つて行きました。

山上には茶室めいた離れ屋があつて、鏡のやうなお縁側には、厚い緞子の茵が五つ六つ、紫檀の煙草盆と隣つて並べられ、美しい丸髷の夫人が一人憩ふて居られました。

黒地に観世水の派手な千草模様召して、白を重ねて裾ぶきは、京草履の緋鼻緒の上に緩るう波打つてゐます。

莞爾御會釋遊ばして、黒塗骨のお扇子を、輕ろくお口へお當てになりました。袖垣の山吹がはら〳〵零れて、金の雨のやうにお膝のあたりへ散りかゝつた。

十七ばかりの活々とした小間使ひが、目八分にお盆を捧げて來て、茶菓をすゝめてまかりました。京燒の茶碗から緩う湯氣が上る。

「あれ、お泉水の美しい——御覽あそばせ、楓の若芽が燃えるやう。菖蒲の咲きます頃はさぞねえ……」

さま〴〵の寶石光る、白いお手を上げて指さゝる彼方の澄み切つた池の面は、悠

々と大空の白雲を浮べて、岸の大きな青柳も、島の翠も、藤棚の若葉も、また三々五々石橋渡りゆく人の、美しい衣の色まで、ゆら〳〵と水に映つて居ます。はるか向ふの水際には、白木蓮が眞盛りでした。

いろ〳〵お話いたしました。夫人のお聲は銀の小鈴の轉ろばるやうでした。何となく面差も、大倉さんの久美子夫人に似通ふて居られる方でした。

やがて

『では……御ゆつくり遊ばせ』

と有仰つて、カチリと扇を胸高な帶の間へおさしになりました。長めに結んだ白茶地唐織の、震ひつきたい樣な後姿は、しづ〳〵と木の根の段々へ沈んでゆく。

あれ、花が散る、花が散る、紅白だんだらの幔幕張り渡したあたりは、落花で眞白く霞んでゐる。

冷めた玉露を取り上げて、一口啜ると、

『お姉さまがゐらつしやるわ』

と幼ない聲がしたので、ふり向く。まあ、濃い黒髪の瑠璃の様につやゝかな前髪を房さりと切り下げ、後は肩へ散らして、紫地友禪の大まるのお袖地に引くばかり、胸高に締めた紅地糸錦のおみ帶へ、はこせこの金鎖がこぼれかゝつて、色の白い下豐れ、眼のぱつちりした、何と可愛い姫樣だらう。馳けよつて私の膝へ手をつかうとして、思ひもかけぬ人違ひなのに吃驚なすつてか、極まりがわるくてか、ワツと泣き出されて仕舞つた。

引寄せて

『姫さま、宜御座いますよ、お姉さまつて高輪のお姉さまでせう？　私存じて居りますから、探して上げませう。あなた、山科子爵の光子さまでゐらつしやいますね、ね、左樣でせう、お一人？　おや、』

『失禮。妹です。こら、どうしたのか、外のお姉さまを、あはて者、』

歩みよるお兄さまらしい、上品な、フロック出たちの少壯紳士。

『いえ、恐れ入ります。さ、姫さま、御機嫌をお直し遊ばすのですよ、何にも悲しいこと御座いませんわ、これから私とも仲よく遊ばして頂戴ね。さ、さ、ね、お利口！』

ふうわりと菫色のハンカチで、ほんとに美しい和らかい、まるで搗立てのお餅のやうなお顔をふいて上げる。『お年は』と伺へば

『八歳、』

と恥かしさうにもたれ掛つて、私の左の中指の指環の玉をつゝねてゐらつしやる。

『光子さま、いつも高輪のお姉さまのとこで、お寫眞たくさん拜見いたして居りますのよ。今度私にも戴かせて頂だいな。』

『アラ、左樣。そんならお姉さまのも頂だいな交換いたしませう。お姉さまのお家どこ、電話かけてもよござんすか。』

『彌生町ですけれど、私は始終片瀬の別荘に居りますのよ。貴嬢、鎌倉の御別荘へでもお出あそばしたら、お遊びにいらつしやいましね、江の島のすぐ傍で御座いますよ。』

『あたくし、お手紙書けますのよ。お姉さまもお遊びにいらつしやい。その時は電話かけて頂だいな、もしかあたくし、留守にしてますといけないから、』

『はい、さう致しませうね、ホ、、、、』

あまりお巧者なこと有仰るから、そつとお兄様のお顔みると、これはまた苦々しげに外方向いて、柳葉のやうな濃き眉に物あり。

『光子早くしないか。彼方で叔母様が待つて被居しやる、さ、よくこのお姉さまにお禮申上げて――』

『ええ。ですけれどお姉さま。あたくしにお名刺下さらないの』

たしなめられて痛み入り、小菊に包んだ紫鹽瀬の紙入取り出す。

この方たちと引ちがへに、待ちかまへて居たごとく、飛び出して來たのは、先刻放してやつた君ちやんに花さん、右左から

『まあ、何誰？　今の方。え、え、姉さま』

『山科子爵の若さまですよ、可愛い姫樣でせう。ま、何ですね、二人とも息を切つてさ。今の方お氣に召しまして、ホ、、、、』

『あら、お酷いわ。姉さまがまるで夫人のやうでね、よくお似合あそばすつてお噂してたのよ。あゝ熱い！　姉さま、彼方へいらつしやいませんか？　何處へ行らしたんでせうつて、どんなに二人して探したでせう』

多血質の花さんは頰を桃色にそめて、右手に握つた手布で、しきりと額ぎはをこすつてゐる。肉色の紋縮緬重ねた桔梗紫のお振袖着て、雪白の襟、眞紅のリボン、濃い揉み上げの後からは緋紅色の矢の字が覗く。

君ちやんは今度始めて島田に結ひました、水の滴れるやうな高髷で、蒔繪の櫛の

金牡丹、定紋打つた銀平打が、縁の黒髪に栄えて星とも輝くに、沖色縮緬百合の模様の二枚重ね。思ひ切り高う、白とオリーブを絣風に織り分けた糸錦の丸帯が、背中の紋を隠くすばかりに結ばれて、胸をせばめた真紅の背負上、新橋邊りの何龍とでも云ひたい様な艶姿、これがまアつひこの間まで、學校へ通つてたお轉婆さんとはどうしても思はれない。

『もう何時お嫁さんになつてもいゝのね』

と思はず云つて了つた。

花さんが透かさず。

『姉さま、御存じ？　今日の何は——この御催しは、お見合園遊會なんで御座いますつてねえ』

『まあ、何誰の？』

『御分家遊ばすつて云ふ、御次男様のでムいますよ。ですからもう、それからそれ

とお手をまはして、みんな學校御卒業になつた、お美しい令嬢方ばつかり多いんですつて。イヤでムいますわねえ、姉さま。』

『まあ』

『ですから君ちやんなんかも、お氣をつけなさらなければ、飛んだ白羽の矢が立つかも知れないんですわ、ホヽヽ』

『あら、姉さまぢやあるまいし。』

『ほんとに姉さまは、第二の岩村男爵が恐くつて、こんな處に隱れて被居しやるのだわネエ。あら、さうだわ、さうだわ、ホヽヽヽヽ』

『ま、止して下さい。岩村男爵〳〵て胸が痛うムんすわ。』

『姉さまは人に戀されることを、罪惡の樣に思つて被居る！　いゝわ、いゝわ、澤山憧れさせておやりなさるがいゝわ。女の誇りぢやありませんか。』

女の誇り！　此人たちの女の誇りは、男子に服從を拒絶する事だと思つてゐる。

「女は弱し、然れども母は強し」と云ふ。否、否、否「妻は弱し、然れども乙女は強し」とこそ叫びたい！

純潔無垢なる處女の前には、何人もひざまづくけれど、一度人妻となつて了へば、その生涯は繋がれた犬の様なものだ、泣いてもわめいても、もう逃るゝ術はないのに、我が笄を加ふべき日は日に〳〵近づき來る、……。

「あのね：姉さま、模擬店の接待掛りは、皆な御親類内のなんでムいますの。お團子屋なんかそれは〳〵意氣な方が、白手拭ひの姉さま被り、襷がけで七輪パタ〳〵。何誰でせうとのぞいてみたら、ほら、〇〇さんの若夫人、學習院でピアノにきこゑた、えゝあの方なんでムいますよ、襟の掛つた横竪縞のお召なんか召して、それから甘酒屋だのおでんやだの」

「おでんやとお汁粉屋が、一番大繁昌なんでムいますよ。姉さま、私たちね、甘酒屋やの店に呼びこまれちやつてね、さうすると櫻井辯護士のあのお十四になるお孃

さんが、大きな稚兒髷に空色のお振袖、紫のお袴召して緋綸子の襷をお掛け遊ばしたところは、まるで長刀でも振り廻しさうで、ホ、、、、さしづめ活人畫、五條の橋へでも持つて行つた方が受けますよ。それはよござんすけれど、そのまた甘酒がね、釜前の不注意か焦げつ臭くて水つぽくて、頂かれたものぢやありませんの』

『姉さまのお好きなお鮨店もあるわ。まゐりませう彼方へ。いま餘興の方へ人が集まつてますから、何誰も被居りはしませんわ、ね、ね、さ、』

『有がたう。ぢや、參りませう、兩方から手を引いて頂戴、さ、目をつぶつて歩くから、お池へなんぞ突き落しちやいけませんよ、ホ、、、、、、』

『ええ、いゝわ、いゝわ、そいぢや君さんこれで』

本氣になつて立かゝり、燃ゆるやうに上京た頬へ、ヒヤリと心地よい絹半巾の接觸、あはてゝ、振りはらふ間もない、眼前は淡紅色の渦巻くばかりとなつて了つた。

『めんない千鳥、手の鳴る方へ、此方でござる、ホ、、、、、』

五月ばれ

×

雨上り、空は純碧に晴れ渡つて、一庭の新緑晃々と、輝く日光の接吻に、一葉一葉金の雫を滴らしてゐる。

瑞々しい若葉の香、緑に溶けゆく若人の心、紅い血のひそみ流るゝ肌を玉とも化粧して——晝餐後日常のゆあみすまして、黄八丈の袷に疎い矢がすりの羽織を着流し——紅さした素足に冷たい椽側の心地よう、詩集持つて椽のソファーによる。

妙が二三通の郵便物を持つて來る。あら、兄上樣からも！　大至急つて何でせう、あはてゝ起き直つて、打ち震ふ手に封おし切る間ももどかしく拜見する。

『有樂座の故郷、「マグダ」は松井須磨子の演ずるところ、「ノラ」とよい對照の人格なり、一度是非見せたしと思ふ。

即ち此書狀落手とともに用意して、十一日午後五時半までに有樂座へ來らるべし、場は一等のMの十五號。

あまりめかし立てゝおくれぬ樣、間ちがへぬ樣にされたし。僕がファンガイするともうお仕舞だ。』

詩集なげうつて立上りつゝ、

『妙、妙、妙や、一寸來て頂戴な。あゝ兄上樣は氣短ねえ、どうしやう、困つたわ。あゝあゝ。ねえ妙や、私これからお芝居へ行くのよ、大變なことになつてしまつた！え、それや嬉しいことは嬉しいけれど……』

×

『呀つ』

『まあ』

劇場の入口で、ばつたり落ち合つたのは舊友の大澤さん。いま乘りつけられた俥から、すらりとお下りになつたところ、かう褄を微し引上げるやうにして、白地友禪の長襦袢が、霞形の低い下駄にまつはつてゐた。

『お珍らしいぢやムいませんか、青山さん、』

朗らかな調子。鶉縮緬のお羽織は、華奢なお肩をすり落ちはしないかと思はれる程で、髷の長い束髮、金ぶち眼鏡、しぶい、意氣なやうな、ハイカラな樣な、お獨身なのだか、奥樣なのだか、ちつとも見當がつきません。

かつてはこの人も同じ教室に机を並べて、お對のリボン突き合せてた、それは四年の昔、女學校中途でお退學なすつて、赤い手柄の愛々しい丸髷姿にお成りなすつたとやら、なさらぬとやら、一時は大さわぎでしたけれど、もう大澤さんとも露子

さんとも、奇麗に忘れはてゝ了つたこの頃、こんなところでお目にかゝらうとは。

『ほんとうに思ひがけない。やつぱり東京にゐらしたのですの、大澤さん、餘りで御座いますわ、まるつきりお便りも下さらないのですもの、』

『うまいこと云つてらつしやる。ホヽヽヽお笑ひ遊ばして頂戴。この通りいゝおばアさんになつて了ひましたのよ、青山さんの昔かはらずお美しいこと。あら、本統ですよ。美いお髪ねえ、一寸此方向いて拝見な』

馴々しう肩に手をかけられて、近々見合す顔と顔。ふつくらした大澤さんの、無地お召の胸には、糸のやうな黄金鎖がゆれてゐる。

『お一人なのですか、旦那様と御一緒？』

思ひ切つて云ひますと。

『何ですね、まあ』

笑つて。

『貴嬢にもおつれがおあんなさるの？　さう、ではこれで失禮しましよう、御緣があつたらまたねえ！　さよなら』

組んでた左手をはらりと解いて、そのまゝお別れしてしまつた。お往居も伺はずに……

兄上樣はまだ來て被居しやらなかつたけれど、靜かに自席へついて、總縫模樣の半コートするりと脫ぎ捨つる。

花瓦斯の濃艶な光りのうちに、綾羅の美しき色彩を漂はして、誰から發せらるゝともなく、飛びちがふ小鳥の羽が春風に擦れて鳴る樣な滿場のさゞめき。

燦たる電燈は忽焉として消えた、幕は上つた。ドイツの或る小都會で、退職陸軍中佐シユワルツエの家の客間、熱心にミシンを動かしてゐる妹娘『マリイ』の、愛くるしい顏立、髮の恰好、俯いた目元なら口元なら、桃代さんに酷似、あの人に洋服着せたら、きつと此樣な人が出來上るであらうと思ふ。女中が花束を持つて來る。

「マリイ」の許婚中尉「マックス」の登場、白い顔、黒い髭、軍刀ガチャつかせつゝ。忽ち人の氣配、振り仰ぐと兄さまでした。頬もて示さるゝまゝ、そつと隣りの椅子に座をうつすと、そのまゝ私のあとへお掛けなすつて、手袋を外しながら、顔をのぞき込むやうに、

『早かつたね、餘つ程待つたか、』

『いゝえ、あの』

少さく御返事しやうとすれば、『え、え、何、』とお耳をお寄せ遊ばすので

『後でよろしう御座いますわ』

『中尉、中尉だね、彼人。君、美いさん』

『何遊ばすのよ、兄さまつたら！』

我知らず激した聲を出して、はつと心着きチラリと上目にうかゞふと、不興氣な唇震はしてゐらしたが、それつきり何ともおつしやらなかつた。

そのうち舞臺へは參事官フォン、ケラー博士の登場、

『東儀、東儀！』

つて兄さまは身をのり出す。

『あゝあの老中佐、土肥さんですわね、まあいゝおぢいさんにお扮りなすつた……』

×

三十分の休憩時間が來て、颯とぞよめき出す場内、兄樣も、つとお立ち遊ばすのを

『あゝと思はず呼びとめると

『何か用か』

『はい、ええゝ、あの、ぢやあよ御座んすわ』

『君、晩食はまだか』

『えゝ』

連れてつて下さるのかと思つたら。

『僕あもう了ませて來たんだ、お氣の毒だがこの上おつきあひは出來ないから、君、早く行つた方がいゝよ。僕に遠慮は要らんから』

『はい』

とは云つたものゝ、一人でなんぞ行かれますものですか。後姿を怨らめしく見送つて、うなだれて了ひました。

しばらくして顏を上げると、二階の左側のボックスに、後藤式の鼻眼鏡、五つ紋のお羽織召した、カイゼル髭の立派な紳士と、その令嬢とも見ゆる十七八の振袖の美しい女と、しきりにお話してゐらつしやる。

何を語り給ふや、艶やかなマアガレット、襟元に震へる白リボン、竪矢のかげにお首を傾けて、何か有仰ると、此方へは正面の兄様、制服の胸を叩いてお笑ひ遊ばす。

四邊の人はみんな、其人へ目をあつめてゐるやうだ、ピリ〳〵と唇邊がふるふ。けれど、けれど、もう何分かの後には兄さまは私のもの、こゝの椅子へ並んでお掛け遊ばすのだと、わづかに心をなぐさめてゐた。

輕ろく後から肩を叩かれて、びつくり振り向くと幸子さんが、お品の好い丸髷のお首をかしげて、笑つてゐらしやる。

『あら、まあ！』

『ちつと廊下でもお歩きにならない？　いやに考へ込んで被居るぢやありませんか。私？　えゝ〳〵一人ですとも、こんなお多福をいつまで引ぱつて歩いてくれるものですか。ほんの珍らしいうちだけですわね、ホヽヽヽ』

相變らず快活な方まあ嘘ばつかり。

流石は三越好みの、奇抜な藍色午蒡縞千歳染縮緬の二枚袷。白地華紋唐織の丸帶柳の腰にひつたりと、脫けるほどお色の白い、清しいお眼は鈴張で、半圓の眉、

珊瑚の唇、濃い前髪をふつくり金蒔繪の櫛でおさへて、髷の様な髪つき髷つき。お美しいのも道理でせう、○○○書記官が戀奥方。

『あゝそれよりも、先刻珍らしい方にお目にかゝつたんでムいますよ御存じですか、ホラ、あの、』

つて、大澤さんのことを話すると、

『え、あの方が——まあ、左樣、左樣ですか。一體どんな風して被居て？』

『お奇麗におなり遊ばしてね、見ちがへるやうでしたわ、それや意氣でしたの。私、何處の藝者でせうと思つたくらゐ』

幸子さんはあまたゝび頷づき、

『さうでせうつて。御存じないの？　あの方はある相場師の、お妾とかに成つてゐらつしやるんだ相ぢやありませんか。』

『えッ』

聲をひそめて

『濱町あたりの、立派な門がまへの邸に、かこはれて被居しやるのださうですよ。えゝ母子でね、一體あのお母さんが、其様方らしうムんしたわね。爭そはれないものですよ。最初御結婚なすつたのは、海軍の士官とか何とか……それからどうなすつたのですか存じませんが、何しろ大澤さんも、凄い腕におなりなすつたものですわね』

『でも、それにはまた何か、云はれぬ事情でもおありになつたんでせう？』

『つまりお利口なんですわね。先日も三越で、素晴しい古渡り珊瑚をお求めなすつたとか、八百圓のダイヤモンドを塡て被居しやるとか、大變なんですよ。何でも平常縮緬の長襦袢に、お召ぐらゐ着て、ぞろり〳〵して被居るんですつて。ねえ、貴女、大尉の奥さんぐらゐでくすぶつて暮さうと云ふ處、』

と云ひかけて、ふと聲もかろく。

『お美佐さん、近頃松波さんにお逢ひなすつて……』

『いゝえ。何方へも御無沙汰ばかり！　ほんとにすまないんですけれど……』

『旦那様がね、首尾よく今年は法科を卒業になるんでせう。それはお目出度いんですけれど、ホラ、徴兵検査と云ふ難關があるんですつて。鐵砲かついでオチニでせう、どうぞお察し下さいましなんて、泣いてゐらつしやるのですよ、去年御誕生の坊ちやまがまだお少いのに、もう來月が臨月と云ふお腹抱えて被居しやるぢやありませんか。志願兵にはもう年齢が過ぎちまつてるさうですし、あの立派なお體格ですから、きつと徴られるにきまつてるつて、貴女、あのまア勝氣の奥さんが愚に返つて、おまぢなひだの、信心だのつて大さわぎ、せめて近眼ででもあつたらばと、歸らん愚癡をこぼして被居しやるのですものホヽヽヽ』

『まア』

『ですから、餘り早くから、母ちやまになんかお成り遊ばすもんぢやありませんわ

ね、』

ポンと背中をお打ちなさる。御自分にまだお子様が無いからつて、そんな事有仰るもんぢやありません、と云はうとしたが、止めました。

×

その次の幕間には兄様と、樓上の喫茶店に、卓をはさんで、つゝましう紅茶を啜る。

ナイフは清く煌きつゝする〳〵と紅の皮のまつはりかゝる、林檎むく手元を見いりながら

『今夜はどうも、浮流水雷が多くつて、危險でたまらん』

と有仰る。浮流水雷つて何ですかつて伺ふと

『廊下なんかで、不意と知人に打つかることさ、何に、僕一人なら介意はんけれど

かう云ふ人を引ぱつて居る時にはね』

『あらまあ、お氣の毒さまでムいますこと。そんな人を何故お呼びになりました』

『堪忍してくれ、ハ、、、、。

突然で驚いたらう、僕だつて今度ア試驗さはぎの眞最中さ。芝居どころの沙汰ぢやなかつたんだけれど、急に美いさんに逢ひたくなつた。一寸おつなものぢやないか、かう云ふところで密會するのも』

『あらつ、兄樣は』

ナイフの手を上げて、

『兄樣、隨分でムいますわ。今日なんかお手紙のとゞきましたのが、もうお晝過ぎ、あはてましたの何のつて、支度も何も——だつてだつて、汽車に乘りおくれたら、大變でムいますもの。』

小指の頭にそと髮をかい撫でつゝ、三日目の唐人髷、油氣も失せたるを、彼方に在

す若奥様の、水のたれる様な丸髷見るにつけても、恥かしう。

『電報打たうと思つたんだがね』

この時どや〳〵と傍のテーブルへ、四五人づれの學生が着いたので、あとは小聲に、「マグダ」の上など語り合ふのでした。

鈴鳴りぬ幕は上りぬ足ばやに
ドアおす人の指美しき。

×

『美いさん、美いさん、美いさんたら、おい』

ギユーツと靴の先で絹足袋の甲を、イヤと云ふほど踏みつけられ、はツと、夢から覺めた様に、兄様のお顔を見上げたとき、私はかたくハンカチを兩手に握りしめてゐました、かうして先刻から血走しつた眼をすえて、舞臺の緞帳をみつめてゐたの

か知れません。

場内はもう總立ちとなつて、廊下へあふれ出づる人波、ちら〳〵と揉まるポンネットのゆらめき、紅、綠、紫や、見る〳〵出口は充滿となる。

そつと後へまはつて、夏外套着せかけやうとする手を、

『餘計なことせんでもいゝ』

ハタと拂ひ退けられ、ハッとばかり、手持無沙汰に立すくめば

『おい、歸途はどうするのだ、』

『迎ひがまゐつて居ります筈ですわ、兄さまは？』

『そんならいゝが、僕ア一寸用があるから。あとからお出。失敬、』

ステッキ取りあげさま、ひらりと身を飜して、飛鳥のやうなそのすばやさ。

私も吃驚して、隔つる人をかきわけ〳〵やつと玄關へ。

目早くも迎への車夫は、すぐと姿を見つけて寄つて來たが、つと兄樣が、

『其處らまで歩くがいゝさ、一緒に行かう、』

『えゝ』

スーッと冷たい夜の空氣は、昂奮しきつた頭腦に水よりも心地ようムいました。二人はだまつて、落ちつかぬ歩調で歩き出しましたが、ともすれば靴も草履も躓き勝。

兄樣はあたりを見まはしながら、息吹に鬢の毛のそよぐばかり、私の肩へお口をおつつけるやうに遊ばして、

『美いさん、どうした！』

『はい』

『どう思ふ、何をあんなに泣いたのだ。美いさんに飛んだものを見せて了つた。細君や愛人同伴で、こんな劇を見に來る奴は、餘程鼻の下の長い男さね。好んで家庭の波瀾を求めるやうなものだ。

『さうではムいませんけれど……兄さま、男の方たちは、あんな劇を見せられ、どんな氣持がして被居しやるんでせうね』

『どうつて！　さうさね、如何かい、美いさん、一つマグダの向ふを張つては？僕は牧師か、ケラーか』

『いやな　兄さま――』

『しかし、あの牧師先生は如何かい。氣に入らないか、僕ア好きだよ』

『風采がですか、性格が』

『ウム、兩方ともさ、』

『さうね、牧師樣としましてはね、あゝ有たいものですわね』

大きな黒瞳、ふくよかな曲線をゑがいた肩や胸や、あのキラ〳〵と腕環の光る眞白い兩手を高く差上げた、美しいマグダの幻を追ひながら……。

『美いさんも變化したものだね、かう云ふ婦人問題に、興味を有つやうになつたのだ

から――この以前の「人形の家」の感化が大分あるだらう』

『はい、でもねえ、兄さま、「ノラ」は餘り人間離れがしてゐました。あれは主義の人、意志の人、息の通つた臘細工みたやうに冷たいのですよ。マグダは、マグダは、美しい熱い血が、漲つてゐる女らしい女、女らしいつて、弱いばかしが女ぢやないわ。ねえ、云ひましたわね、戀も憎みも復讐も野心も、貧乏も、ありつたけの貧乏も、それから一番尊い、一番神聖な、母としての愛までも、凡そ女として持つべき感情は、一つ殘らずかき鳴らされたのですよ、つて。

罪惡以上に大きくならなければならない――まつたくさうでせうねえ、兄さま、藝術家なんて云ふものは、』

『併し、我々の家庭において、さう云ふことを應用されちや堪らないからね、矢つ張おとなしい夫人にかぎるんだ。美いさん、お手和らかに願ひます。』

『野放しの小猿のやうに跳ねまはつて居た時代……あゝ「マグダ」にも、そんな時代

があつたんでムいますわね。いま花さんや唉子なんぞが、そんなんでムいますよ』

『いやに先輩ぶつたこと云ふちやないか』

含笑まれた氣配。

『だつて左樣なんですもの、次に來るのが懷疑の時代で、大いに煩悶するんですわ。私なんぞ馬鹿ですから、そんな事は存じませんけれど、でもいつまでも〳〵、少女の儘では居られませんから、ついいろ〳〵な事も考へるやうになりまして、ほんとに世の中がつまらなく味氣なくつて、この上わづらはしい思ひを增すくらゐなら、いつそ尼樣にでもなつて了つて、一生淸らかに行ひ澄ましたいと、しみ〴〵泣かれる事もムいますわ』

『現實の悲哀！　覺めぎはの寂しみ！』

トンと大地を蹴て。

『誰しも一度はそんな事を云ふものさ。すべては結婚によつて解決する、新生涯に

入つて御覽、自然と世の中が面白くつてたまらなくなつて來る。それとも美いさんは僕を愛してはくれないのか！」

聲をひそめて擦り寄らるゝをするりと脫けて、

「でせうか」

紫の半襟に顏をうづめる。

「でも、私はあゝ、私は、私達の未來と云ふものは、春の日の霞が薄れてゆくやうなものですわ。晴れた霞の奥からは、思ひもかけぬみにくい物も現はれてくる」

「こゝには戀と春の日の、いづれ脆きを問ふなかれ、だ。かくて希望と歡喜に滿ちた、初夏の世界となるのではないか。生の意義は奮鬪にあり、古きものに囚はるゝ勿れ、勇しくあれ、つねに新らしく戰へ。天は汝をたすけむ」

いつか日比谷へ出て了つた。強烈な紫色のアーク燈は、森とした公園の夜半の空に、紫の光りを投げてゐる。電車はおそろしい音を立てゝ、眞青な火花を撒き散ら

しつゝ、彼方の闇より現れて來た。

後れし車夫に手を上げて、兄樣は乘れとお勸め遊ばしながら。

「ぢや、これで失敬する。む、もう十一時だ、おそい。こんな事片瀨のお祖母樣がおきゝなすつたら如何だ」

「ほんとに頑固の木乃伊つて、うちのお祖母さんみたやうなのでムいますわね」

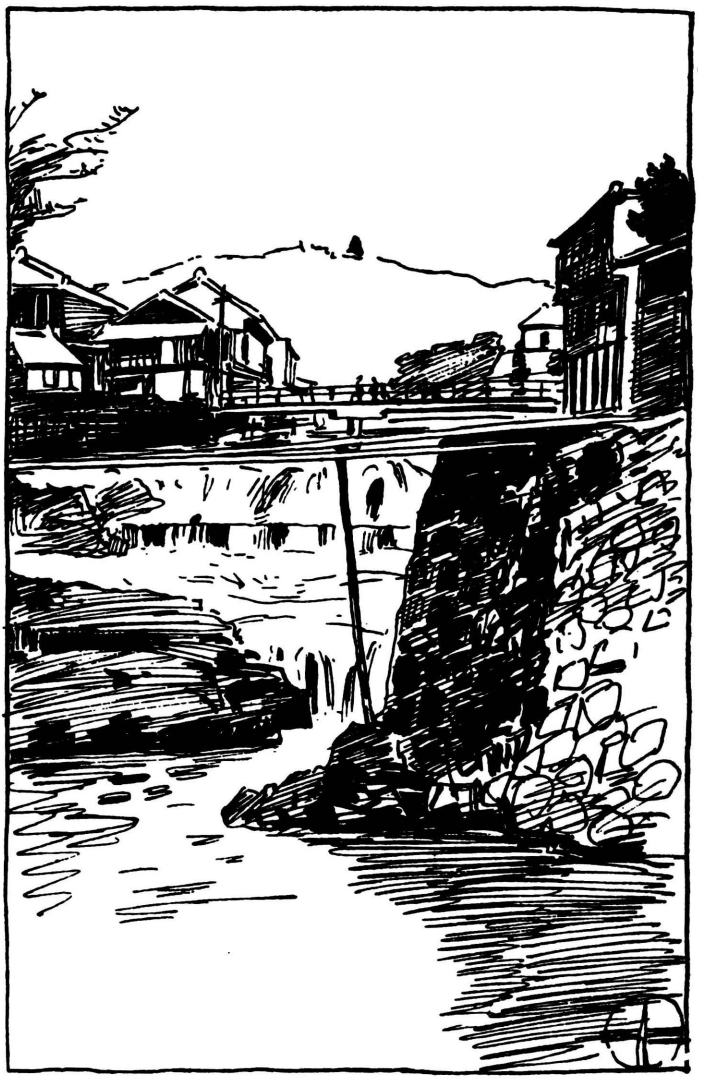
「でもあるまいさ、僕の母なんぞも美佐子さんと云ふ人は、觀音樣の化身の樣な女だと信じて居る。いやその令孃の、こんなところを見せつけられたら、恐らく目をまはすかも計られんね。」

「ホヽヽヽ」

進まぬ乍ら車上の人となつて、

「ではね、兄さま」

「うむ、氣をつけて行き給へ」



『御機嫌よう』

ハタリと幌が下りる。もう一度と振りかへつた時、兄さまはもう彼方向いて、ステッキを空に振つてゐらした。

車夫は肩をゆすつて足も空、鈴の音勇しう。ハラ〳〵と鬢の毛の亂るゝに、ふはり被いだ白妙のベール、ひら〳〵と横さまに靡びいたが、薄絹をとほした夜の世界は、さながら霧の海をわけゆく心地、連なる灯と灯、ゆら〳〵とゆれてもつれて、水に映る燈影とまたとへつべう……。

青葉の蔭

×

兄さま

わたくし悲しうございます、絶て久しく音づれもきかねば、遠い〳〵世界を隔てゝ了つたやうな氣がして……。

あんまり、あんまりでございますわ、如何遊ばして被居しやるのでせう。まさか、御病氣なのではムいますまいね、お筆お執り遊ばすことも叶はぬほどの、御重患なのでムいますか。けれど、また私の御見舞や何かゝ、うるさいと思し召して、だまつて被居るのかしら。それならそれで、さうとさへ有仰つて下さ

れば、別に無理なんか申上げやうとは致しませんものを。不束者、つい、何かお氣に障る様な事でも致しましたのなら、どんなにも御詫申上げますと、この間中からあんなに申上げて居りますのが、御耳には入りませぬか。いゝ加減に堪忍あそばして頂戴な。深い考へがあつてのことではムいません、何でも兄様には、秘密と恥かしがりの心を、取り去らなければならないと、有仰いましたのですもの。ですから、本氣になつて何もかも、有の儘を申上げてゐましたら、口惜しいつたらありはしない、御さげすみ遊ばすばかりで、惡いとこはちつとも敎へて下さらない、いつから私の兄様はこんな、酷い方におなり遊ばして……。そんな兄様なら此方でも、戀しいなんて云ひますまい、と思つても……矢つ張私は弱蟲なのねえ、だから兄様が、わづらはしいとおぼし召すのねえ。

どうせ私は外の方達のやうに、御相談相手になんかなれませんも。重たいお荷

物になりますばかり、たゞ涙のみながれます。

毎夜〳〵露けき草をふんで、幾度門邊にさまよひ出ましたらう、もしやと思ふ心に誘はれて。

浪の音もゆるやかに、潮の香狹霧の如く天地に煙る、甘いおだやかな夢の様な、海岸の夏の夜を、御想像下さいませ。星も輝く薄月夜、一人に惜しき宵なるを。青い紙に青いインクでは、少しボッとし過ぎますが、これは月の光りにふるへる、私の頰の色ですもの、仕方がありません。可哀想とおぼし召したら、御返事戴かせて頂戴な。

こんな事申上げましたつて、また明日にも、行きちがひになるかも知れませんわねえ、はかなき事をたのみにて。

今宵は金星青味帶びて
射る影寂しく胸に入るに

戀ゆるゝ遠情忍びがたく
流れの邊りに啜り泣くよ

行く路難ある旅の空に
黒髪長き子何を思ふ

（行く春より）

六月某日夜

兄上様

みさ

×

あゝ眠い、眠い、昨夜はおそくまで蚊帳の中で、兄さまへのお手紙なんぞ書いて

ゐたものだから、今朝はねむくつて〳〵、まるで黒眼がとろけ出しさう。書棚の上の置時計が、オールゴール賑やかに、「春爛漫の花の色」と鳴り出した。

いつにない事なので、妙が心配して窺きに來たのを、大丈夫よ、死んでなんか居やしないのよ、と云ひ〳〵また眠つて了ふ。今度目の覺めたのは八時過ぎ、流石に恥かしくて、しどけなき寢亂れ姿、セルのねまきの襟掻き合せ、欝金のしごき引締めつゝ、急いで化粧室に入る。

面倒くさいから昨日の束髪を撫でつけてすまし、心ばかりの水白粉。まつたく海岸に居ると、色の黒くなるものね、私なんぞちつとも外へ出やしないのに、この手首なんかの日に燒けたこと。

玻璃戸開け放した椽に立てば、かなり強い日光がつや〳〵と流れこんで、疊の上まで縦横に木立の影をゑがゝせてゐる。素足ちら〳〵、小走りに廊下つゞきの離座敷へ。

「いゝお天氣ぢやのう」

雨が降れば、「邪魔なお天氣のう」とばかり、きまつて有仰るお祖母樣、白無地絹純の布團の上に、花蓆敷いて俯伏となり、附添の婆やに、おみ足さすらせてゐらつしやる。

床の間の大花瓶には、目に泌むやうな白蓮の、徑一尺にも餘るのが、ふつくりとした實珠の莟、ピロードのやうな青傘をそへて。青銅の唐獅子のぱつくりと開いた口から糸のやうに立のぼる香の煙。チリン〳〵と軒の風鈴がせはしく鳴る。

今日は大變御機嫌がいゝ、いつもかうなら嬉しいけれど、どうして私はあんなにお祖母樣のお氣に入らないのでせう。入つてほしくもないけれど、それほどお憎しみがかゝつてゐるのかと思ふと悲しい。君ちやんだつて花さんだつて唉子だつて、お祖母樣のことゝ云へば、ペロリと舌ばかり出して、電氣燈だのハイスペリーだの猫婆さんなど、好勝手な仇名つけ、かげでは眞面目にお祖母樣と申上げることすら

ありはしない、いくら私がたしなめるか知れません。そんな事はちつとも御存じなく、たゞ私の一擧一動を目の敵に遊ばすのだからたまらない。相性が悪いとでも云ふのでせうか、そのまた私がお傍に居なければならないつて云ふのは双方の因果だ。

居間の机にもたれてホッと一息。あゝ今日こそどうしても、兄樣の入來しやりさうな氣がして仕樣がない。この頃バッタリお便りのとだえたはどう云ふわけ、いくらお手紙差上げても、ちつとも御返事下さらないのですもの。また焦らかして拗ねさせて、お笑ひ遊ばすおつもりか知らないけれど、餘りだわ、妹の心も御存じなく……つひホロリとして指環の寶石に食ひついて了ふ。

庭の青葉の戰ぎにも、君や訪ひ來、と幾度胸とゞろかせたでせう。昨夜も一昨日もその前の日も、どんなに〳〵お待ちしてましたらう。半日が半世紀ほども永くつて、氣の狂ふほど苦しくつて、アイスクリームだのお汁粉だのお好きなものゝ數々も、心つくしに取揃へてありましたものを。

もうぢつとして居られない。いまにもお便りがあるかしら、電報がくるかしら、電話が來るかしら、と立つてみたり、居てみたり、椽に出てみたり、座つてみたり。とう〳〵堪らなくなつて。庭に下りて、柿の葉だの藤の葉だの、萩の葉だの手當り次第にむしつて〳〵むしり散らしながら、ふら〳〵と門に出たら、思ひがけない人をみました、まあ珠さんのお兄樣！

人ちがひ？　他人の空似？　いや〳〵さうにちがひないんだわ。ステッキふりふり足ばやに、江の島の方へ過ぎゆく小倉袴の學生を見送つて、思はず涙がこぼれました。

お呼びとめしたい、どうなすつたらう、小母樣のその後の御樣子も伺ひたいと思つたが、どうにもお氣の毒で顏が合せられないのだもの。つと木蔭の陶榻に、くづ折れて了ひました。

婦人の覺醒だの新舊思想の衝突と云つても、私それまで婦人の中に、珠さんのや

うな思想を有つてゐる女があるとは知りませんでした。

愛してくれる兄様も、安らかなベットも、懐かしかるべき生の母御をも振り捨て、はてしなき天の一方をのぞんで、家庭を走り出られた珠さん。

この間文藝協會のズーダーマンの「故郷」を有樂座にみた時、兄さまにあやしまれるほど涙が出て〳〵止めもあへなかつたのは、この友の上に思ひくらべてなので、私などがまだ「マグダ」と云ふ名前すら知らなんだうちに、珠さんはそれに先だつて實行してしまはれた。

けれど、けれどね、兎も角も「マグダ」は、花やかな勝利者として、故郷に歸つて來ましたけれど、珠さんは、あゝ珠さんは、いくら天才があつたとしても。日本ではまだ彼女の樣に成功する餘地も、容れてくれる社會もないんですからねえ。珠さんの前途をおもへば寒心する、墮落か、然らずんば死！。

そして墮落するやうな珠さんぢやないもの、小母樣は珠さんに戀人でもあつて、

それで…と泣いて被居しやるけれど、そんな〳〵方ではありませんわ。

あの方は自我の炎に燒きつくされて、冷たい灰になつて了はれたのですわ、何物にも勝たん勝たんとする努力、かよわい御身の何堪えられやう、意地つ張は不幸ですわ、殊に女の意地つ張は不幸ですわ。無抵抗主義にかぎるのねえ、何も考へず、人形のやうに小鳥の様に、溫和しく愉快さうにさへしてゐれば、私等は幸福で居られるんですもの。あきらめて…どうせ意久地がないんですから、活きてる中は父様や、兄さまの自由にならなければなりませんわ。

けれどたまには、珠さんのやうな女が出ると胸がスッとする。あれでなくつちやならないですわ、口先で叫び立てるばかりなら誰にだつて出來る。いつかこの事を花さんにお話したら。

「和製ときては鼻持がならない。おそいわ、從姉さま、今時分ノライズムなんかに憧憬れてゐらつしやるの。ホヽヽヽ」

一笑に附せられて了つた。けれど、花さんの所謂「自覺したる服從！」そんな體のいゝ遁辭が何でせう。

私は珠さんにさゝやかれて、世態の眞相と云ふものを、のぞいて見たやうな氣が致しました、常日頃無口な珠さんも、どうしたわけか私にだけは、泣いていろ〳〵な話をお打明けなさいました。

もとはと云へば進樣がおわるいのですわ、まだ御結婚もすまぬうちから、珠さんにいろ〳〵お迫り遊ばしたらしい、勝氣な珠さんは、それでピーンとはね上つて了つた。

可哀想な珠さん、珠さんが何にも知らないうち、御夫婦にされて了へば、今頃は可愛い母ちやまにでもなつて被居るでせうに。

心地よい薔薇の匂ひだつて、イヤと云ふほどおしつけて、嗅せられては苦しくなる、幼い時から進樣と一緒に育つた珠さんは、男子の短所や弱點やが、目にあまつ

て仕方がなくなつて了つたんでせう。と云つて進様だつて、御風采はよし、頭腦はいゝし、常識の發達した、申分のない青年で、賞めない人はありませんでした。けれど何しろ進様なんて方がなければよかつた。そしたら小母様も珠さんのお願ひをいれて下すつたかも知れないのに、あゝそこが浮世の義理ほど悲しいものはない。

もと〳〵珠さんの天分は音樂にあつたのでした。天才は所詮家庭の人ではありませんわねえ、誰がわるいんでもないんですわねえ。

悶え〳〵て悶えつくして、走り出してしまつた珠さんよりも、取り殘されたお兩親のお心の中……進様もお可哀想です、隨分御器量のいゝ話ですもの、男と生れて、何の落度もないのに、許婚の君に嫌つて飛び出されるなんて。

年下の珠さんのこの有樣、弱い〳〵私の心も、酷い打撃をかふむらずにはゐられませんでしたけれど——家と家、親と親、とによつて結ばれた、約婚と云ふ束縛の

もとに、是非ない兄様の愛をつないでゐる身かと思ふと悲しかつたけれど、私は私は、つくす誠をむくいて下さらないからつて、お慕ひ申す情に變りのある様な、そんな女ぢやございません。兄様……。

×

後に庭下駄の音がして。

『姉さま、姉さま？　あらこんな處に。如何遊ばしたの？』

馳けよつて、ふはりと肩へ双手を。

クリームの香高き前髪すりよせ、優しい息を頬に吹きかけて、

『如何遊ばして？　え、姉さま、またお祖母様の御機嫌がおわるい？』

『花さん——おゝ仰天した。どうもしませんのよ、まあ貴嬢、何時いらして？』

『只たいま。何泣いて被居たの？』

顔見合せて莞爾しながらも、眞黒い瞳にぢつと見詰てゐる。暑さに上氣て襟元まで桃色に紅らみ、美しい後れ毛が二筋三筋眞白い額へへばりついて。

居眠りしてたんですわ、泣いてなんか居ませんのよ。まだお祖母さまにはお目にかゝつてゐらしやらない？』

『ええ、だつて姉さまが被居しやらないんですもの。妙は裏の方へ探しに行きました。さ、彼方へまゐりませう、姉さまのお室が涼しくつていゝわね、』

庭をまはつて、お縁づたいに室へ入らうとすると、突然首つ玉へ噛りついて。

『あとで、川へ行きませうよ、ね、ね、ね、』

『あれ、うるさいのねえ、お止しなさいつてば。そんなにぶら下つて、重たい人。袖がちぎれて了ふ、あゝ、あれ』

『弱蟲ねえ、姉さまは』

トーンと突き離される、よろめいてバッタリ机の前へ。

『おゝ酷い！　流石は井口女史直傳の、スエーデン式仕込でゐらつしやいます。恐ろしい力、やつぱり自覺したる新人はね、旦那樣と腕力づくでも負けはしないつて！』

『姉さまつたら、人を馬鹿にしてらつしやる』

にらむ眞似。

涼しさうな白地のお召縮緬、帶は黑地に百合の模樣、きりつとお太鼓にして、燃え立つ樣な緋綴子の丸ぐけ、キユーツとしめたのが、何とも云へず配合がいゝ。

繪のやうな新月の眉をひそめて、

『ねえ、姉さま。あの山田のお兄さまねえ、この頃はちよい〳〵片瀨へ入來るんですつてね、さうしてお泊り遊ばすんですつて、ほんとう？』

『そんな事きいて如何します』

『どうもしないけれど、可笑しいわねえ。みんないろんなこと云つてますのよ、さ

うしてお歸りになる時は、藤澤の停車場まで送つていらしつて、彼處でお別れなさるんですつて。姉さまはつまらなさうなお顏して、見送つて被居る。兄さまは汽車の窓からお首出して……」

「一寸、一寸、一體誰がそんな事云ひました」

「それはたしかに、一緒に行つた方が見といけたと」

「イヤだ、あの時一緒に入來た方は吉村さんでしよう。まあ、あの朝だけですわ、藤澤へまゐりましたのは。嘘とお思ひ遊ばすなら、驛員たちにきいて御覽あそばせな。丁度その時は間一髪で、高瀨さんなんぞあの肥つたお身體を、毬のやうに轉げて入來たけれど間に合はなかつたのよ。

兄さまと吉村さんだけは、お得意の機械體操でひらりと飛びのり、プラットホームに殘されて、鳶に油揚さらはれた樣な私の顏が、まだ眼の前にちらつくつて、いまだに笑ひ話になつてますわ。お二人で窓から半身突き出して、何か有仰つたけれど、

わからなかつたんですよ。この頃はもう、兄さまも御試験でお多忙いんですもの、お出になりますどころですか、お手紙のお返事さへありはしません』

『いゝのよ〳〵、そんなに辯解遊ばさなくつたつて、ホ、、、、、』

意味ありさうに顔をみて笑ふ。つりこまれて苦笑を禁じ得なかつた。いつも兄さまが、

『美佐は薄情送つて來ない、迎ひにならば來ると云ふ、送る時には何にもないが、迎ひの時は土産ある故。』

と可笑しな節をつけて、お歌ひ遊ばすんですもの。

ふと花さんの肩のあたりピツシヤリ叩いて、

『おや、取りましたね。花さん、まだ早いぢやありませんか。何時までも肩揚と紅リボンに、離れたくないつて御持論の方が如何あそばして？』

『この頃は早く下すのが流行ますのよ、姉さま。ねえ、可笑しいわねえ、大きな方

がいつまでもくつつけときますとね、お猿サンじみてますわ。ですから學習院の生徒なんぞ、お十七ぐらゐでみんな、』

手眞似して話し出す。白地の紅の疋田絞りで、大きく蝶を飛ばした友禪縮緬、振ひつきたい樣な柄の長襦袢が、眞白い腕へはら〳〵とこぼれかゝつて。

『近頃、彌生町の邸へお出下すつて？　みんなどうして居るでせう、ちつとも便りがありませんのよ』

『あたくし、行かないわ、ちつとも。だつて姉さまが被居しやらなければつまらないんですもの。それにこの頃はあの君ちやんが、學校卒業してから、イヤに姉さまぶつて、ねえ、姉さま。

あなたの妹を云つちやわるいけど、唉ちやんて人も少ぼけな癖に生意氣よ』

何方が生意氣だかわかるものですか、ホヽヽヽヽ。

『さうして妹のくせに姉さまのこと、美いさん美いさんて小憎らしい。でもね、此

頃は私達が、姉さま姉さまつて云ふものだから、それにかぶれて』

『ま、いゝぢやありませんか、其様な事どうだつて』

『可かないわ、女中達でも姉さまのことは、美佐子様つてお名前を呼ぶでしょう。妙だけが内證で「お嬢様」つて云ふんだわね、あら、知つてゝよ、ホ、、、、。あまり姉さまが溫和し過ぎるから、妹におかぶを取られちやつたんだわ、口惜しいつたらありやしない』

末は獨り言のやう。

知るや知らずや花さんの言葉は、一々胸に刺さるやう……。

たとへ事情は何であつたにせよ、「妾腹」と云へば罪の塊ですわ。私は、私は、生の母親を、母と呼ぶことの出來ない身分、よくは記憶て居ませんけれど、お頭を房々かぶさりにして、紅花紐の友仙のお被布着て、大きな泉水と光つた長火鉢のある家で、美しい大丸髷の女を、「まあや」と呼んでかしづかれて居た。

本邸へ引取られたのは、五歳の秋でありましたらう、それつきり「まあや」はどうしたものやら、逢ひたいなぞとは思ひませんが、よく母さまが。

『美佐はいつまで過つても一向なつかないで、困つて仕舞ひます。ほんとに小供らしくもない因循家で……』

などゝお祖母様に云つてらつしやるのをきいて、窓掛の蔭に泣いたこともありました。

咲子が生れてからはなほのこと、成長くなるにつれて、この、人一倍に感ずる妬さ口惜しさ、執念さ、恨めしさ。日蔭者だつた母の思ひを、そのまゝ受けついで來たのですものを。

温和しい姉さまの、氣の好い方のと云はれてるだけ、僞りの笑が苦しうムんすわ、私はいつか兄様の御手に縋つて、足るほど泣きたうムんすわ。この眞情を訴へつくして……。

さしぐむ「涙をせきに」まぎらせつ
『まァほんとに仕様のない人ね、私だつて花さんよりは年も上、牛にも馬にも踏まれやしない。女の生れた家なんて、ほんのかりの宿なんですからね。あらさうでもない、貴嬢なんか、相続娘であらつしやるけれど……』
『あら、厭よ。』
颯と頬に散らす唐紅
高商の秀才で、叔父様のお眼鏡に叶つた人のあるとやら、きくはまことか……可愛き人よ。

蟬時雨

×

昨夜はおそく兄上様と九郎さまのお着、門の扉を割れるばかりに叩かれて、吉村が飛んで出る。あはてゝお迎へ申上げれば、お兩人とも泥の様に酔ぱらひ、呂律もまはらず聲高にわめきながら、どつかり式臺にお腰を落してお了ひなさる、どうしてよいやら、こんな場合になれぬ私と妙とは、オド〳〵顔を見合すばかり。ともかくもお手をとらうとすれば、『アーン、なアに、酔つちやア居ないです、酔つちやゐないと云つたら、酔つちや居らん！　いんや、大丈夫、この通り大丈夫、決して、決して。』うちの親爺は虱か蚤か、のみはのみだが酒飲みだ、アヽコリヤ〳〵』

ひよろ〳〵遊ばすのを左右からさゝへるやうにして、やう〳〵お座敷へおつれ申すとそのまゝ、お袴もとらずに倒れてお了ひあそばした。

日本酒ときたらたゞ一滴でも、ほとんど病的に嫌ひなんだと有仰る兄さま、何處でこんなに召し上つてゐらしつたんでせう、そんな御無理遊ばして、お身體にお障り遊ばすことはないか。夜半に御用でもありはしまいかと思つて、二時過ぎまで妙と二人お次の室に控えてゐた。けれど九郎さまとかけあひに、雷のやうな鼾聲の起るばかりで、別にお苦しさうな御樣子も見えないから、そーつと引下つて來ましたけれど、心配で〳〵、帶もとかずに、妙と一つ蚊帳に、掻巻引合つて、横になつたばかり。颯と吹き入るあけがたの風、ひや〳〵と身にしみて、はッと心着くと、妙はもう傍にゐませんでした。

『明るくなつた』

うつとり、起き直つて、片手をついて、解けかゝつた帶揚の端のこぼるゝをおし

入れなどし、つと紅麻の裾をくゝる。

まだ覺めやらぬ夢の風情、朝靄深う立てこめし庭の面、重げにうなだれた紫陽花姫は、御空の色か濃紫、折々ばら〳〵と梧桐の梢から、水玉のこぼるゝ音がする。

庭下駄ゆるう引かけて、そつと飛石つたい、水々しい無花果の硬い葉が、一ぱいかぶさつてる柴折戸をおしました。

堤はまだ一面の蟲の音で、しとゝの露に亂れ伏した千草八千草、水ぎはの蘆の葉すれ、さら〳〵と銀の絃でもこするやう。

君に見せばや
あかつきの
野徑にさける
百合の花、
露重げにも

うなだれて
清き香りに
酔えるごと。

見ればさもなき
さまなれど
ふるれば落つる
つゆの玉、
ぬるゝ袂は
いとはねど
手折るにかたき
思ひする。

×

『潮高鳴り月落ちぬ、人よ眠りの夢さませ、見よ東の空の色、紅燃ゆる雲の彩、朝の鐘のなり來れば』

いつのまにやらお兩人は、お床の中からさわぎ始めなすつた。つとすりよつて、芭蕉布の襖にとん〳〵とノックする。

『お兄樣、おめざめ？』

『美いさんか、おはいり』

『お早うさま。まあ昨晩はどう遊ばして？　どんなに心配いたしましたらう、御氣分はもうすつかり——あら、何おわらい遊ばすの、妙な方、私の顔に墨でもついてますの？　いやねえ、何おわらい遊ばして……』

九郎さまが眞先にふき出して了ひ、

『昨夜は君等をだましたんだよ』

二人で醉ぱらひの聲色つかつたんですつて、轉げまはつてお笑ひなさる。まあ、あんまり世話をお燒かせ遊ばしたもので、きまりがお惡いものだから、體のいゝことを、獨り可笑しくほゝゑむと、美いさん、ウソだと思ふなら、今一度おさらいして見せやうか、それからこれだ、アハヽヽつて投り出されたのは、江の島名産鮑の粕漬。ホーラ、酒くさいと思つたのはこれの匂ひなんだ、馬鹿だねえつて大笑ひ。

いやだ〳〵、本統かしら、開いた口がふさがらない、デコ坊とヘコ坊と一しよになつてこんないたづら、ひどいわ、ひどいわ、すつかり人をかついで了つて、さぞ重かつたでせうね、九郎さま。ひどい兄さま、おぼえてゐらつしやい。

お勝手へ飛んで行つて妙に耳打をする。

『彌生の春の花霞、花繚亂の野の草に、知らずや人は驕樂の、宴の杯は滿つるとも、』

無心に歌つてゐらつしやる九郎さま、あのお聲で、あの眸つきで、萬人の心を

ヤームなさるかと思へば、憎らしいやうな氣もする。御自身ぢや何にも御存じないけれど、いろ〳〵面白いお話があるんですもの。

この春實業家の堀様へ、お嫁ぎあそばした由紀子様、昨年の今頃でしたつけ、輔仁會か何かで九郎さま見初めて、大變だつたのでムいますよ。ホ、、、まさかそれ故にではないでせうけれど、重い御病氣におかゝりなすつて、私のお見舞に上つた時など、何處をどうしてお手にお入れになつたものやら、あの方のお寫眞をちやんと懐に秘めてゐらつしやるぢやありませんか。驚いてしまひましたわ。

まつたく多勢の公達の中にも、水際立つた若さまぶり。九郎さまなんて、こはらしいお名はふさはない。それこそ光る君とも、匂ふ宮とも申上げたいやう、あらそはれぬ從兄弟同士、お兄様とは御同胞のやうによく似てゐらつしやる。

巳年生れと有仰るから、お二十なんでせうけれど、柄は大きし、利口な方は老けて見えるつて、さうかも知れない。私なんぞお傍へゆくと、お首までしか背がない。

この方ほんとに妙なお癖で、御自分のお兄様方つかまへてまで、『幸ちやん』『鶴ちやん』と有仰るくらゐだから、うちの兄様のことも御遠慮なしに、『四郎さん、四郎さん、』兄様がまた、『九郎さん、九郎さん、』何だか大の喧嘩でもけしかけるやうだ。

冷水浴にとお兩人で河邊へ飛んでおらしつた間に、妙と二人で牛乳やお茶器やを、四阿のテーブルに運んで、お茶がはいりましたからと申上げる。

ほの〳〵と湯氣の立つミルクに紅茶さして、『どうぞ御自由に？』とお砂糖の壺おしやると、ホヽヽヽ九郎さまはよくばりだから、大匙に何杯も〳〵投りこみつゝ夢中になつて兄様とお話しあそばして……。

やがてガブリと一口、『アツ、ブツブツ、ブツ』

いきなりお口直しに、お饅頭つまんだからたまらない。私は飛び退いて、手を打つて笑つて上げた。ホ、、、、九郎さまは金魚のやうに出眼だから、丁度ようムいますのね、鰯でもバクついてゐらつしやれば、砂糖壺のは食鹽で、食籠のは金魚鰯でしたもの、知らぬが佛、い、氣味ね。

お座敷の椽まで追かけこまれて、妙の仲裁でやつと仲直りとなる。

兄さまつてば老獪な、御自分もお仲間のくせに、高臺の見物で、

『九郎さんは食辛坊だからなア、これでちつと懲りるがい、』ですつて。

突出しの十疊へお座布團直して、何のかのと云ひ合ひながら朝飯の食卓にならぶ。

私は白味噌汁のお椀を受取りながら、

『ねえ、九郎さま、幸麿樣はこの頃大變通人におなり遊ばしたさうぢやムいませんか。お眞似なんか遊ばしちやいけませんよ、何だか心配で御座いますわね』

と申上げれば。

『ハ、、、飛んだお門ちがひだ。美佐ちやんは四郎さんの番さへして居れやアいゝんですよ…

『まア！どうせさうでムいませうよ。九郎様にはまた九郎さまで、ちやあーんとおつき申してる方があるんでムいませうからね』

お口のわるいつたら、これですからね。『憚りながら目白臺の健兒だ、院長閣下のお仕込だ』が、お口癖なんですけれど、まさか乃木大將がこんな事を……ホ、、、。

『おい、茶アくれ』

と妙のお盆に渡す時、ついお手がすべつてお茶碗ころがして了ひ、あはてゝ御飯粒お拾ひ遊ばす風つたら……。

食事がすむと現金なもの、お身支度あそばして、お二人ともう御歸京と有仰る。

あんまりですわ、まあ!!!九郎さまが廊下へお立ちになつたあと

『兄樣』

とお手に縋つて了つた。

『仕方がないよ、逢ふ者は別れなくつちやならない。何かい、泣くのか！馬鹿、馬鹿、九郎に笑はれるぞ。ね、すぐ來るよ、二三日中にゆつくり來るさ。ウソぢやない、ね、美いさん、僕の卒業のお祝ひに何くれる、僕は何をやらう、え、指環か、時計か、人形か、毬か、』

「まあ、兄さまつたら……』

俯く袖にホロ〳〵と散る涙。

『ホラ、九郎だ。お退き〳〵』

はツと放れて、次の間へ出る。何お話する暇もありやしない、申上げたいこと、伺ひたいこと、胸一ぱいで、息もつまるほど苦しい、切ない、九郎さまなんぞいらつしやらなければいゝのに……。

『美佐ちやん　美佐ちやん、や、どうしたんです、』

お人のわるい九郎さま、づか〳〵と此室へはいつてゐらした。

『美佐ちやん、昨夜は弱つちやつたんですよ。僕ア御免だ〳〵、戀の二人の嘘言を、きゝに行くほど憐な子にはなりたくないと云ふのに、片瀬饅頭おごるからなんてね、』

『オイ〳〵、何を云つてるのか。まるで反對だ。僕ア終列車で歸ると云ふのに、九郎さんが何でも寄つて行かうと云出して、きかなかつたんぢやないか』

『エッヘン、うまく云つてるぞ。片瀬には大きな磁石があるくせに。ねえ美佐ちやん』

大わらいになつて了ふ。

送り出でたる門の扉に、左手さゝえて打ち傾きつゝ。

『九郎さま、またいらつしやいましね、ぢきに新のお甘藷が出ますからね、』

『馬鹿にしてるなア、鹽湯の上にまた唐辛湯なんぞ利き過ぎますよ。安心なさい、

もうお兩人のお邪魔になんか來ませんよ、恨まれるからね』

『まあ、お察しがようムいますこと、ホヽヽヽヽ』

見かへり給ふを、つとかくれ入る門の內。なまじお別れを惜しめばこそ、かへつて辛さも增すことゝ、弱い心を鬼にして……兄さま、お察し下さいまし。

木立には降るやうな蟬時雨、ふと仰ぎみる黑塀の上、まつはり咲ける凌霄花の、日も彩に輝き渡りたる、午後の暑さも偲ばれて……。

雲の峰

『お嬢――美佐子様、あの本邸のお嬢様方が、お着き遊ばしまして御座います』

妙の注進につゞいて

『お姉さま、まゐりましたよ』

『御機嫌好う、』

よく似合ふ活潑な洋装で、長い黒髪を眞中から合け、水色リボン大きく結んだ天使の様な唉子の後から、つゝましうピタリと敷居ぎはに手をつかへる君ちやん

『ま、早かつたねえ、お暑かつたでせう？　よくねえ、お待ちしてましたのよ、あゝ』

と取り上げた絹團扇で、分つやうに風を送りながら、

『御苦勞様ですけれど、そのまゝですぐお祖母様のとこへ、ね、此方はあとでゆつくり、』

『ま、相變らずだわねえ』

『戰々兢々としてゐらつしやるのねえ』

『でもまア仰せにしたがつて、』

『御天氣を奉伺してまゐりませう』

などゝ笑ひながら、バタ〳〵とお離れへ行く。

しばらくしてから私も伺ふと、お祖母さまは久々で兩人に逢へたお喜びより、妙齡のものをば附添もなしで、よこす母様も母様なら、迎ひの者も出さぬとは不注意きはまる、と婆やに向つてくど〳〵有仰つてる。

それは私も惡う御座んしたけれど、汽車の時間も待らなかつたし、其んな、其ん

な、君ちやんだつて女學校まで卒業した、早生れの十八と云ふ年ぢやありませんか。二時間や三時間の旅の出來ないやうな……あんまり人格を無視して被居しやる。

よせばいゝのに咲子が、

『ほんとにねお祖母さま、この頃は惡書生が横行するんですよ。ですから私も學校の歸途は、いろんなお稽古にまはつておそくなるでせう。伸と定めて了ひましたのよ。電車なんぞこはくつてね、後を尾けられたり、手紙を入れられたり……名前を知られさすと面倒ですから、』

これが十五の妹の云ひ草、小憎らしくつて……

『小ぼけな癖に、おしやまさんばかりで、目に立つやうな風をしたり、ヴアイオリンを下げて歩いたりするからです。姉さま達のクラスの方は、卒業するまで一人だつて、そんな事有仰つた方はありませんでしたよ。君ちやんなんかどうだつたの？』

『それはさうですよ、君ちやんとは學校がちがひますわ。御覽あそばせな、ホラ姉さまも御存じの鶴子さん、芳枝さまのお妹さん!? あの方なんぞ先天的防禦式に出來上つてるんですからね、一種の保護色ですわ。その代り學校で、姉さまになんかなつて下さる方は一人もないのよ。』

『さうでせうよ、どうせ姉さまなんかあつたつて、何にもならないんぢやありませんか。』

當てこすつてやつても平氣な顏で、もう他方向いてコチロンかなんか歌つてる。咲子にもあきれて仕舞ひます、紅の花樣とか、紫リボンの姉上へとか、ダリヤ樣、コスモス樣、白露になやむ芙蓉子、姉なる百合の女にまゐる、なんだのかんだのつて、あんな符牒でもつけておかなけりや、おぼえ切れないのでせうよ、筆跡ときたらカラッ下手、鳥の足跡みたいな字を書くくせに、繍刺のエハガキだの、絹地の封筒だのつて、そのくせ別れてゐても私へは、端書一枚くれたこともないんですもの。

たまには恨みがましく云ふと、

『ホ、、、、姉さまだつて、壓制的にさう思はせられてゐらつしやるんでしよ。ねえ、姉妹の愛なんて、そんなに信じられるものではなくつてよ。私、思ひますの、多くの中から意氣投合して、誓ひ合つた友達こそ、眞の慰藉者とも相談相手ともなりませうけれど……』

紅い唇食ひそらして、なか〳〵二の句はつがせない。氣を變へて

『あとで二人ともお召替なさいよ。お祖母さま、御免あそばせ。』

つて座を立つと

『私も一寸、』

と君ちやんがあはてゝ、紋お召の上前ふまへながらついてくる。

『あたしもよ、姉さま。おや、紫陽花が美麗ねえ、まるで紫の雪を丸めたやうだわ、暑い時分に雪も可笑しいねえ、さう〳〵、昔のお姫樣が、前髪にさす簪みたいだ！

ねえ、お祖母さま。あら、蜻蛉、めづらしい赤蜻蛉』とんぼやとんぼ、とべよやとんぼ、とんぼのすむのを見渡せば、』

咲子は幼稚園生のやうなさわぎ方。

やがて中形モスリンの裕衣に着替へ、緋縮緬の兵子帯クル〳〵巻、呼びとめるまもあらばこそ、チン〳〵モガ〳〵しながら椽側を馳けて行つた。

『お姉さま、私はもう本郷へ歸へられないのです、當分此方に置いて戴くんですよ、』

君ちやんは肱かげ窓に身をよせて、力なくうなだれ

投げるやうに云ふ。

『あゝようムんすとも。けれど一體どうしたつて云ふの？』

『稲と喧嘩をしたんです』

つて淋しく笑ふ。稲はお母様がお氣に入りの仲働きの名である。

『まあ、どうしてね。君ちやんにしちや珍らしいわ』

『兩方がわるいんですよ、』

と袂の先もて膝をたゝきながら

『それで伯母さまが、片瀬へ行つた方がいゝだらうと有仰るものですから』

『さうね、この暑中でもすませたら、私はそろ〳〵東京へかへらなければなりませんし、すると片瀬へは、早晩貴嬢に來て戴かなきやならないのですから』

『ホラ、伯母樣の有仰るのもそれなのでせう、ですから私、悲觀してるんですわ。お祖母さまも珍らし物好きだから、最初のうちこそいゝでせうけれど、永くとなつたらとても〳〵、私にはお姉さまのやうに、つとめることなんか出來ないのですもの。あゝこんな事なら』

首をちゞめて

『今年學校卒業するんぢやなかつた。もう一年停電して、運動場の遊動園木でも、

ゆすぶつてる方がましでしたわねえ』

『享樂主義なんかおよしなさいね、女のくせに。そんな事では、いゝ奥さんにはなれませんよ、』

ホ、、、、と笑ふ。やがて君ちやんは小さく、

『でもねえ、お祖母さまももう、永いことはないわねえ』

『さうよ、貴女だつて外へ嫁かなければならない身分ですからねえ、ぢきですわ。もうわづかよ、お祖母さまのお傍にゐられるのも』

わざと大きな聲で云ふ。君ちやんが立つて襖を開けると、つと裏廊下へのがれた人影があつた。婆やだ、きつと、これですからね、油斷も透もなりやしない。告口と云ふことしたら、何處がどうなのでせう、お祖母樣がおよろこび遊ばすのかしら。まさか老婢風情に眞身の孫をそしられて、いゝ心地はなさるまいと思ふのに。

咲子の交際家つたら、一寸外へ出るともう書生サンを二人引ばつて來た。お花を

上げませうつて、裏の花畑でキャッ〳〵とさわいでゐる。まあこちらへお掛け遊ばせと妙に云はせる。細くて背の高い方が紺飛白、低くて丸い方が白飛白、紺メリンスの兵子帯に手拭ぶら下げてるところや、蟲聲はり上げての高笑ひ。どこやらにまだ「三四郎」さんの面影が、殘つてゐると思つたら、去年七高から上京されたのだと云ふ。大學生もまだ一回生や二回生、角帽を有たがつて、冠りまはつてるうちはしほらしいのねえ。

避暑と云へば體裁がいゝが、實はお寺の座敷を借りて。二人で自炊して居るんです、毎日極端から極端の飯が出來て困るの、何とか君は獰猛に辛い物ばかり食はせるの、味噌汁一つ拵らへるつたつて、摺古木と摺鉢と衝突して、板の間一ぱい轉げまはり、叩いてるのか摺つてるのかわからない、などゝ眞面目くさつてお話なさるので、君ちやんが奥の間から失笑して了つた。つやゝかな桃割と、仄白い顔が、團扇のまに〳〵葭戸を透して動いてみえる。

お洗濯なんかも御自分でなさるのだと見え、糊粕だらけの竿形に肩の突ばつた、妙な恰好の着物召してゐらつしやる。妹に切つて貰つたダリヤを澤山持つて、水色の廂の座布團に腰を浮かしながら

『失禮ですが僕、丁度いゝ折ですからお嬢さんに、おたづねしたい事があるんです』

と云ふ。

『まあ、何でムいますか』

『昨年の十一月ですが、日光へいらつしやりはしませんか。この間中からお噂して居りますんですが、その、此家の令嬢はたしかに何處かで、お見受した事があるにちがひないつて……』

ホ、、、、恐れ入りますわねえ、そんな事もあつたか知れません、と含笑めば

『そら、どうだ、君、』

と白飛白をかへりみつゝ勢こんで

『貴嬢、その時紫の袴はいて被居たでせう』

『いゝえ』

『失敗たなア、これや鹽煎餅の十錢がとこ』

と頭かき〳〵。

『え、何ですつて』

『否、何、此方のことです、』

ドギマギまごつく。聞けば一人は私をどうしても中禪寺湖畔で見かけた令嬢だと云ひ、一人はさうでないと云ひ張り、互ひに爭そつた末とう〳〵、お汁粉と鹽煎餅の賭つこしてゐた、と白狀なさるのでまた大笑ひ。

至誠堂のアイスクリームが飲みたいの、一高屋のおでんが美味しいのつて、食辛坊な、併し無邪氣なお話。私、紺飛白の方へ『一高生の下駄』つて仇名を考へて上げた。カラ〳〵してほんとに面白い方。

『お見事ですね、お宅ではいろんな花が――あれは何です』

とこれはやゝ落ちついた白飛白の方。

指さゝれた花壇には、眞紅な虚美人草や松葉牡丹が、妖艶火のやうに輝いてゐます。棧の棺にふうはり浮んだ白雲の一團二團、動くともなく悠々南へ南へ……。

まとへる綾羅色をわかみ
透いても見るや玉の腕
葉がくれ桃の實探りよるか
人目を煩らへ腕見ゆと、
姉戸に呼ばへる聲を聞きて、
垣間見とれしを誰と知るか、
妹よ

月下の宴

×

『姉さま、姉さま、また入來つてよ』

空には一朶の雲もない好天氣、さゆらぐ青葉の梢から、綠の雫滴りさうな、つや〳〵しい栂の椽を、滑るやうに馳けて來た二人。

兄樣に朝のミルクをおすゝめしやうと、お盆捧げて立出た私は、突然左右から飛びつかれて、

『まあ、何事なの。あら、あぶないわ、何が如何しましたつて？』

『だつて、入來やいましたのよ、何よ、廣子叔母樣よ』

『呀、さう』

『大變ですのよ、御盛裝よ、まるで田舍藝者かなんぞみたいよ、ねえ、君ちやん、それは〳〵大變……』

『さうなのよ、姉さま、さうしてね、』

『また、其樣事云ひますか』

『それだから、姉さま、不可いのよ、廣子叔母樣は姉さまの何なの？　紙一枚お世話になるのぢやあるまいし、何も此方から御機嫌取遊ばすには當らないわ。一體生意氣なのよ、此方へは御挨拶もなしで、直ぐとお離れへお通りになるなんか、踏みつけた仕方だわ。しつかり遊ばせよ、貴嬢は此家の御主人ぢやないの！』

『主人ならなほ、禮儀を失なつてはなりませんわ』

『いゝわよ、兄さまの御用がありますからつて、お逢ひなんかなさらない方がいゝのよ』

『何ですね、そんな端たないことを。』

目を落す、眞白いカップからはユラ〳〵と髪の毛よりも細い湯氣が立ち騰つて：：ふと顔を上げると、こゝからは、大きなユーカリの葉蔭れになる、兄樣のお室の窓の、純白のカーテンがする〳〵と上りました。

廣子叔母樣と申上げるのは、大叔父樣のお子、お祖母樣のお大切な姪子樣ですわ。この春お國の女學校を卒業あそばして、遙々御出京になつたのでした。九月から女子大學へおはいりになると云ふ。

いまは鎌倉の某氏の別莊に、乳母と侍女とにかしづかれて、御避暑中の御氣樂な身の上。何しろ七人の御兄弟の中に、たゞ一人女と生れて、御兩親の御寵愛を、身一つに集めてゐらつしやる方ですからたまりません。君さん花さんともうスレスレで、闇々裡に鎬をけづり合つて祓居しやる。

花の樣な淡紅色紋紗の長襦袢、紺地へ白で格子をあらはし、上に極く薄い銀鼠で

二の字絣を織つた絽お召に、お納戸色の丸帯胸高う、お髪は桃割、五日目の朝毎、四時半に起きて、新橋のお千代のところへ、汽車でお髪上げにお通ひ遊ばすとか。最も最初はあまり奇抜な大廂にしてゐらしッたのを、可笑しいつて君さんの笑つたのが、いつかお耳に入つたとやら、それから意地をお立て通し遊ばすのですから、恐ろしいことですわ。

富子　額の爪宵顔、色の淺黒い、お鼻の高い、江戸式のキリッと遊ばした、そしてお背の高いことは、着丈の三尺七寸も召すさうで、お年はお十九。

『この頃はお兄様も御一緒ですさうで！』

ローズの香高き手巾をもてあそび給ふお手には、また新らしいリングが光る。

『ええ、もう皆んなさわいで、叱られてばかり居りますのよ。この上二十日過ぎからは、また唉子が一人増えますのですからたまりません。さうしますと兄は、木賀の方へまゐります筈ですけれど……は、兄ですか、お陰様でまあ名譽な卒業式のお

席へつらなることが出來たと云ふものでムいますわ。は、法科ですの、あら、お冷かし遊ばしては厭、廣子樣、けふは御緩くり遊ばせね』

×

お晝餐は折角食堂へ用意して、みんな揃つて樂しく戴かうとしたのに、廣子樣、お兄樣にお目にかゝるのが厭、と有仰り出して、どうしてもお出下さらない。何とお願ひしたつて動きなさらばこそ。

仕方がないから、兄樣に退いて頂いて、やう〳〵お招じ申すことが出來た。もう花さんは焦れ切つて、まあお行儀のわるい、テーブルに凭りかゝり、ナイフの柄でコト〳〵卓を叩いてるし、君さんは君さんで物云はねば、兎もすれば皿を滑るフォークや、スープを喫る音のみ耳に立つ。

『林檎をおとり致しませうか、バナヽがよくつて？　おや廣子樣、果物召し上りま

せんの』

『失禮致します』

いち早く席をお立ちになつた廣子樣の、後姿見送つて兩人は舌打しつ。

『ネエ、あんな方を小姑にお持ちになつた廣子樣の嫂樣は、さぞお辛いことでせうねえ』

『お兄さまは一人つ子で被居るから、姉さまはお幸福ねえ。小姑の御心配なんてないのだもの』

と花さんは、白い指を傳つて流れる、水蜜桃の雫を吸ひ〳〵。

『でもねえ、私のやうな者に、お姑さまの御機嫌がとれますかどうですか。此方の眞償を貰ひかぶつて被居るんですからね、期待にそむくと云ふことはつらいものですよ』

心細くほゝ笑めば

『あら、だつて別居遊ばすんではないんですか』

『それは、兄様はさう有仰るんですけれど……』

それでは御兩親にすみませぬ。何の、兄さまのお母さまですもの、命のあらん限りはどんなにもお仕へ申します。私は御一緒に居たうムいますつて申上げたら、君がそんな心配しなくつたつて可い、と叱られちやつた。

私が可哀想故と、案じて下さるのは嬉しいけれど、御兩親の膝下を離れて、お氣兼がなくなるとまた梅子さんの旦那樣のやうに、勝手な眞似でも遊ばしはしまいか、と餘計な取越苦勞に胸も痛む。妙がパタ〳〵走つて來て

『美佐子樣、美佐子樣、あの郵便局からお呼び申しにまゐりました。お電話でムいますつて！』

×

花さんが眞先に、

『兄さま、兄さま、兄さまつてば。入つてもようムいますか、』

ノックも忘れ、ドアおし放してつと入れば、長椅子にうと〳〵座睡つてゐらした兄さま、吃驚手に持つノート取り落して。

『何だ、美いさん？　君ちやんも花さんも、そんなにせい〳〵。また植込から蛇でもぶら下つた椿事かい』

『いまね、伊達さんから電話でしたの。伊達さん達、自働車でもつて、こゝへ遊びに入來るんですつて。もう間がムいませんわね、兄さま、兄さま、私困つて了ひましたの、どう致しませう』

『フーム、誰と誰とが來るのだ』

『伊達さん御兄妹に晴雄さまでせう、それから原田さんが來合せて被居いますつてね、御一緒ですつて』

『ようし』

バネ仕掛のやうに起き上り遊ばす。

私達は姿見の前にあつまり、

『お揃ひにしませうね』

つて三人ともお對の大柄な竪縞モスリン、帶はめい〳〵おもひ〳〵の。ふくつり撫でつけた束髪に、眞紅のリボン蝶ととまらせて。

一時間の後には、手落なくお待受の用意とゝのへ、兄さまのお室へあつまつてると、忽ち虎の吼えるやうな警笛が響いて、速風の如く物の飛び來る氣配。

あらお着きになつたのよと、急いで玄關へ馳け出すと、いま門内にとまつたところ、ギヤソリン瓦斯の強い臭氣は、むせるやうな草いきれの白日の庭に散じる。

綾さまは車上から、夏手袋に包まれたお手を上げて、純白なヴエールかゝげて莞爾、キラリと金の横挿が輝く。いつものマガレットではなく、涼しさうに束髪に上

げて被居るので、急に落付あそばした。

原田さんはまあ見ちがへる様な、御新調の黒紹のお羽織、波光平のお袴、法學士になるとちがつたもの。角帽の廂の下から、例のお優しい眼に笑を含まれた伊達さん。小倉袴を短つかくはいて、黒鬼の様な毛脛をあらはしたのは、つひこの間一高の卒業式を、すましたばかりの晴雄さん。

御遠慮なくぞろ〳〵と奥へお通り遊ばす、

私たちは三人がゝりで、綾さまの半コート脱がせて上げて、後ればせにお座敷へ行けばずらりとお並びになつた皆さま、餘りお澄まし遊ばしておらつしやるもので、可笑しくつて仕方がない、これぢや何だかお見合のお婿様みたやうだわ。まあその窮屈袋でもお脱り遊ばせな、お着替を差上げませうか、つて伊達さんや晴雄さまには、兄様のお單衣をおすゝめしたけれど、原田さんはいつもお人がわるく、私達をいぢめてばかり、憎らしいからわざと女物を持ち出したら、オホ、、、大人道のや

うにお背の高い方が、三寸五分の大丸みゝ振の長い肩揚のある、モスリン中形ぬつとお召し遊ばした風、一たまりもなく失笑して了つた、あまりお可哀想故取り消して、外のと取り替えて上げる。

晴雄さまは何方向いても、お目出度うお目出度うつて大もて、この方はお顔が長くつて、おまけにお頭の先がどんがつてゐて、「瓜、瓜」と云ふ仇名でしたけれど、この頃お色は真黒だし、大變お肥りあそばして、まるで大砲の砲丸に着物着せたやうですわ。

冷したコ、アにレモン浮べたのを、美味い〳〵と息もつかずに、三杯まで召し上つて、太い指先にジヤム入カステイラをつまみながら、ケロリと床柱の活花を見て被居る。

晴雄さま、お大切な模範帽はどう遊ばして？　いよ〳〵お別れ遊ばす時節がまゐりましたのね、と申せば、うむ、あれは家にとつてあります、入用ならいつでも見

せて上げますよ、と真面目顔でアライヤだ、あんなもの見せて戴いたつて仕様がありません、随分蟲のいゝこと云つてらつしやるのね、ホヽヽヽ

何しろ入寮當時流石の中堅會の連中を驚かして、「〇寮の模範帽」と推奨されたゞけある、なんぼ御親友のお遺品か知らないが、色と云つたら狐色を通り越して、眞青に燒けちまつて、あのとんがつた先の當る天邊は、もうボロ〳〵になつて、よく三分刈が顔を出してましたつけ。

その模範帽冠つて、年中お尻に大きな式紙のあたつた古制服親指のあとのへつこんだ朴の木下駄、カラ〳〵させてゐらしたのですから、何處へ行つても敬遠されお姉さまなんぞ、後生ですから外出する時は、人並の風をして來ておくれ。外家へ行つてあの晴雄さんの穿物が、ちやーんと揃へられてあるのを見ると、冷汗が出ると有仰つたさうな。

でももう今年から醫科へおはいりになつたらば、どんなハイカラにお成り遊ばす

か知れやしない。花さんてば、

『姉さま、私醫科の方つて嫌ひ、何でも物を解剖的に見やうとなさるから嫌だわ』

とそつとさゝやいた。

『左樣、晴雄さんが何か有仰つて？』

『いゝえ。晴雄さまがぢやないんですけれど、醫科の方つてみんな左樣なんですもの、ですから、

伊達さんが兄樣に、

『何有、綾の奴お轉婆でね、自働車に乘りたい〳〵つて云ふもんですから』

『あら、嘘ですのよ、兄さまこそ子供みたいに、自働車〳〵つて大さわぎ、どうでせう、三越から玩具のを買つて來て、座敷中走らせて嬉しがつてるんですからねえ、とう〳〵今日は赤坂の伯父樣說きつけて借り出したので』

妹樣も負けずにすつぱぬく。

『まア御兄妹喧嘩はお止し遂ばして。これは私がお預りに致しませう。ホ、、、』

×

『おおい、舟が出ちまふぞウ――』

お呼びになつたのは晴雄さまでせう、エールにきたえた蛮聲が、川面一ぱい響き渡りました。

『はーい』

と聲を揃へて、此方からは透きとほるやうな御返事、畑つゞきの夏草茂る小徑を分けて、河畔へと馳け下りる。

大きな青柳の蔭につながれた二艘のボート、お隣家の丹波さんから拝借した、綠色濃き小形の方へは晴雄さまと兄さまと綾さまと私、白色塗の丸つこい方へは、原田さんと伊達さんと君ちやんと花さんと。

ホ、、、、可笑しかつたのは廣子樣、いつか待女の八重と二人で、このボートの中へおはいりなすつて、ぐら〳〵ゆすぶつて被居る中はよかつたが、どうした事やら綱がほどけて、スーと岸を離れてしまつた。

あら大變〳〵と、あの大きなお身體で、二人同時に、同じ方へお立ちなすつたから堪らない、たちまち船體は横になつて、眞逆樣にドブーン。

新しい絣お召も、繻珍の丸帶もづぶ濡れ、お髪からだら〳〵と泥雫をたらし乍ら、お隣りの書生サンに助けられて上つてゐらしツた時には、河中の怪物かと吃驚した。さだめし極りを惡く思し召すだらうと思つて、けふはわざとおすゝめしませんでした。

嫣然と小首をかたげて、あちらのお船と含笑み合ふ綾さま、大きな經木の海水帽まぶか、ふくよかな顏のあたりを、きゆーつと水色のリボンで結んで、黑髮のこぼるゝ額をかき上げかき上げ。

『うれしいのね、お美い姉さま』

兩岸の青蘆さわ〳〵。背筋高う結び上げた君さんの緋繻珍が、耀くばかり眼を射つて、日に光る紫のパラソルは、色ある影を水に映しつ。

花影たゆる川隈の
岸の若草踏みゆけば
情あるかなよき人の
春慕ひゆく屋形舟

琴の細緒に指おちて
唱歌の聲のおこる時
龍頭鷁首水を蹴て
櫂にきらめく波の玉。

玉をまろばす朗吟の聲。
聲が眞紅の唇に
響きてさゆる清しさは
花を碎いて羽叩く
伽陵頻伽の音色あり

ピカリ〳〵とオールをかへして、靜かに川上へさかのぼります。人は見るとも又がすみ、靉く岸は草深し、眠るとならば頬をあて〻膝にねなまし妹よ……。

×

烏帽子岩へ行きたいなア、何、船の支度が問に合はん？、大丈夫、船頭なんざ、僕がこの毎年利根川へ遠漕の手並で。と晴雄さましきりと鐵腕を叩いて彼居たけれど、綾さまと私とが、海には弱いと云ふのできゝいれられず。

純白と紅と濃紫と水色の洋傘が、くるり〳〵とまはされて、今度はクリームの廣子様のもまじつて、簇々と熱砂を踏みつゝ一行九人、平凡だけれど江の島めぐりときまる。

せまい坂路の兩側から、飛び出して來る宿引ども、行途の大地にへたばつて、いつもながら通行の妨害をする。ホヽヽこの間、吉村さんを御案内して、兄樣と三人、岩本樓へ御飯を食べに行つた時、格子縞のセルの單衣、紹絅縮の羽織着て、日本髪に結つた私の姿を何者とも判じかね、お孃樣とも奥樣とも云はず、「あのお方」でおし通した女中のこと、……獨りで笑ひたくなつて、綾さまのお肩へ顔を伏せた。

何の御願望やら廣子さまは、一々社前にぬかづいて祈念を凝らされる、當世のお若い方には珍らしく御奇特なことゝ思ふ。花さんは耳に口をおつけて、

『姉さま、廣子叔母樣のお賽錢は二錢づゝですのよ、珍らしいはね。きつと良緣の御祈願なのですよ、ですからね』

笑ひ乍らさゝやくを、振りむいて御覽なすつた廣子樣、石段を踏みはづして、アツと思ふ間もなく持つて被居たオペラバッグは、一間も先へ投り出されて、大地へ兩手をつき、私等が馳けよつた時はもうお起き上りになつたけれど、前後から來かゝつた人々は、わつと聲を立てゝ喝采した。晴雄さまも原田さんも失笑して了はれた。さア大變、

『まあ、惡い石段ですわね、あぶない事、お怪我は何處も？』

お袖の塵など拂はふとすれば、くるり後向いて、

『人を馬鹿にして、御自分たちさへよければ、人の穿物のことなんぞ、どうだつてかまはないのですからね』

成る程飛んだことをしました、自分達はボートから上陸たまゝの麻裏ばきで、ちつとも氣が着かなかつたけれど、廣子樣お一人、南部表の黑塗臺、繻珍鼻緒の大層立派なもの召してゐらつしやるので……。

『あら、つい心着きませんで……御免遊ばせね、まつたくその故でしたのね、さぞお歩ひにくかつたでせう、早く有仰つて下されはよかつたのに、』

『おかけ遊ばせ、お休みなすつていらつしやいまし。榮螺の焼立が御座います、名物壺焼召し上つていらつしやい、江の島の路はお下駄ぢやア御無理で御座いますお草履と召し替えていらつしやいまし。おかけ遊ばせ、お休みなすつて』

口々に呼び立てる聲はかまびすしい何時もこの通りなのだけれど、折が折とて今日は嘲弄でもされるやう、廣子様より此方が泣きたくなる。

『まあ、お久しう、酷いお見かぎりでムいましたね、若旦那様。今日はまたよいお天氣様で……』

兄さまと私とは、一寸此茶亭のお主婦さんが氣に入つてるので、さして美人と云ふのぢやないけれど、澤々しい大丸髷、スーツとした襟元に水が滴れさうで、白と淺黄と辨慶縞の縮の浴衣に、黒繻子の引掛帶、しなやかな腰を二重に折つて、揉手

しい〳〵。

×

辨天の洞屈を出でし一行の、先に立つた廣子樣は、

『あのねえ』

と誰に有仰るともなく、振り返りながら後の人達に、

『ねえ、昔から辨天樣つて云ふものは、二人でおまゐりするものぢやないと申しますわね』

とぐるり見まはしても、何誰も御返事なさらない。あまりお氣の毒だつたので、おなぐさめするつもりで、

『さうですか、ぢや今日は大勢でしたからようムんしたわね』

『否、さうぢやありません、同伴のあるなしにかゝはらないわ。辯才天は嫉妬ぶか

い女神ですから、御夫婦づれだの相思の男女だの、そんな方たちがいけないのよ。まあこの連中にはそんな方がなければよござんすけれど』

『そんな事有仰るもんぢやないわ、叔母さま。嘘ですよ、嘘ですとも。皆さん、この頃はホネームーンの方たちが、いくらもお見えになりますのよ』

『あれ、そんなら見て被居しやいまし。事實もう三年過たぬうちに、必ずお別れなさらなければ、ならない様な事になつて了ふんですつて。これは昔からの云ひつたへださうです、迷信だつて何だつて、いけないと云ふことは、しない方がようムんすわね、縁起をかつぐわけぢやないけれど、外の事とはちがひますから』

『そんなら左様と、何故前に教へて下さらないんです、姉さまの被居しやることは御存じのくせに。貴女はみす〳〵人を不幸の淵につき落して、傍観して居やうと有仰るんですか』

と花さんは躍起となる。

『かまふもんですか、ねえ、姉さま、其様、神様のくせにいけない神様、澤山見せつけておやり遊ばすがいゝわ。未來の〳〵先までも、死んでも貴郎の妻ですよ、だわネエ』

『左様〳〵、君子さんはエライネ』

原田さんがまぜつ返す。笑ふ時でも眉の間に皺をよせ、苦蟲含んだ様な人好のわるい七六づかしいお顔の原田さんと、お背もお頬も丸まつちく、ニコ〳〵遊ばした伊達さんとはほんとに、好いコントラスト。

見上げる様な斷崖の半腹を傳はる一條の細逕、波は碧玉の色に透きとほつて絶壁の根を洗ひ、輝ける深碧の海上はるかに、習々と渡り來る風の涼しさ、裾も袂もはら〳〵と。思はず髪に手を加ふれば、滿山の青萱みなさわ〳〵と煌きウネりつ。

歸途を待ちかまへてゐたやうに、擁し來る潜水夫の群、晴雄さまと兄様が大聲叱咤もその甲斐なく、榮螺を買つてくれろのホーヅキを取らしてくれのと何處までも

しつこく尾いて來る。綾さまはお顔かくして、かたく私の手にからまつたきり。

×

見晴しのよい金龜樓の樓上、女中が直す郡内の座布團の上へドツカとばかり、あゝ草臥た、と口々。

綾さまはひとり亞字欄にもたれ、オペラグラスをくる〳〵まはして、あれ、あの行合川の川端に群れてゐる、鴎の足が紅くつて美しいと有仰ると、どれ〳〵と原田さん立ち上つて、双眼鏡を奪ひとる、唖みたまひし金口の煙草の煙は、切々になつて吹き散らされる。眼下の斷崖には夕潮滿ち來つて、だぶり〳〵と打ちよする音。

晴雄さまが柄にもない、

『ヤ、いゝ匂ひだ』

つて目を細くして、床の花瓶に投げざしの山百合へ、お顔近々とさしよせられる。

その純白の花片に、赤黒いお顔色がうつりはしまいかと氣づかはれる。

やがてお擧げになつたのを見ると、高い段鼻に花粉がべつたり。それで澄まして、大和くわへて、マッチをお擦りになるんですもの、可笑しくて〳〵、ふつと口元の笑み崩るれば、目早くも綾さまが、

『あら、晴雄さんのお顔！　嫌アだ、早くお拭きなさいよ』

はうり渡された白麻の手巾、鴇色レースで繍刺の。

いきなりそれでお顔中引こすりまはされるとまあ？　いよ〳〵クワン〳〵の觀音樣みたいになつちやつて、堪らず、アハヽヽヽオホヽヽヽと笑ひ覆へつてしまつた。

廣子樣は冷靜にそれらを見まはして、

『もう何時でせうねえ、あまり晩くなるとお祖母さまに叱られる、』

三本立の首掛鎖を探つて、パチリと懷中時計を。夕陽に煌めく黃金の針は、六時

五分前を指してゐた。

『御心配ならお歸り遊ばせよ、廣子樣。私たちこれからこゝで夕餐戴くのですから』

花さんは急須を振つて、お茶を濁みながら憎さうに云ふ。

『えゝ〳〵、御緩くり。では私は……』

お氣の早い、もう立ち上つて、褄下など引ばつてゐらつしやる。

『あら、廣子樣』

とは云ひかけたものゝ、廣子樣お一人のため、また皆樣に不愉快な思ひをおさせ申してはなほすみませぬ。後で私がお祖母樣のイヤ味を、きかされさへすればすむことだ、これはお引止めしない方がいゝと考へて、

『ではねえ、お氣をつけてらつしやいましね。誰かに送らせませう、一寸お待ちあそばして――』

階段を駈け下りつ。

御辭退遊ばすのを拜むやうに、宿の爺やがお供することゝなつて、私は板金剛踏み覆しつゝ、玄關先までお見送りする。

席へもどると、待ちかまへてゐらした原田さんのお口の惡さ、

『何です、彼女は？　叔母樣てお血族なんですか、貴女方の？　そんなら卵の毛の先ほども似て居さうなものだ。いやはや念入りの高慢ちきに出來上つてる女ぢやありませんか。人の感情なんて云ふものを、てんで無視してゐるんだからなア、いやエラ者だ、一寸普通の者にや眞似も出來ん』

私はたゝ含笑んだ。

『でも廣子樣の御出京は、一つにはお婿樣選みのためだと申しますわ。お色こそ黑いけれど——御容色はいゝんで御座いますよ、それは〳〵勝氣な方ですけれど、旦那樣はお大切になさいませうし、經濟の方に趣味を有つて被居るから、お家のため

にはよう厶んす、それで財産が澤山おありになるんです。原田さん、何處かお心當りは御座いますまいか。法學士か工科に云ふお希望なんで厶いますよ』

『美佐子樣、あゝ云ふ女を脊負こむ奴ア、僕の知己にはないですよ。財産だけなら僕が貰つてもいゝ』

と平然煙を吹く。

『ホ、、、御挨拶ですこと。よくしたものね、原田さんの樣なお方ばつかりはないさうで御座いますわ』

廣子樣は何なのよホ、、、可笑しいわ、ほらこゝに居る八人が、みんな一對づゝに成るでせう、あら、兄さまに姉さまは別物として、數がですよ、丁度、三人、三人、ね。

それだのに廣子樣お一人、相手がないもんだから妬けて〳〵、立腹てお了ひなすつたんですわ。ホ、、、』

『あらまさか？　ホ、、、、』

×

新月さしぬ柏の下葉
光りもゆかし露の玉
いざ筑うちてあくがれ心
美酒の甕に若人よ
つどひて今宵諸聲高く
手を打ち鳴らして合唱する。コンモリと玉楠の茂り合つた木蔭に、椅子を並べて、竹卓をかこみたゝ、庭園の與宴今や酣也。
青葉を漏るゝ月光は、燦々として銀箭のごと、露けき女の黒髪を、瑠璃とばかり照らすのである。雪とまがふ細肱上げて、花さんがビールの瓶を持つと、

『美佐子嬢に獻じませう』

など、突き出される原田さん！　もう十二分に酔のおまわりになつた様子。

『あら、何を有仰るのでせう』

と兄様の方へ擦りよれば、

『いや、失言だつた、おやア山田令夫人……』

『夫人の健康を祝しませう』

伊達さんまでが高笑ひして、眞白き泡の盛り上る、コップを高う捧げて憂然。觸るゝ手に結ぶ水蒸氣の玉をはらつて、冷たい縁に唇を持つて行き、

『萬歳』

と叫んだのは晴雄さま。

強ひられて受けた今宵の一杯に、頬は火熱つて〳〵、ぢつと見張つてる瞳が、いまにも溶けて了ひさう。

躍りやまぬ紅の胸の血を、雨の袂におさへても、なほ息がはづんで〳〵、とうとうたまらず卓の上へ突伏して了つた。何誰かのお手が、肩にかゝつたのも夢のやう、高鳴る耳元に遠く〳〵遠くの方で、再び起る歓呼の歌聲。

見よ東海の波の上に
凝りて華さく星の精
射るや銀矢の末遠く
時永却の色見せて
光りはとはにうら若き
理想の夢をのせて行く

燃ゆる花燃ゆる心

――那須溫泉場より――

七時二十分、無事當館着。御安心下さいませ。借切のガタ馬車で、ゆられ〳〵て登る道々、頭痛がして、船に酔つた様になりました。一人旅つて淋しいものね、錫さま。躑躅をはじめ、卯の花、藤、山梨の花など眞つ盛り、鶯がしきりと啼いてゐました。向ふの連山には殘んの雪が、まつ白なのに、初夏の日光は強過ぎて、苦しいほどでありました。那須の平原、夫れは私にはあまり廣大に過ぎて、知らず知らす涙の頬を傳ふばかり。乙女の胸には痛うムいますよ、『ものゝふの矢やみつくらふ』と詠じた實朝は、流石鎌倉男兒でしたわねえ。金毛九尾の野干玉藻が、石と

化したる物語り、その背景としては、眞にふさはしい大平野。どつぷり暮れてから着きました。見上げる坂路の兩側に、宿々の座敷が明るく輝いてゐるにはびつくりしました。

松川屋では大歡迎、錫樣のいらしッた別館の三階の十疊へ一先づ入る。皆なからよろしくつて、秀ちやんが大きくなりましてよ」「はあちやん」の噂も出ましたわ。その外の事は夜のことゝて、さつぱり樣子がわかりません、委しくは後使にて。

——その翌日——

昨夜は疲れてよく眠りました。

早ほのぐと隙もる曙のかげ、黑髮長うくづれかゝつて敷布の上に、蛇とうづまいた氣持わるさ、寢返りもせず壁の方向いたまゝぢつとしてると、やかましく開え出す雀の聲、家鴨の聲、水の音。

頃て雨戸を引いて行く、彼方でも此方でもハタキの聲パタ〳〵。私も起きる。髪から薔薇の花片がばら〳〵散れた、さう〳〵、きのふ花園から摘んで、あの須磨さんの『マグダ』の恰好を眞似て。ぬきとつてみると、無慘な色にかはりはてゝ見る影もないが、痛烈に胸をつくやうな、甘い〳〵その匂ひ、なつかしくて幾度か口におしあてた。

「お早うございまちゆ』と長い廊下を、紫の元禄袖に、眞青な坊主頭をふりたてゝ、飛んでくる秀ちやん、錫さまのことを、先生〳〵と呼びつゞけ。主婦の妹の喜佐さんは、面白い快活な新婦人ね。おかあいくなさつた「はアちやん」は、可愛い可愛い人形のやうな妻君になりましたとやら、祝福して上げて下さいまし。

海拔三千尺、冷たいとおつしやいましたけれど、氣候は割合あたゝかく、セルと羽織で丁度よいの。庭の石楠木が盛りでムいますよ。

昨夜湯殿へ行きましたが、帶もとかずに引き返しました、いくら効力のある靈泉

でも、お化粧が出來なくつては情ない、罪ですわねエ、夫人おつれ遊ばしたら、こんなところへいらつしやいますな、若い女が白粉を、取り上げられては、みぢめなもので御座います。

けれど、少しぐらゐの犧牲や不滿足を忍んでも、新らしい事物を見聞するは我等の義務である、とおつしやつた御言葉に對して、わづかに慰めてゐます。

いま一寸用があつて、帳場へ下りて行きましたら、これから白河の方へ立つと云ふ方たち、慶應の學生でせう、房下つた角帽制服の二人づれ、ズックの鞄をかうなゝめにかけて、私、藥賣とまちがへましたのよ。お馬に召してね、ホヽヽヽ。鞍上顧眄と云ひたいが、手綱は馬子がとつて、前鞍にしつかりしがみ着いてる風の可笑しさ、思はずホヽと笑ふ。

風かほる青葉の中に、蹴蹄は火のやうな山路を、鈴の音チヤラン、チヤラン、ポツカ、ポツカ〳〵と遠ざかり行く姿、さながら詩中の人、畫中の人、

雉子や喰みし若葉か下の蛇の骸。

お晝餐のお膳を運んで來ましたから、これで失禮。午後から室を、四階の四疊半に代へさせます。左樣なら。

——醫科の君に——

清浦樣、こんな山の溫泉へまゐりました。

海拔三千尺、靑葉が茂る、雨が降る、霧が迷ふ、時鳥が鳴く。初夏は私の好きな時、奧ゆかしい時、胸のをどる時ですわ。

那須は男性的な處で御座いますよ。ちつとお出かけ遊ばしてはいかゞで御座いますか、試驗前なら猶のこと、噴煙立ちのぼつて雲につゞく茶臼山、眼もはるゞ〳〵の廣野のながめ、ことに躑躅の名所です。

その色彩、その趣、躑躅は火山系にふさはしい花　大陸的、平民的、荒けづりの

儘な、この高原を飾るには、あなたのお好きな薔薇や、牡丹ちや芍があかない。

温泉場の左右は燃ゆるやうな新緑と、花躑躅に埋もるゝ高い山で、帯の様な坂路から、白手拭の頬かぶり、モンペはいた、赤い襷の二人の女馬子と馬が三頭、シャン、シャンシャン、それにひら〳〵と、胡蝶のもつるゝ風情など……。

温泉は性に合はぬので、あまり入浴もせず、散歩にも出ず、毎日解脱だの超越だのと云ふ事ばかり考へて居ます。

だん〳〵「自己」と云ふものが、大きくなつてゆくやうな氣がします。自重！自尊！　誇大妄想狂と笑はゞ笑へ、「識らにや識らぬで渡れる世をば、なまじ識つたが身の因果」

とても私には女として、服従の生涯を送ることは不可能なのです。将來きつと殿方に、反抗の叫びでもあげる子となりませうよ。そのお覺悟していらつしやいましな。ホヽヽヽお互様に妥協致しませうねえ。

小包にて土産の物二三種御送り申上げます。お妹さまにもお分けなすつて下さいませ。どうぞよろしく。かしこ

——心の友へ——

とある夕、宿の喜佐さんと温泉神社の境内をさまよひました。

一の鳥居から奥の院まで數町、兩側いろ〳〵の雜木の大きなのが、枝を交え、葉を茂らせて、白晝なほ闇き樹下道、誰かに打ち捨てられた卷莨の吸がらから、ほのかな紫の煙を立てゝゐるが、人一人見えません。苔青く厚く封じた石段の上には、楢の若葉の紅萼が、落花の樣に散りしいて居ました。

靜かな、逝く春の山上の夕ぐれ、風もないのに、色あせた山櫻の花びらがほろ〳〵。

こゝはあの屋島の浦の合戰に、扇の的を射て有名な、那須與一の氏神さまださう

です。若葉の匂ひ、暮春の哀愁、二人は神社の縁に腰かけて、どんなにしんみりと語りましたらう。胸の蟠りが温かい涙となつて、溶けて流れるやうにおもひました。たまらない人なつかしさ。君まさば、熱いおん手に、ひしとくちづけてもみたい心地！

高山の冷えた空氣は夕闇と共に、刻々漂ふて來て、おぼえず襟に顔をうづめました。あたりは躑躅のみ、點々と暮れ殘つて……。

云ひ忘れました、こゝのお華表様には（入口から二番目の石の大華表）何でも心に祈願をこめて、小石を投げ上げ、うまく載せることが出來れば、願望成就すると云ふ口碑なのですつて。私も早速

『兩人の上に祝福あれ』

と幾度か〳〵投げたけれど、力あまつて跳ね返されたり、一二間も向ふの石燈籠に打つかつたり、どうしても叶えやうとはして下さいませんでした。氣をかへて、

華表のあちら側にまはつて、

『濃きは紅葉の散りやすしと知りたまへ』

と念じて投りあげたら、たゞの一度でカツンと載つた。その次に目をつぶつて、

『私を少なく愛して下さい。そして永く愛して下さい』

と祈つたが駄目、二度、三度、四度、徒らに頬のみ紅潮して、息のはづむに過ぎなかつた。面白い傳説だと思ひます。去年喜佐さんが錫雄さまを御案内してこゝに來たとき、その御病氣御平癒の祈念を凝らしたら、あとにも先にもたつた一度で載つたと云ひます。

梟でせう「カツポー」と叫んで、太古の如き寂寞を破つて。

『歸りませう』と立ち上る。硫黄の湯煙立ちこむる夜の町は、青葉がくれにチラ〳〵と明るい灯がきらめき渡つてゐます。紺青の空には雲の影だになし。

長い階段を昇りつくして、四階のわが室へはいるとすぐ、私はそこへくづ折れて、

高鳴る胸をおさへました。やるせなき悲しみ、憧れ心、不思議なほど大膽な自分になつて、はじめて『錫様』と呼んで見ましたの、戀しい〳〵人の名を。心ときめく初夏の宵。

——大學の水野さんに——

君去りて夕さびしき那須山に
　無言の乙女花にもだゆる

何と云ふ美しい、ロマンチックな物語りでせう、色白のふくよかな、品のよい十七乙女が、袖の長い肩揚のある羽織の脇明に手をつゝこんで、逝く雲をながめながら、ぢつとたゞずんで居る面影が、目の前にちらつきます。

行く處としてアネクドートや、ローマンスを作らぬ事なき錫雄さま、この那須山も例には洩れませんでした。「はあちやん」と云ふそれは〳〵おとなしい從順な誰に

も可愛がられた娘。勿論別に何の事はないのですが、淡い清いローマンスが殘りました、暁にうすれゆく月の光りの様な……。

「はあちやん」は嫁きました、日光に近き小さき湯の村に春遅き桃の蕾の綻ぶる頃。たつた十八ばかりの初花を、むざ〳〵一人の占有物にして了ふのは勿體ないやうな氣がしました、婿様が憎らしいと喜佐さんの話。

それでねエ、錫様がお別れの時、はアちやんにおやりになつた、美しい帛巾がありましたの、そのお婿さまが、呉れろと云つたのですけれど、こればかりはあげられないつて、斷つたとやら。私みたいな和洋折衷式でなくつて、純日本風の、やさしい女心も酌まれるぢやありませんか。水野さんは文學士におなりなのだから、この様な奥様がよう御座んす。何なら私、第二の「はあちやん」を見つけて歸りませうか。アラ！　そんなに紅くおなりにならなくつてもよござんすわ。エ、これをお讀みになる時のお顔色がわかります。私、千里眼よ。

Jの蔦田さんの事、Sの君島さんの事、一度でもこゝへいらした方の御噂は毎日たえませぬ。前の代議士の蒙古王さんね、矢ッ張この家が御贔負とやら。

喜佐さんの一粒種、六つになる秀ちやんが可愛い聲で「奈良の都」や「春は、春は、櫻さく向島」なんか歌つてくれます。錫さまが教へこんでお置きなすつたのですつて。其の外、錫さまと早稲田の鶴さんとが、論文のかきくらをなすつたり、お辨當を召し上つたと云ふ裏山の草原へ行つて、幽想にふけつてゐます。青草の波、炎の海、晴れた五月の空の色、遠くの山々は夏霞に薄れて、一刷毛、二刷毛、はいたやうな白い雲、鶯老いて、若葉のそよぎ、何だか眠たくなる樣な氣持！

錫さまがどんなに眞面目くさつて、つゝましやかな「はあちやん」と、この邊を散歩なすつたのでせう。

ほのかな新月が眉にかゝつて、四邊は紫色に傾せらるゝ夕べ、欄にもたれて遠く〳〵天駈ける空想の、登場人物は、いつもあなただの、先生だの、青柳さん、蔦田

さん、錫さん、鴇さん、八雲さん。大使、政治家、大地主、代議士、博士、教授、病院長、二十年後を思ふてほゝ笑まれます。輝ける前途をもてる秀才達に、幸多かれと祈ります。その頃私はどうして居ますことやら、もしも無事であつたなら、一つ發心して、中央大停車場の大食堂か、又は燈影さし洩るゝ精養軒の樓上でゞも、大懇親會を開かうぢやムいませんか。ビアーでもいたゝいて、ボルドウの紅き盃をあげて、新日本が、新人によつて、經營されるのを祝しませう。

けれど、夫れまでにはまだ幾山川、どうか御自愛遊ばして、ね、水野さん！　お互さまに勉強いたしませうねエ。

――錫雄さまへ――

『私の最も好きな、錫雄さま……』

ホゝゝゝ御許し遊ばして下さい。これは一寸マグダの口まね。

都ではもう櫻んぼが、薄黄色に、水々しい艶を持つ頃ですのに、那須の櫻はいまごろ花が散るのですもの。毎日無異に温泉にひたつてる氣持も、わびしいものです。お友達は一人も出來ません、みんな湯治にばかり熱心な連中でしてねエ、女でも頭からお湯を引かぶつて入つて居る。よく風呂場の姿見の前に半裸體で、逆さになつて、したゝる翠髪の雫をしぼり上げてゐる肌の白さ、何だか恐ろしくもなります。油ッ氣のない櫛巻の、バラ〳〵髪で、柄杓片手にいそ〳〵と廊下ゆく樣子など、豆相の温泉場では見られない趣味ですわねえ。

七日間の心の糧と拜借して來た本も、再讀三讀、果ては喜佐さんの本箱から、いろ〳〵なものを借り出しては、讀み散らしてゐます。金色夜叉の書譜を、太田さんのと、清方さんのと、二種も持つてゐるので笑ひましたわ。その宮さんの盛裝の丸髷の立姿が、「はあちやん」の新婚の寫眞に似てゐるつて評判なのですもの。錫樣、あなた「はあちやん」と散歩して、硫黄の塊をとつてきて、二人して、火鉢一つ代

なしになすつたさうよねエ。

喜佐さんが、小石川の師範にゐた頃は、紅葉先生の全盛時代、その頃の話、それから轉じて「宮さん論」から「現代婦人論」に移り、美人と生れるのが幸福か、才女と生れるのが幸福か。

目下の有様では矢つ張、女らしい平凡な女が、一番幸福なんでせうと結着しました。悲觀せざるを得ないぢやありませんか、日本の努力も向上も、婦人がいつまでもこんな風でゐてはねエと、大變な氣焰でした。ホ、、、、

折角のおすゝめでしたけれど、那須は何だか物足らぬ、物足らぬ。火を噴く山も高原も、名所名物、みんな野蠻ですわ、頑固ですわ。もつと〳〵水分の多い、山の美しい、溪の深い、しづかな、神秘的な、鹽原はなつかしい處、忘れられませぬ。

蘆田さんは楓川樓に御淹留ださうでムいますね、おうらやましくつて。

それともかつてなき一人旅、さびしい故にこんな事も思ふのでせうか、それなら

那須に氣の毒ですけれど。

エ、、さうかも知れません、きつとさうよ、だつて、あの「はあちやん」つれて、蕨狩なすつたあの丘、あすこの下の方に、誰かの別莊が出來かゝつてゐますの。家は小さいのですが、あすこの眺望と云つたら！　何とも形容が及びません。園内を清水がチヨロ〳〵流れてゐます。それを泉水に引くと云ふ。花壇にとて百坪ばかり西洋草花の種が播いてあるらしく、今はまだ名稱をかいた小さい札のみさゝつてゐます。あゝこんな處で、好きな人とたゞ二人、思ひの儘の述作にでもふけつたなら、どんなに樂しいことでせう、これこそ生甲斐もあると云ふものですわ。錫さま、錫さま、こゝへ御別莊がお建築になつたら、私おさんどんをして上げませう。あら、御飯ぐらゐ炊けますわ。但、黒焦は一日三回まで默許して下さい、ね。ホ、、、、、でもこんな山の中はお厭らしいのねエ。

溫泉神社へもまゐりましたわ、あのお華表で、何を祈つたか御存じ？

床の花甕に投げこみの鬼つゝじ、まるで雨ざらしのポストみたいな色、一輪封じこめておきますわ。毒花ですつてね。そんな事とは知らないで、いつもの癖の花びらかみ碎きかみ碎き、『あらッ、貴嬢ッ』と云はれたときには、もう苦い唾をたくさんのみこんで了つたあとだから、今夜あたり死ぬかも知れません、化けて行つたらどうなさいます。

夕飯ですからこれで筆とめ、山家料理の鹽のからさ、甘いのはお豆腐の葛掛ばかり。毎日閉口、歸京ましたら帝劇へでも、お供したいものでムいますわね。あら、蟲がいゝつて？　恐れ入ります。ホ、、、、御免あそばせ。あなかしこ

——高輪の父様に——

絶え間なく打ち煙る雨よ、たま〳〵障子開ければ、彼方でも此方でも、申し合はせた様に、欠伸噛みつぶした寢ぼけ顔ばかり。ひや〳〵冷たい風が、ぐわあツと

鳴つて、欄干近き葉櫻の茂みの雫をばら〳〵と振ひ落し、思はず羽織の襟をかき合せました。

あまりの所在なさにいつかウト〳〵と、机の上に突伏して仕舞つたと見えます。心地よい假眠の夢驚かしたのは、物賣の女の子がやつて來たのでした。十四五の色の黑い、眼のギヨロリとした孤兒院型、赤い髮を引きつめて、まるで仁王樣の申し子みたいだ。不要！　と云ふのにはいり込むで、

『どうぞ買つてやつておくんなせい、美味いものがありますよ。お愛嬌に何か一品でも、ねエお客さん。わしのはまだ一度も、買つておくれなすつた事がねえんですから。』

呆れが肩を越しますわ、小仁王に何がお愛嬌でせう。鹽せんべい、水飴、羊羹、夏密柑、梅干、ラツキヨーなどの箱をならべたてる。木地の剝げた方が目につきました。

五月蠅くてたまらないから「お愛嬢」に、抹檬でもと取つたら、丁度お祖母さまのお乳みたいにしなび切つて、ナイフをあてゝも、皮の剝きにくい事夥しい。何かの粕でも嚙むやうで、甘味も酢ぱ味も殘つては居やしません。

文さん！　紅い苺が思はれるのよ。白いカップに血の樣な葡萄酒ついで……銀のスプーン、クリームリボン傾けて繰つる。風薫る若葉の窓に、ふさはしい氣分だわねエ。

『時は初夏、我は若人』やつぱりけたゝましい電車のベルや、自動車のうなり乍ら飛びかふ、火の出る樣な都門の活動が羨ましい。

純オースタリー式だとか何とか、夫れあのいつかの有樂座の歸途に、秋子さんや何かと丹波さんにつれて行かれて、センブリのやうなコーヒーを飮まされた、カフエー、バウリスタの二階、銀燭光り耀きて、大理石のテーブル、芳香高き盛り花、セリー酒の黃なる、ポートワインの紅なる、特別の制服つけた給仕の美少年の、

とりわけて可愛らしかつた事、私等にはどうしても、あの調子でなければ、満足とは云へないんですわ。

歸京つたら、一日ゆつくりお話しませうね、妙華園？　日比谷？　どこでもあなたのお好きな處へ。ね、文さん、だから御勉強なさいましね。おとなしく待つちしてゐるんですよ、ホ、、、さよなら。

——箱根山上の友へ——

燃ゆる山の那須、燃ゆる花の躑躅にあこがれて、燃ゆる心を抱いて、汽車五時間、馬車三時間を遠しとせずして、こゝに來て數日。わびしい雨の日の午後、讀書にも飽き、執筆にもつかれて、ぼんやりしてますと、特別湯の方がいゝお加減で御座いますから、お召し遊ばせと云つてきた。

こゝは内から締りも出來るし、脫衣棚もあるし、せまいけれど浴び湯と入り湯と

は、別々になつてゐて、まはりの壁なども瀬戸の花模様で張りつめ、湯槽には透きとほる水晶の様なのがなみ〳〵。はじめて温泉に、來てゐるらしい氣持になつたのです。

けれどお湯は、宮ノ下や塔ノ澤のと違ふのよ。よく見れば、細かい少さな、丁度青黄粉でも掻ぎませたやうな浮物が一面、一寸唇をなめたら、酢つぱいと澁いとつきませた、舌を刺す、何とも云へぬ妙な味はひ！　はら〳〵と板廂打つ雨の音をきゝつゝ、心ゆくまで暖かい、魚のやうな快樂に耽つた。

久しぶりで湯上りの、熱した肌を擽によすれば、水氣を含んだ風が、さあつと山々の新綠を渡つて、面を拂ふ心地よさ。

やがて晴れるのでせう、眞白い雲が、岫を出でゝは、右へ右へと急ぎ足に流れて、點々と瑠璃色の空がさしのぞき、千様萬態、雲のたはむれ。山住ひの貴嬢でなくつちや、想像がつかないわ。

能因法師が歌に知られた白河あたりは、まだもや〳〵と、煙のやうなものが立ちまよふて居ますけれど。

遠きを偲ぶ私の心。あの雲に乗つて、山をこえ、野をわたり、函嶺湖畔、夕の雨となつて、あなたに囁くとすれば……。

お伽噺の樣な事を考へてゐますと、

『先生、御退屈さま、明日はお供いたしませうねえ、きつとお天氣になりますよ』

結立の丸髷つやゝかな、血色のよい主婦の喜美さん、例の元氣な聲を先に立てゝ、小腰をかゞめて通り過ぎる。

あゝ寂しい、味氣ない。堪へられぬ哀愁の胸にこみ上げて、思はず欄にのせた手の上へ、頬すりつけて了ひました。

あれ、鈴ふるやうな駒鳥の聲、山々は霧、渓は青葉に埋もるゝ、函嶺の夏の鶯、それにはおもしろい、なつかしいお話もございますわ、ねえ、嘉久さん!!

——潮風先生へ——

先生、どうしてゐらつしやるでせう。私はけふ茶臼嶽の噴火口へ登つてまゐりましたのよ、もう草疲れて、草疲れて、一寸も動けません。さつきからどしんと机に倚つかゝつたきり。それもその筈、大變があつて、天狗さまにさらはれかゝつたので御座いますもの。あら、ほんとうなんで御座いますよ、先生。

今朝は山にめづらしう、すつきりと晴れた日で、火の樣な太陽は赫々と、青葉の山々にきらめき渡ります。湯煙さへもほの〳〵と、目にもとまらず朝風に吹き散らされて、日の登るにつれ、空の青みはだん〳〵薄くなり、その根方は白く薔薇色に匂ふたあたり、春の名殘ともみゆる白雲の一ひら、二ひら。

そしてどうしたのでせう遠山の襞々が、非常に丸みを持つて見えます。連日の雨に洗ひ出された躑躅は、みんな桃色に化つて仕舞つて、立ちよればダイアモンドの

様な雫はらはら。

生れて始めて草鞋と云ふもの結びつけて貰つて、心も輕く身も輕く下り立ては、同行は下座敷の客達五六人と、白河、黒磯あたりの鐵道の驛員たち、いづれも制服制帽に、改札だの出札だのつて襟章光らせてるとこが振つてます。ステッキ打振り〳〵、お辯當包なゝめにしよつて、ワッ〳〵と云ふさわぎです。

宿の主婦の喜美さんてば、山歩きにはこれにかぎるつて、あの鹽原袴つて、前掛と袴と股引と合併した様な妙なもの、裾を端折つた上から突穿いて、威張たところは、さながらバック畵中のもの。蘆田さんが「大將軍」とは、よくおつけになつたものと可笑しくつて。

さうして面白半分、口をつくして私にもすゝめてやみません、ホ、、、、或る代議士さんが喜佐さんに、あれを穿いて東京へ出て來たら、帝劇をおごつてやると有仰つたのですつて。私ならもう歡樂のパリの都へ連れて行くと云はれたからつて、こ

ればつかりは願ひ下げでムいますわ。

馴れぬ草鞋の穿心地、何だかあまり足が輕過ぎて、幾度か大地を踏みしめつ。先生、私小父さん達の、意久地なしには呆れて了ひました。男の癖に氣恥しくもないのか、「しつかり」と横つ面でもはり飛ばしてやりたく思ひました。

二里の山路にヘタ〳〵弱つて、洋傘を突張ながら、「六根清淨、〳〵」の掛念佛が、いつとはなしに「どつこいしよう、どつこいしよう」とうめくやう。

登るにつれて山櫻の古木が多く、木傳ふ鶯の羽風にも落花繽紛、上氣した頬を掠めて、そよ〳〵と甘い若葉が薫りますし、雜木林のトンネル行き行けば、樹葉を洩るゝ日光、銀線のごと、上半身にふりそゝぎ、手の色など、血の氣のないまで透きとほつて見えます。

行途の山の襞々には、まだ浴けやらぬ殘雪が、瀧のやうにかゝつてゐて、夏なほ寒き心地がいたしましたが、いつか空が曇つて來まして、頂上へ半里と云ふ硫黄小

屋へついた時には、もう天地濛々、一面の濃霧に包まれて了ひました。

ともかくもその小屋に入つてしばらく休息する、寒いの冷たいのつて手がちぎれさう、ドン〳〵と閘爐裡に薪をふすべて、おゝ烟い、けむい、目が痛い。

折あしくがわーつと、大變な風さへ吹き加はりましたので、これはお山が荒れるのだ、天狗樣にさらわれると云ふさわぎ、よし不用命十あつたとて。おゝい御連中も先の長いお身體だ、何もこんな日に危險い思ひをして、面白がるには當らぬこと、今日の登山は見合せませうと口々。

ホ、、、、と袖を口にしますと、顔見合せた鐵道の人たち、何んだ、これしきに。行かう〳〵とひしめき立つて……あら、何ですつて？お人がわるい、いゝわ、いゝわ、私の引力も大したものでせう。ホ、、、、、。

活動寫眞、さう、まるで活動寫眞です、見上ぐる峰も見下す溪も、白氣濛々、山は赤い——濃海老色、それでもはじめは地ぐみとか云ふ植物が、芝生の樣にはびこつ

て居ましたが、終にはごろ〳〵の磊石ばかり、月世界の探險でも、してるやうな氣になりました。いつの年の噴火の名殘か、眞黒な立枯の木株は、骨のやうにそこら一面散らばつてゐます。

今まで山ふところをまはり〳〵して登つて來たのが、いよ〳〵頂上へ出やうとするところ、氷のやうな風がヒユー〳〵驅けまはつて、面を向くべき樣もなく、裾も袂も吹きちぎらるゝばかり。だからこの通り、鹽原袴さへ穿いてらつしやれば何ともないのに、餘りお氣取なさるもので、と喜美さん一人大氣焰。

それどころではない、寒くつて〳〵、水ばなを洟り〳〵、眞青な唇して、髭や眉毛に水玉止まらせたみんなの手足は、まるで梅漬の紅生姜みたい。あら、先生、私はそんなみつともない眞似しはしません、ちやんとコートを着てゐましたし、レースの長手袋をはめてゐましたし、顏はすつかりベールで包んでゐました。

息もはづめば足もすくむ、怖くも恐ろしくも、そんな事は何ともないけれど、苦

しくつて〳〵胸が破れさうにコト〳〵コト〳〵。一時は立ちすくんだまゝ動けませんでした、叩きつけるやうな雪交りの雨が降り出す、硫黄の匂ひは痛いほど鼻を襲ふて。

ねえ、先生、那須の噴火口ではまだ一人も自殺者を出したことがないつて、土地の自慢の一つに數へてるやうですが、私はさうは思ひません。

先生、美しい山や水をみると、多感な乙女は泣きますわ、厭世や失戀ぢやなくつても、このまゝ大自然の懐に抱かれて、さめぬ眠りに入りたいなんか、ふら〳〵死神に誘はれるやうな事もありますけれど、こんな荒景では死場所とするに足らないんですもの。機關車を幾十あつめたと云ひませうか、大波の荒れ狂ふと云ひませうか、幾百尺の大きな摺鉢みたいな底で、轟々と湧きかへる熱湯の音響、この一山に凝つた雲霧は湯氣で、地獄の釜の蓋の開いたのではないかと思はれる。

手を執り合ふてる喜美さんの顔も見分けられぬ程なのですもの、鼻をつまゝれた

つて分りやしない、しかし決して暗いのではないのでムいますよ、海と山とのちがひはあれ、上村艦隊が濃霧になやまされたのも、八年の昔となりましたわねえ。

引返して下山の途につく。戀と山とは登りつめたら下り坂と云ひます、戀の下りも、この樣に樂なものでせうか、私達はいま一生懸命に、登りつゝあるのでせうか、まだ頂上に達しないのでせうか、と妙なことを考へました。

一同一刻も早くこの八寒地獄の中をのがれ出でんとばかり、脫兎のやうに早くつて、私と喜美さんとが、はるか後方に殘されて了つた。(それは喜美さんが、一寸待つて下さいつて、立小便をしたからです。喜美さんの口吻を借りて云へば、たゞちまつた)

傍目もふらず硫黃小屋のとこまですべり下りてホツと一息、こゝからは日もあたゝかく照してゐます。

それから途中の笹原が、あまり美しうムいましたから、此處でお辨當が開かれま

した。私はベールかぶつたまゝコップを口の傍へ持つて行つて大笑ひ、先生が近眼鏡の上から、お顔お洗ひになつたどころではありません。

梅干握りこんだ、赤ン坊の頭ほどあるお結び、てんでに抱えこんでバクついた風、まだ目の前にちらつきますの。けれどその美味かつたと云ふものは、成る程これだけでも人生の有難味はあると思ふたくらゐでした。あら、イヤだ、よだれをすゝつて被居しやるのは誰？　ホヽヽヽヽヽ。

やがて一人の人は敷島にマッチそへて、すゝめてくれるんですもの、不調法でムいます、つて云ひましたけれど、ひとりで失笑して了ひました。眼ばかり光つた髭むくぢやらな、頭の禿げた小父さん達が、「先生、先生」つて呼ぶんですから、ホヽヽヽヽ田舎まはりをすればエラいものでムいますわね、今までだつて夫人と間ちがへられたこともあれば、姉さま、小母ちやま、何嬢、何女史、随分いろんな名稱も頂戴しましたけれど、先生とは痛み入りましたわ、さしづめ女村夫子と可笑しく

つて。

大丸の溫泉は、きれいなお湯でムいますこと、青苔なめらかな川床を、モヤ〳〵と湯煙立てゝ、清らかな湯川が走つてますし、もと黒羽侯のお禁湯であつたとやら、見附のあととか何とか、昔偲ばるゝ石蛭などゝも殘つて居、欄に相對する青葉山、閑靜な一寸いゝところです。乃木大將がよくお出になるとかきゝました。

那須のお湯と云つたらみんな、烈猛なものとばかり思つて居ましたのに、こゝのは湯本の硫黄泉などゝちがつて、單純玉の如く、このまゝお茶にいれたり、お菜をうでたりするんですつて。氣持がいゝものですから、みんないつまでも〳〵郡烏みたいに湯潸に浮いてまして、なか〳〵上つてまゐりません。一人ぽつちの私は二階で退屈しちまつて、菓子器の蓋を取つてみると、何だか薔薇の匂ひのする、青いのや黄ろいのや桃色のや、美麗でしたから、お盆の上で右の手と左の手で、おはぢきしまして。勝つた方だけ口へ入れ〳〵して、とう〳〵みんな平げて了ひました。サ

イダを飲んだのも私です。これでお茶代が同じ割前とは、少々お氣の毒さまの感なきにしもあらずで、極りが惡うムいました。

けれど人間てほんとに勝手な憎らしいものねー。天狗樣もこゝまでは、追かけて來ないと思つたのでせう、うでたこ入道の樣な顏を撫で〳〵、今日のやうな日にお山の出來たのは、私等と云ふ同行のあつたおかげだ、いくら氣張つたつて女なんぞ、だつて、女だからどうしたの、二十世紀は私たちの世界ですよ。と云つてやりたいのを飲みこむ。

歸途には路を變へて、紅葉の瀧へまはりました。

熊笹をおしわけ〳〵、道ではない、溝ですわ、雨の降つた時、水の流れるあとらしい、ぬらつく赤土に、あはて者は幾度滑つたり、轉んだり、餡轉餅みたいになつて、ときの聲をあげながら進んでゆく。どんなに面白うムんしたらう、丁度この邊は紫躑躅が眞盛りなんです、さわなしと云ふのは海棠に似た花で、びつしやり莟が

ついてゐます、ぐみの一種ださうですが、その美しさつてありません。櫻草だつて荒川あたりのとは、別種のやうに色もよく輪も大きくつて。

二十町あまりで高雄股の溫泉、野馬が高くいなゝいて居ました。まあ、居る、居る、馬が澤山、赤だの白だの青毛だの、黑だの灰だのまだらだの、艶々しい毛並の日光に輝いて、樂しげに髭ふるはせつゝ。

何と云ふ雄大な景色でせう、先生もお好きでしたわねえ、泣菫の暮笛集、

堅き蹄をふみあげて、
雄か香風にいなゝけば
二つの耳をふりたてゝ
雌か鬣を波立てぬ

腹帶ほどけて若草の

花に青毛のさまよへば
肌背に春をうちのせて
路なき野邊に栗毛飛ぶ

思はず知らず高吟しました。

愉快でしたわ、さわやかな青嵐を胸一ぱいに呑吐して、花香はしき初夏の、五尺の身内にみなぎり渡る清新の氣　勃々たる英氣。

これでなくつちやあ、眞の女性美は發揮されないわけだと思ひました。

もうどうしても日本家屋のうちで、飯事みたいな女のつとめや、少やかな樂しみのために、滿足してることは出來なくなつて了ひました。先生、私等は、いえ、少くとも私だけは、大きくならなくつちやなりませんわねえ。

こゝまで書きますと、かねてたのんでおいた寫眞師が來ましたつて、秀ちやんが眞新らしいエプロンかけて、友仙の元祿袖着て、ニコ〳〵と驅けこんでまゐりまし

た。折がわるいと思つたけれど仕方がない、痛い膝をさすり〳〵、裏山へ登りました。

被布から首を出して一禮した寫眞師は、イヤに氣取つた洋服に赤皮の靴なんぞはいて、眼鏡をかけて、薄髭を生した、それは〳〵ハイカラ男なので驚きました。その割に技術は信用が出來さうにないんですもの、私だつてピーオーピーの燒付や、現像の仕方ぐらゐ知つてゐるんですわ。

躑躅の茂みを背景にして、光線の工合が氣に入りませんでしたけれども、秀ちやんや花ちやんや美いちやんや、少さな小供達をまはりへ並べまして、私はまん中にかゝんでゐるところです、幼稚園の保姆なんて、冷かしつこなしでムいますよ。

もうこれで心殘りもムいません、明日は歸らうと思ひます。けれど夢のやうに過ぎて了つた、十日があまりに短かくて、勿體なくて、もつと〳〵、何かつかむもののあるやうな氣がしてなりません。

來たてにはまだ芽の開いたばかりの、銀の樣な葉裏を翻して、やはらかにそよいでゐた新綠も、強烈な日光に照りつけられて、硬い青葉となりましたわ。もう那須の春も私の、わだちの音と共に去りませう、淋しい感じがいたします。かしこ

箱から出た女

一

『平尾様の別荘のお嬢様かね。お目にとまりましたかい。ヘッヘッヘッ。へえ知つてます段ぢやねえ、評判ものでさア。ウンニヤお前さま、もう旦那はあるでがすよ。よく手え組んで歩いてまさア。』

厚い掌に吸殻をころがしながら美味さうにすぱり〳〵。庭前を掃いてた爺やをつかまへて、まアお話し！　無理遣り縁に腰をかけさせたのは、黒い髪をぴつたりと分けて、色の赤白い丸顔の、眉の濃い二十五六の優男でした。糸織の褞袍鼠羽二重の兵古帯尻高に引結び、一閑張の机へ片肱ついて、寶石入りの指環はめた白い手で

しきりと左の耳たぶを丸めては放し丸めては放し。

『平尾様の……はアよくお見かけ申しますですよ。エヽお美しい方で、あの東京にも澤山はない御容色だつて申しますけれど如何ですか。お二階の學生さん達なんぞ。彩子様がお通りなさると申すと、もうさわぎなんで御座いますよ。』手捌よく茶をついで出しながら受持のお花さんは云ふ。

この客は夕方散歩に出たついで、角の煙草屋で敷島を二つ買つた一つは、袂へ一つはすぐと口を切つて、そこの火鉢で吸いつけて、平尾の別莊に來てゐる女つてどんな人だときいた。お世辭のいゝ五十ばかりの主婦さんが答へやうとするのを引取つて、

『ヘンお嬢様——お嬢様がきいて呆れらアね。この頃のお嬢様くれえ油斷のならねえものはねえですよ。旦那、あの娘つ子もね　日髪日化粧でしやなり〳〵、天人様のやうな顏してるだが、どうしてなかなかの吝嗇者で、乳母さんも大抵ではあるめ

えつて云ふことさ。此間も……あれは正月の四日の日かねえ東京から客があるから蕎麥を打つて貰ひてえつて、あの乳母さんが蕎麥粉二升ばかり持つて、私の裏の家へ頼みに來さしつたんでさ。

丁度わし居合せたもんだから、田舍蕎麥でお客樣の口に合はねえやうぢやと一式のことにわめいての。わしんとこから鷄卵を持つて來る、山から貰つた長芋があつたもんだから其奴もつん出したりよ、うで上るまでつきつて居て、それでも賴まれ物だからと一つ箸の初も見ねえで、別莊へ持つて行つたですよ、その時だつてお孃樣ア奥から出ても來ず、禮一つぱ云はつしやらず、有合せの菓子折に手拭の二三本つけてよこさしつたきりよ。旦那ン前だがね、朝晩芋團子や味噌汁ばかり吸つてる百姓等に菓子折なんかどうしべい。それが砂糖でゝもあればな、ア、何處でも調法しるだけどね、藝もねえお前さん、小供どもがジキのやうに食つちまひましたよ。否え何も手間なんか欲しいとは云はねえさ。長芋なんぞも此方の勝手でへれたも

んだからそれはいゝさ。せめて鶏卵の錢だけは貰はなければお前さん。三錢五厘づゝしる時だつたよ。利口者だ。その位のことに氣のつかねえお嬢様でもあるめえけんど、しまりやなのさ。そんでお高くつて〳〵近所のものになぞ莞爾ともならしたことはねえだ。

なみ〳〵のお嬢様なら何の年中こんな土地に隠れてゐべい。何だか知れたものではねえだて、乳母さんと只た二人、何をいゝことしてるだか。』

店先に話しこんでた古女房、俵の様な腰をゆすりながら、襷掛の濾紙色した腕を扼しつゝ大口開けてまくし立てる、可哀想に客は面喰つて了つた。

二

この時平尾別荘の奥座敷には、彩子が縁の安樂椅子にもたれて、目覚るやうな紫の紋羽二重に包まれた肱枕、白魚の指を頂に組んで、深い吐息をついてゐた。

折からの夕陽を浴びて、きら〳〵と照る黒髪は、ハイカラな併し上品な、名も知れぬ容方の束髪、水色地に緋の亂菊を刺繍の半襟は、一入色を白くみせ、小作りのせいか二十一の年よりはずつと若々しく、黄八丈に藤色の細ぶき、振をこぼるゝ襦袢の袖は燃ゆるが如き緋縮緬。

輪廓のいゝ細面で、濃い生ぎは、一文字眉、鼻の高い眼の黒い、何處となくはき〳〵とした勝氣の容貌だけれど、これで含笑む時にはウソの様な可愛い笑渦が現はれるのでした。チラリと左の糸切歯に金を入れてゐる。

待つて待つて待ちぬいた土曜日は今日となつて、朝から物事は手につかず、好きな讀書も身に入らず、二時も過ぎ、三時となり、四時となり、心たのみの五時も過ぎ、六時も過ぎたのに、門にわだちの音も聞えず……。午後からはもう、牛乳屋の小僧が門を入り來る瓶のふれ合ふ音をさへ、俥の響ときいてはつとなり、隣家の犬が吠えたと云つては胸をとゞろかし、イラ〳〵待ちわぶる心の中。

身も心もつかれはてゝこの椅子にくづ折れてから、だん〳〵氣が遠くなつてゆき、あれ、彼處に誠一樣が……愕然と我にかへつたとき、四邊は薄暗に暮れ切つてゐました。二ツ三ツ四ツ星がまたゝき出して……。

『彩子樣、おや、お椽に。お羽織を召してゐらつしやいますか。お風邪を召しますといけませんでムいますよ。』

乳母がはいつて來てランプを點けました。

『今日は、もしかすると誠一さんが……。』

あつち向きのまゝ椅子をギチ〳〵ゆすぶりながら、思ひあまつた一端を少しもらして、やゝ心は輕くなる。

『おや、左樣で……。中山樣は今度しばらくお見え遊ばさないんで御座いますねえ。』

『さうよ。だつて。』

身體をねぢ向けて、

お多忙いのよ。御勉強が。他の方たちは春期休暇に、房州だの湘南だのつてお出掛なさるけれど、誠一さんはこつちへ來ると、私がお邪魔ばかりするもんだから。」

言譯らしく語つて含笑む。

『さびしいわね、誠一樣來ないと。』

『左樣で御座いますねえ。あんな活潑な方でいらつしやいますから。』

『涙はボト〳〵と膝に落ちた。こんなに〳〵待たれるとも知らないで、誠一さんはいま何處にどうしてゐらつしやるのだらう……。』つと立つて室内に入りながら、これも神樣の試みと思つて、あきらめられぬけれどあきらめる。來て下さらないからつてお恨みの出來る身分ぢやなし……こんな時いつも彩子は、不如歸の浪さんをおもつて心を落ちつけるのでした。

病氣の浪さんでさへ武男の留守を、二月でも三月でも暮せば暮されたものを、私なんかねえ、誠一樣、強て顏をあげて、莞爾とほゝゑみました。が、生憎はふり落

つるは玉のやうな涙の雨！　我ながら迫り來る呼吸ぐるしさに堪へかねて、

『自然の成行に任せるより外ないのだわ。』

ひしと胸をおさへて叫びました。

掻き毟られるやうなこの思ひ、たゞ逢ひたくて悲しくて、世も名もそんな物は！

彩子の前には何物もなかつた。あまりに戀しくなつかしさの募る時はどうなる身の末ぞとあやぶまれもした、

『もう八時打つたのに……』

書棚の置時計を見返つた眼は、またも湧き出づる小霧にへだてられつ……、

『乳母、もう門を閉めてもいゝことよ。

この次の汽車だと、藤澤驛へ八時半なんですもの、だからもう。』

わざと元氣よく云はうとしたのも、途中でとぎれて含み聲。

しきりと沸騰り立つ鐵瓶の湯は、さしそへてもさしそへても松風の音となつて散

じ去り、あたゝかい春の夜はゆるう更けてゆく。

三

話は十日ほど後にもどる。

場所は麻布なる平尾邸の西洋室、その日は午後からめづらしく閑な身體を丸卓によせて、夫人芙代子は吸さしの莨を灰皿に落しこみ、

『ね、芳夫さん。さうでせう、』向ひ合つた青年の顔をみる。

『いや、姉さん。』

わざと頭抱へて恐れ入る。女のやうに長い襟足、雪恥かしく、黒羽二重の羽織、糸織の二枚襲　芙代子夫人の甥とあつて——卽ち鵠沼の東家に現れたそれ——一歳違ひの叔母甥なれば、いつも姉さん〳〵とのみ呼んでゐる。

艶々した丸髷、金脚の玉の簪、紫紺地の半襟に粂ゆる襟の白さ、髭つきのよさ。

流石に服裝はじみなので、二十七違ひの良人を持つても、さのみ不釣合とは見受られぬ、それ者上りかと疑はるゝは、顏立、さうなす業で、どうしてこれが一年前まで、××女學校に敎鞭とつた人と思はれませう。

卓上の貰入から一本とつて芳夫と火の口を合せつゝ、

『だから芳夫さん、そんなことを云つたつて仕樣がありはしませんよ。貴郎が彩さんに相當したやうな人なら、私だつてどんなに嬉しからう。云はれるまでもなく盡力もしませうけれど、いかに最眞目で見たからつて、芳夫さんに彩さんをとは何うしても云へはしません。

またお父樣がお嫁りなさる筈もなし……。』

『伯父さんは姉さん次第なのぢやないか。彩さんは、僕よく知らないけれど、箱入娘で育つた人だろう何にも知りはしないんだ。だからそこを姉さんが。』

『だから芳夫さん。貴郎が御當人を手に入れてお了ひなさいと申すのですよ。さう

したらあとはどうともして上げますわね。けれど、何だわ、貴郎が思つてるやうに、財産を分けるの何のと、そんな事はありません。それは違つてよ、芳夫さん。何もあの女は當家の何でせう。先の夫人が、御自分の血筋だから連れていらしてお育てになつたまでのこと、籍だつてお實家にあるんですし何も此方ぢやこれまでの好みに相當の支度して、嫁けてさへ上げれば、それでいゝ——澤山なのですわ。何だか明坊が出來たからこんな事云ふやうで惡いけれど、芳夫さんは何かあの女が、當家の相續人でもあるやうに、思つてお出だから……。』

『だつて左樣なのぢやないか。實際、姉さんさへ來なかつたら、こゝの家は彩さんの物なのさ。ねえ。

それを明坊が生れたからつて、今更千や二千の嫁入支度で厄拂ひつて方法があるか伯父さんもそんな人ぢやあるまい。え。』

『ウソ被仰い、人聞の惡い。お父樣は私が來る前に、彩子は一先麹町へあげやうか

とまで被仰つたんですよ。けれどお實家には御兄弟も多いもんでせう。自分の勝手で別莊の方へ行つて了つたんですわね。別莊へだつて私が追ひ出しでもしたやうに云はれてるけど、何の、別莊のね、先の所有主から引續いてゐる留守居つて云ふのが、彩さんのもとの乳母だとか何とか、それだもんだから大よろこびで、手まはりの道具なんぞみんな、別莊へ運んで了つて、今ぢやたまに東京へ見えたつて、他人行儀、まるでお客樣のやうですわ、打ちとけにくい方でね。』

『ちや何かい。彩さんは本邸へは滅多に來ないんだね。』

『え、、麹町の方へばかり行くんでせうよ。屹度。

麹町ぢやアお兄さんや弟さん方のお友達が大騷なんでせう、どうしてこの頃の若い女は油斷がなりませんよ。かへつて箱入ほど蟲のつきやすいもんでね。

いろんな噂も耳にはいるけれど、何も私がそんな事に干渉する義務もなければ權利もなし……。つて何ですよ。打捨つてもおかれませんしね。

實家ちやまたお母様が、矢張手許におかなかつた子は子の様な氣がしないつてね。兩方から繼子あつかひにされてるんで、思へば彩さんも可愛想なんですよ。』

『否。伯父さんとは仲がいゝつて話ぢやないか。』

『どうして——情の薄い方でね。先の夫人が亡くなつた時だつて、涙一滴こぼさなかつた。それや平氣なものだつたつて、親類中の一つ話になつてますわ。ましてお父様となどしみ〴〵お話なすつたこともないんですつて。私が嫁てからはなほのこと。

妙な方ですよ。イヤに澄ましてね『芙代子様』ですつさ、私のことを芙代子様芙代子様つてねまア。』

栗梅の小紋縮緬の肩をゆすつて、

『何しろ、芳夫さんの奥さんて柄ではありませんね。ホヽヽヽ可笑しいやうだわ。貴郎も相替らず蟲がいゝわねえ。』

芳夫は俯いて、小指の先で耳の穴をほじつてゐた。

四

『あら、誠一様。』

『はゝゝゝ』

朗らかな笑ひ聲、薄紫の富士を見渡す築山の上の四阿に椅子を並べて語らふ二人。まぶしいやうな白銀の小波よする泉水と、枝たわゝなる吉野櫻と、碧玉の空とを背景にして、珍らしい唐人髷、紅白の蝶長を三枚重ねて、大きな緋薔薇の花束をさし、日向には白過ぎる程の厚化粧、長い髪をすーつと、羽織の下に結び上げた帶の高さ。

誠一は彩子と五歳違ひ、中肉中背で五分刈頭の、顔は丸い方、引しまつた口許、涼しい眼ざし、太い眉毛は何處か胆力持らしく、小高い鼻に金縁眼鏡、髭のあと青

々と、羽織は黒の五ッ紋、太白の太紐豊かに結んだ胸をテーブルでくぎつて、右手に吸さしの巻莨の灰を彈く。

冷むる紅茶をそのまゝにして、ちつと俯いた彩子は、紫銘仙の膝を撫て居る。袂に顔をおしあつるや、颯と、緣濃き鬢を透かして、血のたれさうな耳朶の紅。誠の戀の證據には君のすべてをたまへとせまる、處女の權威を地になげうてよと云ふ談判。

彩子は泣くより外ありませんでした。

＊　＊　＊　＊　＊

丁度去年の四月中旬、遊行寺の白木蓮の眞盛な時分でした。キチンとした角帽の青年、七里ヶ濱に病を養ふ友人を訪ふとて藤澤驛に下車した誠一が、電車の乘場で圖らずも彩子と邂逅つたのは。

彩子その時は活花のかへりでありましたとやら、ルイザ巻に水色リボン、手に持

つ緋桃の花よりも濃く紅潮して……會釋したのが精一ぱい。

『おより下さいまし。』つて、たつた一言。

何心なく誠一は彩子とつれ立つて鵠沼で下車ました。右も左も小松原、翠綠に榮ゆる矢飛白と制服の黑との見えつ、かくれつ。濃紫のパラソルの蔭にかくるゝ、彩子の頰は、日光に蒸されしそれのみならで、息のはずむまでほてつてゐました。

小花まじりの若草を靴のあと、緋ビロード表の草履でふみつけながら。

それから誠一は、折々この別墅に浪の音きく身となつた。

聖なる兄よ妹よ。と誓ひ合つたのも、刹那の眞ではありましたらうが。いつまでそれのつゞいたものでせうか。いつとなく激しやすく、癇高な、顏の色さへ白うあせ、妙にヒステリツクな氣のするどい女となつて了つて、思ひつめては矢も楯もたまらず、一週間の別離を悲しみ、日毎日毎に書き送る彩子の歌は絕えませんでした。

帝劇の特別席に二人並んだ姿をみたも、精養軒の樓上に、愼ましう卓をはさんで語

らふてゐたと云ふのも、運動會や音樂會につれ立つたのを見かけたと云ふのも、みんなその頃からのことなのです。

『人の肌に手を觸るるは、新なるべき君が手よ、暫時は許せ、我が胸に、遠のく浪の音あらむ。』

一盞の菊酒に熱し切つて女の膝を枕にたふれた人は、その和らかな手をとつて胸にかき抱いた、彩子は湧き上る懐かしさの情の、渾身の脈にめぐり渡るをおぼえて、沸ゆる涙を濺ぎつゝ、男の肩に面を伏せてひた泣きに泣いたこともありました。

感情の高潮に達した時期も過ぎました。

一語なくとも眼と眼相見て心足りし日や、純の純なる熱情の燃えたつて、心と心のびつたりとふれ合ふた時の氣分はもう得られない。いつよりとなく崩しかけた、疑ひと云ふことや自尊心と云ふこと、それらによつて溶化しきらぬ心の缺陷をおぼえた彩さんは、そのさびしさやるせなさ、もどかしさに、焦れてもだえて泣いた。

すねて。誠一さんに當り散らしもした。

『彩さん。女つて氣樂なもんだねえ。駄々さへこねてりやいゝんだね。男子はこの激烈な生存競爭の渦巻のまん中に、血と骨をけづつて奮闘しながら、君たちには不自由させないんだからね、着物もこさへてくれるだらうし、芝居へも伴れてつてくれるだらうし……。馬鹿にしてる！』

と云はれた、時には、たまらなくなつて落涙した。

やつぱり自分は一人だつた。人の心に隱れ家はなかつた。吾を守るもの吾あり。あまり人に多くを望み過ぎたら罪だつた。と悟つては、それが二人の靈の離れ行くはじめでありました。

青春の智力充實、輝くごとき希望をもつて、人生の光明境に突進しつゝある誠一さんと、現實の世界をさげすんで、すねてぐづつて立ちすくんでゐる彩さんと、同じ道を行けやう筈はありません。明るい心と暗い心と、そむき合つた思ひを持つ

た二人は、どうしても別々の天地に生きねばならぬ運命だつた。

初心と云はうか、無造作と云はうか、二十一と云ふ年をしながら、あまりに幼かりし己を恥ぢ、戀愛の意義も知らず、最後の目的もなく、まつはり戀した自分の愚さをおもひ、さりとていまさら、絶ちがたき愛慕の情の切なさ、苦しさに、彩子はこのまゝ氣も狂へとばかり、泣いた　醒めて果敢なき日は來れるに……。

五

『だつて乳母』彩さんは打ち傾いて、讀みさしの頁を指先で彈きながら、

『だつて乳母』

洗ひ髪を肩に流して、頭上に光るは眞珠入のさし櫛、籠ランプの灯影に顏色美しく、ふくやかな友禪の座布團に横座り、びつたりと片頬は机へあてました。

てら〳〵と、灯に寫る紫檀の名澤、その上に伏せた半面、石宮細工の樣に眞白く

動かさぬ瞳の黒さ。

飽くまでも拒み通して、勝利の悲しみを味はふか。愛の犠牲となつて服従しやうか、彩子は死ぬ決心をするほど迷ふた。食もすゝまぬこの頃の有様を、乳母は乳母だけの取越苦労から、あらぬ臆測をたくましうし、今宵しも面をおかして、涙ながらに彩子を掻口説いたのでした。

あちら様は殿方でゐらつしやいますもの、何のお障りも御座いますまいが、女は損な物、御出世前の貴嬢が、お約束でも公然とおきめ遊ばしたらどうなので御座います。お二人きりのお談合ぢや仕様が御座いません。あちら様は小説とやらもお書き遊ばす方ぢやございませんか。お筆もお口もお手の物でゐらつしやいませうし、かう申しちや何で御座いますけれど、ほんの一時のお出來心としましたら　貴嬢は生涯の疵物、どう遊ばすお氣で御座います。とせまられ、苦笑してピクリと濃い眉に物あり、その小さな丸髷をふるはしてゐるのをながめやり、二三度またゝきしながら

ら落ちついた聲音で、

『乳母。心配しなくつてもいゝ。私は生涯男の自由になるやうな女ぢやなくつてよ。また誠一樣もそんな方ではゐらしやらないわ』

『ハイ彩子樣。』

襦絆の袖引出して涙をふきながら、

『それやあもうお嬢樣の御氣性も中山樣の御人格だつてお信り申して居りましたからこそ、私がおつき申して居りながら、こんな事になつて了つたので御座います。麻布の方へも麹町の奥樣にも何と申譯致しませうやら、年甲斐もない……。いえお覺のないことにも致せ、いまとなつては何を證據に潔白をお立てなさるおつもりで御座います。もう近頃近所で何と申して居りますか。貴嬢は何も御存じなく、引こもつてお出遊ばすからよろしう御座いますけれど、きかされる乳母の身になつて御覽遊ばせ、彩子樣方は直きに世間なんぞつて輕蔑遊ばすけれど、世間は何より大切

で御座います。』

無言て栞の絹糸總をしきりと指に絡めてゐる。

『近所ばかりぢや御座いません。先日も御門の前を、中山樣のお友達らしいので御座います。大學の方が二三人、大きな聲でいろんなことを被仰りながら、お通りなさるぢや御座いませんか。中山樣と御結婚遊ばすのなら宜しう御座います。こんな結構なことはムいませんけれど……。』

『第一彩子樣。別莊にばかり引籠つてお出あそばすのが間違つて居ります。人には逢はれない御病氣なのだとか何とか。みんな碌な事は申しませんでムいます。そんな事がどれほど御緣談のお障りに成つてゐますか。ずつと東京にさへゐらつしやいば、今頃は立派なお奥樣——何誰だつてもうお子樣抱いて被居るお年で御ませ塵います。嗚呼、早く然うおなりになつたら、乳母はどんなに嬉しう御座いませう。』

『そんなに世間を恐れたり、はゞかつたりする要はない。云ひたいものには何とで

も云はせてお置き。どうせ私はひとりぼつちなんだもの。』

『お傷はしい。ほんに歴とした方々が東京にはお有遊ばしながら、眞實お一人もお力になつて下さる方はムいません。麹町の奥様は以前からあゝした方でゐらしやいますし……あア麻布の先奥様さへお出で遊ばしましたらねえ、彩子様もこんな御苦勞は遊ばしませんに……』

豐ならぬ彩子の頰には微笑が閃いて過ぎた。二年前、十一年ぶりの思ひがけない再會に取ついて放れず、

『御苦勞遊ばしましたねえ、平尾様の奥様つて方もあんまりで御座いました。彩子様。』

と泣いた乳母がと可笑しく思つたので。

『で御座いますもの。決して御無理とは存じ上げませんが、何しろ中山様も、まだお若いので被居しやいますから。』

云ひ憎さうに、云ひさすと、

『乳母つたら、乳母つたら、乳母つたら。』

机の上に身をのり出して、

何處までも疑つてゐるんだね。私も誠一樣もそんな氣があつてたまるものですか。乳母たちは、自分等の考に引くらべて——いろんなことを——失敬だわ。』

彩子も泣き出して了ひました。例の紫羽二重の袂の下で喞り上げる。

『どうせ私共にはわかりませんでムいます。彩子樣はあれほど中山樣をお慕ひ遊ばしてゐらつしやる、中山樣も此方さまをお思ひ遊ばせばこそ、あアして入らしやるので御座いませう。それをいつまでも通るものと思つてゐらつしやいますか。それは貴嬢のお我儘と申すもので御座います。』

『乳母つたら。』一聲高く、

『いゝよ。お云ひ。何とでもお云ひ。私はそんな、そんな、誠一樣だつて誰だつて、

この世の中に私の身を任すやうな男はありやしない。ある筈はないのだから、そんな心配は安心おし。』

『まア何を……彩子様は少しお氣に障ることを申すと、すぐ根にもつてそんな事お云ひ遊ばす。』

『今更始まつたことぢやないわ。乳母があまりいろんなこと云ふからさ。云つて聞かして上げたばかり、私はさう思つてるのだから、私の思つてるやうな人格の人は、とてもこの世にないのだから。』

『また其樣な意地つぱりをお……少い時の癖はぬけないもんで御座いますね。』

『だつて良人にするだけの資格の人がなかつたら、一人で居るより外仕方がないぢやないか。

どんな人でも男でさへあれば、お嫁に行くなんて女とは違ひますよ。』

『彩子樣』涙の目を光らせ、

『彩子さま。意地づくや行がかゝりで云つてゐらつしやるのなら宜しう御座いますが、それを御本心としましたら、飛んだ事で御座いますよ。』

きつとなつた乳母をみて、彩子は恐れてだまつて了つた。

乳母は家庭と云ふことを説きました。お小い時から、つひに眞實の親御様の御情愛つてことを御存じないんでムいますから、御無理もムいますまいが、あんまり冷淡でゐらつしやる。貴女は御自分から世の中にそむいて拗ねて被居しやる。

お嬢様でお出のうちはまだ眞の世間の味などのおわかりにならう筈はない。奥様となりお子様をお持ち遊ばしてからこそ、ほんたうの幸不幸——物質的でなく、表面的でなく、精神的の、眞面目な御生涯となりますのです。それを食べず嫌ひにそんな事被仰つたとて、それはお机の上の御空想と云ふもので、つまり御不自由がなくお閑なもんだから、其様に方圖のない贅澤をおこね遊ばす、と思ひ切つて叱りつけました。

『さうよ。乳母、食はず嫌ひだつてそんなこと、お芋やお魚ぢやあるまいし。一寸でも箸をつけてから、やつぱりこれは美味くないつて、よしちまふことが出來ますか。

何も日本に女ひでりがしやしまいし。私一人ぐらゐどうしたつて、それがどうしたと云ふのよ。

何だね、お前だつて牛乳だのバタだの、人の食べるのも大嫌ひのくせに。』

『嗚呼、今日までは何處へお出し申しましても、恥かしくないお嬢樣と思つて居りましたが、彩子樣、情ないこと被仰います。乳母だつて平尾の奥樣だつて、そんなお方にお育て申したおぼえは御座いませんものを、御不足のないお身體にお生れになつたからは、一人前だけのことをなさらなければ、人間の役目がすまないぢや御座いませんか。それが世の中と申すもので……彩子樣の樣に。』

『だから私は生存稅の滯納者だと云ふのよ。それで不可なければ、執達吏でも何で

も差むけるがいゝ。』

『彩子様・花ならば今が盛りでムいます。女の春は短かいもので御座いますに、いゝ氣に增長遊ばして、下らない強情張つて被居いますと、中山様でも何誰でも、みんなお身をお固め遊ばして、あなた、もう其頃はふれて歩いたとて、買て下さるものはムいません、御兄弟方の御保護をお受になりますのと、旦那様におより遊ばすのと……どちらが女の誇で御座います。もう乳母だつていつまで生きては居りませんん。』

『いゝよ。御飯をたいてくれる人ぐらゐ、何處へ行たつてあるから。』

『まア彩子様。』涙をふき〳〵、

『さうまで被仰れば……でも、人間には病みわづらひと云ふこともムいます。』

『さうよ、小供でもウジヤ〳〵出來てから、病氣したり、されたりしたらお互に隨分困るわねゝ。一人者は氣樂なものよ 病院もあれば看護婦と云ふものもある、死んだ

つて泣いてくれるものもなし。』

『そんな事ばかり被仰つて……。』

『そしたら井上の叔母様を御覧な。あれほど叔父様をお嫌ひ遊ばしたくせに、毎年々々お産をしてサ、ほんとに女はいけないわね。嫌つたものなら死ぬまで嫌ひ通すがいゝぢやないの。よく今更赤ン坊なんぞ出來たものだわね。』

乳母も起躍となつて、

『それはさうでムいますとも、彩子様のやうな方ばかりありは致しません。』

『女は一旦嫁入りしたら、其の後は一種の道具として使用されるばかりなのよ。私はいつまでも人間であるよ。妻だの母だのつて男の奴隷にはなりたくない。』

一體女性がこの世に存在の意義と價値とは何なのであらう。誰れでも女は子供を生んで育てれば、それでよい様に言ふが、彩子はそれが心外でたまらなかつた。そして世のあらゆる女の心理を疑つた。みなその天職をまつたうせんために、使命を

自覺して嫁ぐのか。何にも知らずに結婚して、否でも應でも絶對的の服從に甘んじなければならぬ境遇におちいるのか。虛榮のためか。本能の捕虜か。或ひは百年の苦樂人によらねば生存は出來ぬので活きんが爲に身を賣るのか、それならば、芙代子樣なんぞ。立派に先生と立てられるお身でありながら、何の必要があつてお頭のはげたお父樣のとこへなぞ嫁つたのであらう。

湯上りの軀を鏡にうつして、泣いた彩子でありました。精神的ばかりでは滿足が出來ぬと云ふ、それも人間の本能とおもへば　誠一樣をさら〳〵無理とは思はぬが……あゝ現實曝露の悲哀！　と彩子には堪へられぬ思ひがした。

いまはしさに身震ひして目を開くと、乳母は悄然と思案の體。

『まア〳〵お若い方はみんなそんなもので御座いませう。けれど、いまに何でございますよ。どんな方でも旦那樣を持つて御覽あそばせ。またそんなものぢや御座いません。』

『ホ、、、、誠一様と同じ様なこと云つてるわ。本能に負けるやうな私ぢやアない。』

彩子は迸しるやうな高笑ひした、燈火に輝く瞳のうちきら〳〵と、後ざまに片手をついて、雲のやうな黒髪の、背をあまつて疊にしいたを、さら〳〵と左右に打振りながら。

『やつぱりお年頃にはおかたづき遊ばしませんとね。御病氣なんか起るもので御座いますよ。光子様や藤枝様を御覽遊ばせ。お二人ともお二十五でお亡なりになりました。』

『もういゝつてことよ。』

震ふ唇にのぼる冷笑、つまさぐつてた筆の軸はばり〳〵とかみつぶされた。

彩子は生れながらに小説の主人公のやうな運命を持つてゐました。

二十餘年前、父様は當時××省の利者、品行謹嚴、廉潔のきこえ高く、しかも評

判の美男子と云へば、彩子の美しいのは父様似なのでありませう。その永田家の嫡女となつてゐるけれども、これには込み入つた事情があるやうです。

同郷の夫人をたよつて、永田家に身をよせてゐた或る學校の先生で、内外の評判もよく、先生々々とみんなから慕はれてゐた吉川といふ婦人がありました。

その頃のこと故引詰の夜會結び、黒縮緬の羽織がよく似合ふて、脊の高い、色の白い、美人と云ふ名は許せなくとも、どこか重々しい勝氣な婦人で、家庭を忌み嫌つて孤獨の生活をつゞけやうと云ふのでありました。

永田夫人とは姉妹のやうに仲がよかつた。

夫人も、へだてなく睦み合つて、まさかこの婦人のために、大なる悲劇がかもされやうとは夢にも思ひがけなかつた。

ところが一夜、花は狂風に散らされました。泥土にまみれた花片のやうな吉川さんは、夫人の膝に縋つて泣いて〳〵正體もなかつたさうです。

彩子は夫人の子として披露されましたが、誰もあやしむものはなかつた。情の薄い御兩親と何も知らぬ乳母は泣いたさうですが、一年とへだてね間に妹の、文子が生れてはなほのこと、病身を名として乳母もろとも、しばらくその田舍の家へあづげられることゝなつたのでした。

とう〳〵こゝで八歳の年まで成長ちました。そのうち實家では弟たちが二人も殖えるし、いつになつたらお迎への來ることやら、乳母ももとより手離す氣はなく『嬢ちやま』が、いつか『彩坊』となり、送つてくるメリンスの着物は箪笥の底にしまはれたまゝ、日に焼けた顔の眼ばかり光つて、金巾の帶に藁草履バタ〳〵、すつかり田舍の子になりすまして居たが、丁度麻布の平尾家では、年來夫妻の間に子なきを愁ひ幸ひ子柄も美しいので非常な熱心で懇望の末ついに、彩子はこの伯母夫人のもとに引取られたのでありました。

赤ちやけたそゝけ髪も純黒な稚兒髷に結び上げられて、白衿、矢絣の見かへる樣

な姫様仕立、幼いながら犯しがたい威光に、誰も〳〵舌をまくほどな容色よし、利口な子。することなすこと、口の利きかた、まるで芝居の子役の様と、心ある人は眉をひそませたさうですけれど。

夫人は昔風が好な女でした。

彩子はその犠牲となつて、學校ももとの高等二年まで。その後は家で裁縫とお習字と琴のお稽古、お轉婆盛りを重たげな文金高髷しほらしく、花を活けたり、お茶をたてたり、母夫人と一緒でなければ、縁の外へも出たことはないんでした。

かくて、籠の鳥同様な、四疊半の室を天地と觀じて、十八の秋までは無心にすらすら丈の伸びた外出勝の父なる人は、彩子のことは夫人任せ、何にも口に出しはしませんでしたが、折々晩餐の傍に侍べる、日蔭に咲いた花の様な、可憐な美少女の風姿をみては、流石側隠の情も催ほして、氣むづかしい夫人に鍛へらるゝ年端も行かぬ身をあはれがりました。

が、彩子は父に懐きませんでした。むしろ軽蔑して居たんです。あまり母夫人の勢力が良人に強いのを見様見真似て。

けれども花のやうな乙女心、うらゝかな春の光りに逢ふて、伸びむ〳〵とする若草は、いつまでもふみつけられたまゝでは居ませんでした。日ましに美しうなり勝る白い肌や、黒髪の光澤と共に、母夫人の眼をしのんでは裁板の下に詩集がおかれ小説がかくれるやうになつて、あまりの壓制を恨めしと思ふ心も起つた。束縛れる境遇をかへりみて泣いた。

さうして慰藉を〳〵と求めて、ます〳〵文藝の道に傾いて行き氷のやうな胸もとけ、熱い血汐が鳴り響いて、さながら白い女鳩の和毛のやうに震へた、甘い〳〵乙女の悲哀や、若々しい煩悶と云ふことも知り初めた。

一方ではそろ〳〵持ち上つて來た結婚問題に、母夫人が氣をもみ始めやうと云ふ時、幸か不幸か、急激な一大革命は、彩子の上に落ちかゝつた。夫れは夫人の死に

遭遇たのです。

常からかよはい人ではあつたけれど、心臟病とやらでたつた一日病ふただけ、あつけないやうな別れでした、失心した樣な彩子は、たゞ喫驚して了つて、悲しいと云ふ意識もなくものめづらしげに賑かな家の內を見廻してゐた。そして葬送の時氣分が惡いとて供に立たなかつたのがはしなく導火線となり、世間の口にのぼされて今まで朧げだつた自分の身の上も誰からとなく聞かされました。

それでいつとなく永田夫人のことを、母樣と呼びかへましたが、この時はもう法學士の兄樣が當主で、夫人は切髮の被布姿。お茶の水へ通學てると云ふ妹の文子や腕白盛りの弟達の中に交つた彩子は緋鯉の群に追ひまはされる金魚のやう、弱々しいあはれなものでありました。

俥でなければ外出は出來ず、電車にも乘たことがなければ、ピアノ、ヴアイオリン、など知らずとのたまふ。彩さんの樣でも一種の不具者だね、としばらくは麴町

の家の笑ひのたねでした。

ところがその後の一年間に、別人のやうなかはりやう。母夫人が一週忌の法要のむしろには、白無垢姿端然と四邊をはらつて氣高さ立派さ。

いまはひそかに文子の方が、髪の結方など眞似るやうになりました。

丁度その頃のことでありましたらう。麹町の家で落ち合つて、はじめて誠一に紹介されたのは。

誠一は文科大學の秀才、文子等とは從兄にあたる人なのでした。男としては痩形ながら、すらりと背の高いのに、制服も見榮がして、二ツ目の金のボタンをまさぐりながら、微笑を身邊に湛へてゐた。その凛として朗かな聲は、この時から耳について了つた。青年文士としてのその名や創作は、彩子はすでに知つてゐました。美しい藝術でも見るやうな氣がして、その人の態度をながめました。

明けて二十の正月には、妹のカルタ會に招かれたら、その席に誠一も來てゐた。

向ふから目禮されたときの嬉しさや、丁度隣合て座つて、藤紫の振袖に包むにあまる胸のときめき、常の様にもなくうなだれて物云はず、そのくせ誠一が他の女達と談笑するときは、流人のやうにさびしかつた。とう〳〵たまらなくなつて、中座して了ひました。多くの花やかな人と共にあるのは苦痛だつた。

その夜歸邸てからも、しきりと胸がをどつて寢つかれなかつた。數日の間は寢てもさめても、誠一の姿が目の前を去りませんでした。けれどそれから間もなく父君は、新夫人を迎へらるゝ騒となつたので、彩子は別莊へのがれました。

乳母に遇つたよろこびや、海岸の風光やものめづらしさにかてゝ、やかましい頭のおさへてはなし、小さな女王様のやうな氣になつて日を送つてた處へ、かの時かの人との邂逅！

もう誠一の往來するやうになつてからは、何もかも忘れはてゝ了つた。恐らく一時は世の中に、彩子ほど幸福なものはありませんでした。彩子様はだん〳〵お若く

お美しうおなり遊ばすと、目をまろくしたのは乳母ばかりではありませんでした。活々した憂鬱とでも云ふのでせうか、樂しい苦しみとでも云ふのでしやうか。涼しかつた星の眸は夢みるやうにうるんで、ひとりすゝり泣いてゐることもめづらしくはなかつたが、一度誠一の笑顔に接すれば、母親の乳房にすがりつく稚兒のやう。春の朝、秋の夕、たはいもなく月花に憧れくらした。

あはれ一年後の今日、戀する女はいつまでも處女のまゝではゐられないのかと知つた驚きや、すべての希望も期待も歡樂も、夕陽の空のそれの如くに薄れゆきて、榮華のあとの凋落に泣く身となつた、

自分で自分がわからない。こんな矛盾した話がまたとあらうか、何が不足で誠一樣に、あゝ誠一樣に……。片時も離れがたく身もやせるほど思ひ焦れながら、なほその人に從ふことをがへんぜぬ心とは……。自分でも今まで、こんな女とは知らなんだ。許して下さい。誠一樣！

彩子は聲もなく机に打ち伏して身をゆすぶつた。乳母はそつと水さしを持つて、臺所へ立つて行きました。

六

或雨上りの心地よい朝、彩子はつまらなさうな顏をして、誠一を電車の乘場まで見送りました。朝化粧した頰には血の氣が失せて、さながら月夜の菜の花畑のやうに白く、血筋の張つた眼ばかりがぬれて大きく輝いてゐた。諸共に麥笛吹いて子供らしう興じたはこゝ、藤ヶ谷橋の白い手摺に身を凭せ、並んでうつる水鏡に思はず顏見合して含笑んだのもこゝ、菫をつんだ岡、雲雀の歌に誠一が巧みに口笛を合せたことや、何もかも傷心のたねなのでした。黃ろい蝶がひら〳〵と二人を越えて、豌豆畑に舞ひ入つた。天にも地にも逝く春の愁は長い。

プラットホームの柱に凭つて腕ぐみする誠一の足元に蹲踞んで、あふゝ涙を七

分コートの袂におさへた。お召の縞はしと〳〵にじんで了ひました。

二人は何にも云はずに別れた。

ぐわうつとやつて來た電車は、青年を吸ひこんで、いつものやうに窓からさし出す目禮の笑顏もなかつた。

頭も下げずに步を返した彩子ははじめて、誠一さん堪忍して下さい。と音に立てゝ嗚咽した。空氣草履の足元も定まらず。ふら〳〵と別莊へかへりつくや否や、驅け入つて襖閉めきり、我を忘れて泣き伏して了つた。

心ゆくまで泣きに泣いたが割れるやうな頭痛を感じて、やう〳〵顏をあげると襖のすきから次の間の誠一の拔殼の床がなほ人ある如く黑ビロードのくゝり枕は、裾の方に投り出されてある。室內にはまだその人の人の香さへするものを、今日からの二人のへだては……。

二度と都の地はふむまい。人にも遇ふまい。私は、私はと……、堪へかねてふた

ゝび突伏して了つたとき、

『おや、彩子樣、まア彩子樣』

驚いた乳母はひざまづいて、其の疊につけた前髪の下に眞白い指のわなゝくを、ぢつと見てゐたが、

『どう遊ばしたので御座います。よ、よ、彩子樣。何か中山樣と……』

『どうもしないよ。あつちにお行き。』

がばとはね起きて緣へかけ出したが、柱につかまつて物狂はしう、咽入る優しい肩は顫々と木の葉のやうに打ち震へる。

誠一は怒つて去つたのでした。僕だつて男だ。未練はない。君ばかりが女ぢやアないつて。後悔するな、逸した機會は、永久にかへりはせんぞ。知つてゐます。どうとも御勝手に遊ばせ。と云ひ放した、彩子の面は強う御座いましたけれど……。

七

打けぶる春雨に天地濛々。生ぬるい南風は凝つて鏡面の雲となり、朝化粧する彩子の疳癪玉を破裂さした。オリーブがゝつた絲織の袷、匹田の丸帶のお太鼓可愛く大きな大きな桃割に花櫛を挿してゐるところやつと十七ぐらゐにしか見えません。

身も世もあられぬ人戀しさに、何故、何故、私はあの戀を捨てたのだらう。と彩子はめちや〳〵に泣きました。せめて手紙でも出したらば、もう一度逢へるかもわからない。行かうか。東京へ。誠一さんとこへ。もう打たれても蹴られても離れまいか。と驅け出しても行きたく思つたり、ふつと我にかへると、現實はつひに人を禽獸たらしめずば止まず、の一句を思つて、わづかに心を慰めた。

夢、夢をみたのだ。夢は美しかつたけれど。現實に求めて得らるるものではなかつた。泣く〳〵も机によりそふて、抽斗しの奥からビロード張の小箱を取り出して

パチンと開けた。それは金光燦たる、寶石入りの、筐の指環です。

別れる時に、氣のつかないではなかつたが、これぱつかりは返す氣になれなくつて……誠一樣は忘れてゐたらうか。あゝ平氣でこれを指にさしてゐた頃が戀しい。いまではどうしても氣がとがめて、毎夜毎夜燈火の下に、そつと手にのせてながめるばかり。

ぢつとその寶石にキツスしました。ヒヤリと冷たかつた。けれど胸の中は火の樣でした。

『戀する人に健忘と
　つよき心臟を與へずや
いま悲哀に過ぎし日の
　快樂おもふに忍びしよ』

思ひあまつてうたふ時、聲はいつになく美しかつた。夕方などよく柱にもたれて

默然として雲をみるのが癖になつた。

日立つほど細つた手首に、亂るゝおもひを掻抱いて、疲れ切つた頭をかりそめに疊の上に横たへていつかうと〳〵して了つた。目の覺めた時、雨の篠突くやうな大降となつてゐて、戸をひいて了つた室内は晝ながら手さぐる樣な薄暗さ、自分の上には友禪メリンスの掻卷がふはりと着せかけてありました。やはらかい紫ビロードの襟に顔をしづめて、こんなさびしさのいつまでもつゞく位なら、いつそ死んで了つた方がいゝと思つた。あゝ誠一樣に今一度、逢ひたい。逢ひたい。逢ひたい。

額ににじむ汗をぬぐふて起き上らうとしたが、何とも云へぬ、味氣ない、わびしい切ない果敢ない感はむら〳〵と胸をついてたちまちふら〳〵と倒れかゝりました。

誠一樣

もう逢つては下さらないのですか、二人は敵同士でもないものを。

男の心つてあゝしたものか知らないけれど、あんまりな邪推だ。情ない。何しに

爲になすの涙などがこぼれやう。それを空涙だの、僞つたの、釣つてたの、一時の感情を刺戟して樂しむためであつたらうのつて、誠一さん、そればかつかりは、あんまりさもしい邪推ですわ。あまりのことに云ひとく術も知らなかつた。どうせ〳〵私のこの胸のうちは、誰も知つてくれるものはない。くらぶるものもない故に、現し世の人の胸にはとほらないのだもの。なまじ力ある腕に縋つて、泣かうとしたのが惡かつた、一人で生れて一人でゆく、やつぱり私は一人でした。

戀しい〳〵人に、な世身も心も捧げつくすことは出來ないのか、我儘者、自我の强い女、罵らるるまでもなく、すねたる性を自らも悶えて泣いてゐるのですけれど。

みんな〳〵幼い夢でしたわねえ、慘なく醒めて了つたけれど、夢とは知つても、あきらめやうとしても、忘れることは出來ません。忘れる程の戀ならば、はじめからこんなに思ひはしませんものを。

誠一様。貞操は慊のみの問題ぢやあるまいに、心はもとよりその接吻までゝれは許しながら、なほ處女の純潔をたもてるものと誇るか。と被仰つた。

そんなおそろしいことは云はないで下さい、私はもう生れたまゝの乙女ではありません。君が唇にふれたるこの手、この額、ましてこんな、傷ついた胸を抱いて、再び他し人にまみえやうとはゆめ〳〵思はぬものを、どうしてそれをおせめなさるのでせう。そんな私と思つてゐらつしやいますか。

女にだつて意地はある、どんな事があつたつて、あらゆるものをなげうつても、この一念ばつかりは、守り通さうと決心したのに、恐喝さないで下さい。私の四十路はどうあらう。誰も〳〵たよる人なき獨身の心細さ。オールドミスの末路の悲慘な事は知つてゐます。自然は一人を許しますまい。けれども〳〵そのすべてに打ち勝て、え、打ち勝てみせますわ。

誠一様、男に敵對しやうなどと云ふ、強い女ではないんです。長い目で見て居て

下すつたら、いつかは御胸のとける機も……いゝえ、いゝえ、私のことなんか。忘れてお了ひなさるかも知れないけれど、それだから、それだから、捨られぬ中に退いた身です。熟すれば、落ちるは木の實のならひでせう。うんで腐つて溶けてゆく……。

落ちぬ間にとの神の情か、どうしても抗することの出來ぬ。不思議な心理狀態に引ずられて、こんな運命の穴に飛びこんで了つた。誰をうらまうやうもない。

みんな私が惡いんです、絕ず火水の相戰つてるやうな、私の性格から來た悲劇です。この苦悶につかれて弱つて、君戀しさに焦れ死ぬのが自分の天命だと思つて居ます。

もし幸に命があれば、俤の人を胸に秘めて、悲しい記憶をせめてもの慰藉に、清い美しい生を送らう。誠一樣、あなたはこれから家庭の御主人公となり、可愛い幾人ものお父さんにおなり遊ばしても、彩子はやつぱり今のまゝの彩子よ。可哀想

とは思つて下さいませんか。君に捧げつくした愛と涙……いゝえ、捧げたとは云ひますまい。囚はれ果たあはれな彩子が、これほど苦しんでゐると知つたら、そむいた罪は許して頂戴。何のためにそむいたか。清浄い〳〵二人の間は、肉體の滿足なんて云ふ。最後の墜落で、蹂躙つて了ひたくはないのだもの。

こんな事お聞になつたらまた、あてつけがましいとお憤怒なさるばかりであらう。だから〳〵、私は何も申しません。そんな事が云へるものですか。何と誤解されても罵倒られても、だまつてお別れして了つた。

もう、もう、山とも云はず海とも云はず、迷つて〳〵足の向くまゝに、何處かへ行つて了ひたい！

彩子は飛び起きて雨戸を細めにあけました。一面の小松原、右に左に、さながら千馬萬馬の髭をふるふが如く、ざ、ざ、ざアーとほとばしる雨、吹きつのる風、ばら〳〵ばらつとつぶてのやうに池の水が飛びかふ。

前髪からたら〳〵と雫をたらしながら、びつしよりしぶきにぬれて、袖を抱へて立ちつくしてゐると、其處でもこゝでもがあー〳〵とやかましく蛙が鳴き出した。

青葉の陰

上京してすでに二ケ月
思へばわづらひ多き人生に候かな。
東都はとことはの春とのみ。かいまみし昔の夢の、憧憬の、美しかりしよ、二十年近くを草深い田舎に侘しく過し來て、ふと眼を開いた私は、あまりに幼稚であつたのです。燃ゆる望みを抱いて出京と云ふ一轉機、乏しい中からもお嬢樣と立てられて、世間の風にふれた事のない身の、現實の苦い、冷たさに、泣きはせぬが身も心もおきどころのないまで、不安の念にせめられて居る。ツーホワイトラインスに

胸とゝろかし行ずりの角帽姿にはつとする。そんなやさしい駒鳥の胸の様な心はやぶられて了ひました。かつては一度でいゝからスキートな言葉を、その紅い唇からさゝやく様なピンクの君を有ちたいと描いた事もありましたものを、花やかなりし、清かりし、純なりし、空想時代をかへりみれば、詮方なさの笑も湧く。

厚化粧の頰にその笑をのばせて、露もしたゝる高島田は、やがて思ひきり高めに前髪はらせたウキンナ巻となり、三吋の鴇色リボン白茶のバラソルかたげて、ネルの袂の振長く、白襟きつく引合せ、大またに袴の裾をふみ開き行く姿思へば我乍らひどい變りやう。氣恥かしいやうな氣もいたします。

自分でひらくと言ひはなつた運命の函、鍵はいづこに……たゞ強かれ——と、心を叱して、大膽と云へば大膽、放縦と云へば放縦な生活。

『一人居てさびしき時はやちまたの人中行きて涙忘れよ』宿へかへつたつてつまらないし、落ちつかぬ不安ながら、外での歡樂ばかりもとめる様になるんですもの、

私男子の方がお家が面白くないとお遊びなさるのも無理はないと思つてよ。どうぜ婚すべきが目的の女ならねば、誘惑もぬれ衣も恐れませぬ。新聞の三面記事位うたはれる覚悟で居ます。腹も立たねば口惜しくもなし、先日も○○新聞のハガキ欄でどうとかかうとか、つて友の一人が、千い様殘念でございます、御無念でございませう……私は何と申上げてよいやら、ただ涙するばかりで御座います。と躍起となつた手紙も私はたゞ二三度讀み返したばかりでした。神經が麻痺してるのかも知れません

そんなものに囚はれはせねど、やるせなきこの不平、不安、恐怖、懐疑、いたづらに悶々たる心よ。不遜なる私には、神も佛もたよるに足らぬ。他によつてすくはれようとは思ひませぬ。

『姉と云はるゝ年ならば、憂き身を膝に投げかけて、つかれし額胸によせ、たゞ一時を眠らまし』

縋つて泣かせてくれる胸があれば、一時は心もしづまります。それでよろしい、眞の自分と云ふものは、どうせ永久にひとりです。あゝかくて行く我が世の旅路や長からまし……。

先日の日曜、青葉若葉に雨ふる日、春子樣と美香子樣と仲よしの三人が卓をかこんでまどゐして、取よせたのは紅の露の垂れさうないちごでした、美しいコップに入れて、銀のさじでつゝきつぶして、白砂糖をたくさん交せて、葡萄酒をついでは、語りながら、食べました程に、顏がぼうつとして來て、もう耳元までも熱くて〳〵たまらなくなりました。大きな矢飛白をひつたりと着て、お揃ひに矢の字に縞めたお下げの君たちは、可愛い口をよく働からせて、奇拔な氣焰をはきました。そして罪もなく笑ひくづれました、和らかな頰は輝くやうで御座いました。年も上だし、ひとりはぐれたる私は、ピアノに凭つて、微笑んでは居りましたけれど……。

幾月ぶりでA樣にお目にかゝつたらば、

『千代さんかはりましたね』、

つていきなり云はれた、襟元一ぱいに結んだ眞紅のリボンが恥かしかつた、十六の時からちつとも年をとらないつて賞める様な冷かす様なこと有仰る。

『だつて……』

と思はず肩に手をやつたら、

『さう、〳〵、肩上げが下りただけです』

澄まして笑つてゐらつしやる。十六と云ふお言葉が痛い程胸にしみた。あの頃のことを御存じの方は、A様ばかりで御座います。もう〳〵お別れでございますわね。御卒業あそばせばもう——光榮ある前途の幸を祈りまゐらす。いつまでかくてとゞまらむ。流れは空し法皇の、夢杳かなる鴨の水、

『三年の春は過ぎやすし、花紅のかんばせも、いま別れてはいつか見む、この世の旅はながけれど……』

醒めたる人の世の中は、すべて空虚であると云ふ。まだ〳〵私はまようて居る。何物にも犯すを許さぬわが處女の純潔を誇りながらも、泉子樣の樣な相愛の二人を見ればまた、何かは知らぬ暖かい涙もながれます。由紀樣は、私の轍をふまぬ樣にと手を執つてお泣きになりました。夢のやうな物語りは由紀樣のお膝上で御座いまして。

大きな眼をみはつてじつと見つめられる時には、こはい樣な氣もしますけれど、御機嫌のよくない時にぶつかると、ひどくつれないそぶりをなさるのですけれど、それは〳〵美しい方、小學校の先生です。濃いお髮をルイザに結げて、濃茶のお袴、ひもにからんだ銀ぐさり、靴音高く、白のお振りをしつくり揃へて通學遊ばすお姿など、あまりの氣高さに勿體ないやう。これが二十二の未亡人？

かいつまんで申せば由紀樣は、孤兒なのでした。十五の秋から叔母樣のお家へ引とられ、けれどそのまゝ女學校もお卒業あそばすし、比較的暖かと自由な日を送つ

て居られたので御座いました、お琴、ピアノ、お書、お茶、お生花、どれも〳〵可ならざるはなく、才媛のきこえは高う御座いましたが、非常に感情のするどい方で、人も世も容れず容れられぬ、と云ふ風でした。叔母様のお姓をおつぎ遊ばす方は、高商出の敏腕の商學士（いま支那の支店詰めで赴任してゐらつしやる）その奥様に叔母様は由紀様を欲し、かつたのださうですけれど、由紀様もお一人子の事ですし、云ひ出しかねていろ〳〵考へてる中に、あんな事になつて了つたのです。

旦那様はおきまりのJの學生でした、同棲半年にみたぬ果敢ない縁、その成立からして……あの由紀様の火の様に燃え立つた純情には、あらゆる物を焼きつくされて了つたので御座います。失意の人のやぶられたる胸をまもつて新生涯に入られた。酒と女にすさび果てた學士の御臨終も、由紀様のおん手に抱かれて安らかな死顔でした。あまりにロマンチックな二人の戀を、紫のスカート長うひくベヌスの女神は、妬まれたのではないでせうか。

『紅蓮の焔の犠牲として、超然の光世に出でし、時これ明治三十九』

春は校庭にクローヴァ萠え、冬は硝石窓に霰たばしる四高の時習寮に、三年の春秋送り迎へた人、素封家の若様、大切な嫡子で、初めて本郷の下宿屋に梶棒下ろさせて、何番さんと呼ばれる身になつたのはまだ初々しい二十二の九月、それから新らしい角帽かぶつて制服の金ボタン輝やかし、三十番教室に出入する眉目清秀な優姿、甲斐なきおもひに血潮を湧かせた女學生達はそも何人でありましたらう。疳癖の強い、きちやうめんな、眞面目な勉強家で。海山千年の下宿のお女將も、この人には敬服して居りましたさうな。

その謹直家がいかなる動機にふれたのか、一年後のK様は、まるで別人の様になりました。女主人公は柳橋の柳子とか云ふ十七ばかりの艶姿、それは〳〵最初引ぱり出した友人方もあきれて額をあつめる程な耽溺の仕方であつたさうです。初心な方だけにやりくりがつかなくなつて、お國許へ知れて了つたのも早かつた。はじめ

のうちは御意見やら、お叱言やらで借金の整理もつけて下すつたが、それをいゝことにこちらはだん〳〵老猾になつて、折花攀柳の風流はなか〳〵やみませんでした。學校は落第する。お國許の首尾は破裂する。弟御は腹ちがひと云ふので、そんな事や何かいろ〳〵もめの種でたのしまぬところへ女からは後を見せられた。

それからは自暴氣味で、親類と云ふ親類、友人と云ふ友人、知己と云ふ知己にはあらゆる口實をまうけて借りられるだけ借りつくし、下宿屋は渡り歩く、もう手のつけ樣がなくなつて了つて、友人の名前をかたつたり、私印僞造まで……。

由紀樣の嫁らしたのは、お國からきりつめの學費を送られて、お可哀想にずゐ分ひどい二階にゐて——それでも學校へは通つてゐらつしやいましたが——日用のお小遣にも事缺く時分でした。由紀樣の叔母樣のおうちとは遠緣に當るとかで、度々御無心に來られた。ある時も月謝が納められないつて、いろ〳〵お願ひなすつたのに、叔母樣はにべもなくはねつけて煙草を輪に吹く。あまりの事に見るに見かねて、

由紀様がひそかに御用立て、上げたのださうです。その時から二人は熱烈な戀中に落ちたのでした。

『Kだつて初めからあんな人間ではありませんでしたものを……、その頃のことを誰にきいても、温和しい方だつた、かたい坊ちやまだつた、つて云はれると、もうもういたはしくて、たまらない程なつかしくて……』

『ほろ〳〵と涙をお落しなすつて思ひ入つた御様子、一部の人々からは高根の花とまで、目されて居る由紀様です、誰しもこれを信じるものはありませんでしたが、心づよく、家を捨て、叔母様にそむき、とう〳〵御結婚なすつたのです、動坂あたりに小やかな新ホーム……』

漬物のつけ方、御飯の炊き方、お火のおこし方までお雛様の様な眞似事に、ある時は澁團扇持つたまま火爐の前に泣き伏して了つた事もあるとやら。世の常の新夫婦とちがつて、花嫁君はスキートの歡樂の甘酒に醉ふ餘裕もなく、けれど間もない

七月には旦那様めでたく法學士の末班につらなる事が出來ました。私のお訪ねした時に、出ていらしたのは白飛白召したメリンスの兵兒帶で、鴨居に背のつかへさうな大男、由紀様にお目にかゝりたくてと申上げる。

『やあ、さうですか、お這入りなさい。由紀子、由紀子』

思ひもかけぬ丸髷姿の由紀様、

『まあゝ千い様？』

つて涙を一ぱいためながら、式臺へ飛び下りて、肩に手をおかけになりました。青葉の影のゆら〳〵と疊にうごく六疊のお書齋、お机の前の座布團をうら返してすゝめられ、お茶よサイダとつつましい、おく様ぶり、この時K様にも紹介されて、あらためて御挨拶した、氣持よくお髪を刈つて丸顏のお鼻の高い一文字眉の、そんなお道樂した方のやうではありませんでした。お廿七のお年より若々しく見えました。

緋の手がらに褪紅色のおみ帶高く結んで華手なおつくりであるにもかゝはらずや

つれた、由紀様はお二十一より更けてゐた。

それから一週間と經ぬまに、學士は御他界遊ばしたのです。誠に急な御病氣で、御友人も誰も間にあひませんでした、由紀様と看護婦に守られたまゝ逝かれました。

急報によつて駈けつけたお國の父様、叔父様のお眼には悲歎に沈むこの可愛らしい美しい嫁君のお姿が、何とうつゝたものでせうか。まるで由紀様のためにK様が墮落でもしたやうに有仰つて、泪に正體もない由紀様にはおかまひなく、學士の遺骸は茶毘一片の煙となして、遺骨を持つておかへりになつて了つた。

由紀様は大海につき放された小舟の様。もとより良人の家によらうつもりはゆめさらなかつたが、あんまりなおしむけ、叔母様のお家へはかへられず。

それから小學校へ出る事となつて、もうK様の一週忌で御座います、日に〳〵あせ行く頰の血よ、あゝ自ら播きたるものは、自ら刈らざるべからざる、結果なくんば幸なりとは云へ……。

戀もなければ詩も忘れ、柔な心の芽は、採落されて了つた私で御座います。空想の夢はやぶれて了つた少女でございますもの。二十を越して由紀様にどうしてそんな戀があつたかと思ひます。私はもう……醒めたのぢやない、冷えたのだ。

今日も四時過ぎ、汗をふき〳〵宿へかへつて、袴をとるとそのまゝ、今朝封を切つて一通り目をとほしたばかりのL子様の手紙をくり返した。

『夢はいつまでもわが身にわが心にあらしめたいと思つて居ます。東京の六ヶ月の生活は私のすべての夢を破つて了ひました。醒めたる夢は追はず、ふたゝび新らしい心を求ねば生甲斐がありません。

あゝ故郷へ、故郷へ、

何しにかへるとおつしやつて下さいますな。夢見に行のかも知れませんもの。

過去の生涯は美くしかつた、わが涙は熱かつた、現在の苦しき冷たき涙を替へて、また昔のやさしい悲しみとなすことができるなれば、あゝ私は喜こんで都會を去り

ませう……熱い涙の復活はわが心の復活です

湘南の地に靜な夢をつゞけてゐらしつたあなたの生涯はどのやうに美しく懐しく思はれるかわかりません。千代子さま、あなた、いつまでも、いつまでも美しい夢をおのぞみ遊ばしませんの。美しい夢、美しい夢？』

云はれぬ心を兩袖に抱いて机に胸を伏せた。

L子様、罰があたります、相思の人を許されて——三年の戀に一生をあげて捧げしを悔いはしなかつたと有仰りながら……いま何を仰有ゐらつしやるので御座いますか。まさかお飽きになつたんぢやないでせう。昔の夢を戀はれるのもさることながら、一生醒めずには居られませんものを。

都會の空氣は空想の紅の世界を、灰色に變せて了ふと有仰いますけれど、L子様、私には執着するだけの過去もないので御座います、何故故郷を捨て來たなどゝ云ふて下さいますな。都戀ふたが無理でせうか。何にも知らなかつた田舍少女、生の叫

喚のはげしいのも覺悟の上ではありましたけれど。

憧憬の夢は破たとて、今更どうしませうぞ。歸りゆく家はあれども安らかに居らるべき住所ではない。行くべき方も覺えず、あゝ人間は生涯不滿と不平に戰ふが生の意義か。

私は思ふ、帶やリングに生き得る女達の住む世界こそ、紅や紫ではあるまいか。どうせ不可解な人生だもの、花やかな色のあらう筈はない。

充實したる生活をもとめて甲斐なき努力に繫れたる身を悶ゆる女、いま解放されたらどうなるか、拓かれたる道もないのに……導いてくれる人もないのに……。

妻となるのもイヤ、母となるのもイヤ、オールドミッスで末枯るのもイヤ。藝術家としての名譽が得られたら嬉しいのか、確固たる信念もなく、目差すべき標的もなく、私の心はさま〴〵に矛盾してるから苦しい。毎日々々、こんな事しちや居ら

れない〳〵と焦慮るばかり、不愉快だ、不愉快だ。

鵠沼の波の音が戀しい。毎日化粧してリボンかざして道を行きながらも、松青き海邊の孤家に、あの母は妹は、と思ふともう〳〵たまらなくなります。やつぱり子ですわね、姉ですわね、夏の休暇にはかへります。

窓に傾く夕日の影をみつめて居ると、

『内藤さんぬらしつて？』

玄關でやさしい聲、オヤと思つて立ち上つた。

『あら、まあ』

『お門を通りましたから一寸。あのネ』

白のパラソル杖て莞爾、いま事から下り立たれたのは美津樣でした。めづらしい日本髪、髷の長い唐人髷に紅白の丈長を重ねて、長いお袖に四つぐらゐしかかすりのない華手なお召縮緬の紫矢飛白、青磁色のおみ帶胸高に、ゴールドチエーンゆる

うさばいて、水色のベールは細やかな襟元に……。

いくらお上り遊ばせと申し上げてもおき〻遊ばさず五分ばかりの立ち話し。

『お揃ひよ』

とピロード張りの可愛い小箱を私に握らせ、かたく握手して

『ぢやさよなら。また』

『あらさう』

金紋光るゴム輪の車、少し反り身の美しい影は小砂利に二三度ゆすられてすつと、走り去る。

お若い美しい、あれで私より三つお上のお廿一と見えませうか、東都第一のハイカラ學校の御出身。ピンクの君と云へば、他校までその名かくれなき交際家であつたさうな。春や昔、鴇色の洋服召した花十八の御通學姿に向ふ通るドーターの、三人づれのその中で……』

物質に不足のない方は單純である、現在に滿足してる方は世にこれほど幸福なことはない、やつぱりお金もちは羨しい。

門の扉によつてた私はそのまゝ追はるゝ樣に本鄕通りに出た。

行人ゆく水の常に絕えざるが如き赤門前、木の間をもれて煉瓦作りの洋館、櫻の青葉、クロバーの白い花が點々と、仰げば高き時計臺よ、あの池の汀の椎の木はさぞ翠こく榮えて居るであらう。懷かしや！

夕風凉しく單衣の袖を吹き上げてぱつと幽にローズの香が立ちまよふ。お許し下さい母樣、香水のクリームのと云つてる身分ではありませんでしたものを。帶もメリンスでは肩身をせまく思ふこの頃……。

大學の赤き煉瓦と茂り合ふ新綠みれば悲しかりける。

哀れなり女の二十詩も忘れ物淋しさに笑もふりける。

向陵の夜月

三月一日朝上京。新橋から雨中に俥を飛ばして九時二十分、本郷なる青柳さんのお宅につく。丁度一高の弟さんがマントかぶつて、外から飛び込でゐらしつたのと顔見合せ、うつかりお兄さんと間違へてしまつた處へ、實物のお兄さんが、やアこれはとお現れになつたので、少なからず吃驚敗亡。

『さア直ぐと二階へ。K君も先刻から來てゐます、』

御免遊ばせ、と次の間の襖の際に面隱れ、K先生お近眼鏡を光らせながら、五ッ紋にお袴ばきか何かですまして居られる。これは獨法の森田君です。ともう一人の方

を紹介して下さる。

お妹さんの瑠璃樣　お茶をもつてゐらッしやる。十八ばかりの美しい方、前髪ふくよかなマアガレット、あらい京お召に、更紗縮緬の無垢を重ねて、白襟凛々しく、俯かるゝ肩ごしに、襷紅色の矢の字が覗く。

この君がおん筆になる繪絹は、可愛らしい振分髪の兒が三人、椿樹の下の青草の緋毛氈の上にお飯事してるところで、まだ畵さかけのまゝ室の隅に立てかけられてあつた。眞珠の樣な露を結んで、庭前の白梅には音もなく絹糸の春雨がそゝぐ。

紺飛白の羽織を着ぶくれた青柳さん、片手を懐中に片手で火箸をぐさと灰へつきさしながら、お三人は頻とお話がはづむ。ひとりぼつちの私が仕方なしに雜誌の口繪など拜見する。

とどろと階段をふみ鳴らす足音、ヤアとばかりお元氣な丹波さんの御入來。かねて期したる事ながら、はつと伏目になつて後退り。

『始めまして、』と物慎ましう。けれどお互に初對面のやうな氣はしない、制服の儘ではあるが利かぬ氣のお眼つきや、高い鼻、引しまつた口元、お髪を四寸計に長うして、少し浪打たせ右へと綺麗に分けてある。これなら何時佛國へ御赴任遊ばしたつて大丈夫在學中に外交官試驗を二番で及第した秀才と云へば知る人は知らう〳〵丹波篠山々々家の猿が、花のバリーで芝居する。あら、失禮、これはつひ——。

しやれた靴下のあぐらして、オリエントの煙をふきながら『金子さん』と呼びかけられる度に冷々する。ほんとうにお人の惡い丹波さん、かね〳〵お手並は承つて居りますもので。

其中にだんだんお客樣もお揃ひになつた。瑞璃樣がお友達の方々である。瑠璃樣は世に時めき給ふ女流畫家藤園樣のお弟子でゐらつしやる。田鶴子樣は女史の御令妹ときく。丸顏の眼のぱつちりした眉の濃い可愛いお嬢樣。黃八丈のお羽織も、白いお顏によくうつる。すらりと優しい撫肩の、しとやかな須磨子さま。異彩を放つ

て被居るは嘉久子樣、黑地に紅で麻の葉を繡ひつぶしたお半衿から、眞白い首筋を拔いて、厚化粧の人形立、結立い唐人髷つや〳〵と、長いお袖でお口元蓋へば、美しい花櫛が、するりと前髮をすべつて落ちる。お羽織なしの胸をせめて、おみ帶たかく、まアこの方が毎日お袴つけて學校通ひとは如何しても思はれない、舞扇颯と開いて振の袂を飜へさん、春の夜の金屏ひくき廣前に相應かるべき艶麗さ。

御一緒に如何ですつてお勸めしたけれど、森田さんは、失敬しますつて書物抱へて角帽かぶつて、京橋の方へ勞働者の問題とかの研究に行つてお了ひなすつた。お若いのに感心な方と思ふ。十一時頃から揃つて一高へ出掛ける。いたづらなK先生、玄關で丹波さんの角帽の徽章を手早く逆さにつけ直し、腰の立たぬほど笑ひころげて被居る。後の青柳さんがお靴の紐を結んで居らゝ間を、一同門外にたゝずみながら、見合す顏にはおさへ切れぬうら若い含笑みの輝き、今日ばかりは天下晴れて向陵の空氣が吸へるのですもの、一年一度の紀念祭なんですもの、學校ぐらゐ

はエスしたつて何だつてまだ〳〵足りやしない、脱線して溝ん中へ飛び込んぢまふかも知れない。丹波さんは寄り道があるつて途中からお別れ遊ばした。思ひ〳〵に美しい蛇の目傘かたむけ、西片町の泥濘を捏まはしながら、やう〳〵目的地にたどりつけば、足早のお兩人はもう門前に焦れつたがつてゐらしつた。

あちらにも此方にも氣をとられて、ともすれば高足駄をふみくり返す。下足場の混雜を外に見て南寮の入口から。こゝで皆さんは御持參の草履とはきかへ、私の分は弟さんが駈けてつて何處からか持つて來て下すつたが、掃溜から拾ひ上げたやうな薙刀形の麻裏を、「これはね、返して下さいよ、僕困るんだから失さないやうにね、」つて操り返し〳〵仰有るので可笑しくて〳〵、何んな方のだか知らないけど、田中とか田尻とか書いてあつたつけ。

販賣係の寮生二三人、寮歌集とエハガキ如何です如何ですと笑ひながら袖をつかまぬばかり。漸くこの包圍攻撃を切り抜けて最初が十號室、こゝは少青柳さん達の

お室とか。アラ、ビリケン〳〵、振つてるわねえ、大きな〳〵張子のが鎮座まし〳〵、それに銀紙張の『靡利剣』を利かしたもの。

天井から撓につるした藤の花房、櫻の造花、自治燈の灯影に動く金糸の彩　振の紅、制服の黒、寶石光るさし櫛、巾廣リボン、薄暗い廊下はおすな〳〵の大さわぎ。

南寮では『夜の池畔』と『蜃氣樓』『南歐の夜』などが呼物、いゝわね〳〵つて璃瑠様、嘉久子様、首さしのばし人波に揉れ〳〵もなか〳〵動きさうには成さらぬ。『籠城主義』だつて大きな蛙に釣瓶と櫻の花片をあしらひ、『井戸の蛙と誹らばそれ花も散りこむ月もさす。』文科の人たちだと云ふ『白い鳥』の所では、先生寮生に追ひすがられて、是非〳〵と名刺をねだられ大閉口。

北寮の『蹂躙六大洲一劍攘妖魔』などと大變な表題、袴をツンツルテンにはいた、裄みじかな蟠的書生さんが、クラブ洗粉や香水やレートやチックやヴアイオレツト

に向つて竹刀を振り冠つたところ。一高氣質を現はしたものだ、けれど〳〵、何だかイヤ味だ。四番の『源氏物語の或る夜』などは瀟洒で床しかつたが、『紫式部は中座してお留守なのだらう、』と誰やらが後の方からどなるので、失笑して了ふ。『靜中の動、』『青草の芝生に卵色の雛兒が二羽、ピヨ〳〵ピヨと鳴きながらチヨコ〳〵歩いたり、餌をひろつて居る罪のなさ、可哀想にもう五六時間の後はストームのさわぎで握み潰されるとも知らずに。

『楓橋夜泊』も人目を惹いたもの丶一つであらう。K先生や青柳さんは一々知つた方々に挨拶されて、御會釋や立話にいそがしく、少し離れて行む私の間のわるさ。放心してまた去年のやうに綾樣と大神樂など見惚れてゐるとこを尾けて歩かれちや……

後れ勝の瑠璃樣達は、やう〳〵人ごみを分けてゐらした。

二階の廊下を通る時、一々寢室をのぞいて歩く、成る程こゝはデカンショ〳〵と

あばれ込むのに都合がよく出來てゐる。名にし負ふ萬年ベッド、『まア亂雜だわねえ、』と嘉久子樣が黃いろい聲を出す。これは寮雨の窓ですつて青柳さんが敎へて下さる。

青柳さんはしきりに、『今年の御感想は如何です、如何ですつて、仰有る。まだ解らない、けれど何だか昨年の方が善やうに思ふつて、其樣こと云へはしないが、折角御案內下さる方に滿足したやうなお答もしないでほんとに濟まない。出口でおさるゝはづみにつまづいて思はづ、『アッ、貴女、御免遊ばして？』手をかけたのは須磨子樣のお肩だつた。白いお顏は振りむいてにつこり。『どうです……K君。諸君も草臥たでせう、食堂へ行かう、飯の冷めて了はないうちに、』

『どうぞ……』一議に及ばず、東寮と洗面場の間に細い路をぞろ〳〵と從いて行く。賄の御飯を食べるのだつて、どれ程樂しみにして居たでせう、精養軒や有樂座を

おごると云はれたよりよつ程うれしく、いそ〳〵と食堂へ這入たが、婦人連は互に顔を見合す。粗末な一間ばかりづゝの卓や腰掛が幾列にも、ずーと並んで床はタゝキ、天井のひくい廣い室(?)とは云へない半分野天みたいな氣がするのだから。

もう學生の立つたあとなので、食卓の四隅からはポタ〳〵と雫が流れ、ふやけた御飯粒が散亂し、腐つたお味噌汁みたいな一種の匂が鼻を打つ。夏になつたらさぞ蠅が生くであらう。小さくなつて席につく。

私はコートを着てゐるからいゝけれど、皆樣お召物がよごれはしまいかと氣になつてたまらなかつた。こんな腰掛へかけるものだから、それで一高生の制服はお尻が光つてゐるのだわ！

お膳つたら、炭をつかんだお鍋の手ほどにきたなく、懷紙取り出して幾度となく茶碗をぬぐふ。

運ばれたのは冷たくなつた茶碗蒸、それに眞黒なお木皿の蓋がかぶせてあるので

ウンザリして了ふ。小松菜のお浸し、豚肉のカツレツ、こわごわ箸をつけてみれば、酢つばいのだか辛いのだか甘いのだかわからぬ。青柳さんてば、『一高生だつて人間でせう、人間の食物なんですから生命に別條はありません。みんなこれ食つて勉強してるんですからね。ハヽヽヽ、妙な顔してますね、』

皮肉を仰有る。だつて〳〵食堂を見たらもう一高が嫌ひになつて了つてよと誰やらが交せ返せば、同感だわと卓を叩く、箸が轉げる。『賄、飯――ッ！』『賄、茶ッ！』方方で盛んに怒鳴る、白胸かけの男が、ヤーッと答へて飛んで來る。

洗面場の雨がはの壁や羽目にずらりと張られたビラの廣告やポンチ繪を見ながら、

『どうしてなか〳〵向陵健兒、隅にはおけない。藤園樣のお弟子方はハダシで逃げ出さねばなるまいか』

なんて瑠璃樣をおいぢめ遊ばす。

どう云ふ順にみてまはつたのだか、朶寮のなんかはちつとも覺えがない。お菓子でも食べませうつて今度はホールへ押かける。丁度陸軍々樂隊の演奏最中、何處もかしこも滿員なのを漸々のことでせまい處へ目白押にならんだ。うつかり身動しようものなら、兩はしの方はころげ落ちゝまふわ。お腹が空いた〳〵つて、各々に俯きながら羊羹ムシヤ〳〵。

お茶碗の數が足りないので仕方なく、飮みまはしにする。お代り取りに行く人をヂヤンケンと定める。宙にひらめく指環の手、白い手、細い手、タコだらけの手、餘り騷ぎがえらいので、四邊の人の視線をあつめた。

中にはスケツチを始めた人もあつたとやら。須磨子樣がみつけて總立ちになると、コソ〳〵人ごみの中へにげて行つた。顏盜人め、失敬な。

たしか東寮の始めの方でしたつけ、『偉大なる暗闘』とか何とか云つて、のぞくと突然鼻つまむんですつてあらかじめ少青柳さんの御注意故、端の方によつて過ぎや

うゝすると、青柳さんや先生は胴上げにされんばかり、二三人よつてたかつて無理に首突込ませうとする、『御免〳〵』と手足をもがき逃出す風つたら。

だん〳〵見物人が増えてくるので、大抵のとこはおされて過ぐるばかり。『月宮殿』では中央に可愛い臼と杵とをおいて、澤山の兎を放し飼ひ。

赤い眼をキヨト〳〵させながら菜ッ葉を食べてゐる。一寸御愛嬌だけれど、お月樣のお使姫にしては汚穢こと、臭いこと。『向陵の夜』はほんとによかつた。あれ、あの窓もる灯影の輝き！　中はコムバの酣でゞもあらうか。西寮では『廢墟の月』や、ロッテルダムの風車の回轉てるところや、『ひたすらに學生時代享樂主義を想ふ』、『榮華の夢』その外『一視同仁』と題し雪白の診察服つけた斑猫が、聽診器かけて鹿爪らしう、寢臺に横たはつた鼠の脉をとつてるところなどもあつた。

掻分け〳〵いつか場外へ押出されてホツと一息……向ふから丹波さんがやつていらした。まだ『大學』の帽子かぶつて平氣なお顏、切角氣取つたオーバも何もある

ものですか、可笑しくて〳〵皆さんのかげに隠れて笑ひをこらへる。

何處からともなく勇しい寮歌の響、見上げる窓には幾個かの顔が生つて見下してゐる。

各寮の入口はまだワーツワーツつて云ふさわぎ。諸學校が退けたのであらう女生徒の袴の色、リボンの蝶がチラ〳〵と。

折よく雨はあがつてゐるのでさゞめきつゝ打つれて私達は青柳さんのお宅まで戻りました。

二階座敷にずらりと並んで、新にそゝがれし宇治の葉の香り高う、湧くが如き歡談笑聲、てんでに蜜豆をすくつてお口へ運ぶ。

私と隣り合つた須磨子様は、弱々しい、花にたとへたら女郎花。さうだ、でなければあるとしもなき春風に、ヒラ〳〵と散る彼岸櫻か。派手つくりの嘉久子様は露をふくんだ緋桃の花で、紅リボンのお下げ髪、一番お年若な田鶴子様が八重椿、瑠

璃様は薄紅の匂ふばかりなお眼元なら、顔色なら、薔薇の面影麗はしく、立ちこむる香水の香はむせぶばかり。

八雲さんがぬらつしやいました、と下から呼ぶ。丹波さんはいきなり立ち上つて例の繪絹のかげにひそみ手眞似やら、眼配せやら、頭を振り。そこへもう八雲學士はみちびかれて上つて被居しつた。

高等學校時代から首席をのみ通したと云ふ秀才、現今は大藏省に敏腕の法學士、お令名はとうから承はつて居る。お洋服のはち切れさうに丸々と肥つて、可愛いお顔遊ばしたお聲の美しい方、御挨拶もすまぬ中から皆さんは目引き袖引きクス〳〵。

『八雲さん、近頃丹波君にお遇ひですか、』

『ハイ遇ひますよ、時々。何でした、一週間ほど前にも』

こゝに至つて堪らず私も失笑して了つた。流石の八雲法學士も面喰つしキヨトキ

ヨトして被居るところへ

『ワッ、』

とばかり、辨天小僧の聲色か何かで飛び出した丹波さん、一座はいよ〳〵笑ひこ
ろげる。

『あゝ君も居たんですか、どうも變だと思ひましたよ、』

と案外落ち着いたもの。

とう〳〵みんな一緒になつて、トラムプやら羅漢廻しやら。私は存じませんと逃
げれば、譯はないんですといろ〳〵敎へて下すつたが、どうしてもイヤと首ばかり
振つて居たので、それぢや二三度見て被居いとさしも瑠璃樣はお鼻の上に拳を重ね、
田鶴子樣に鐵砲かつぐ眞似、嘉久子樣がコン〳〵チキの手附なされば、須磨樣はお
袖を胸に抱く。青柳さんは腕ぐみし、丹波さんは舌をペロリ、八雲さんが兩手を膝
のわきについて蟇蛙の樣な形。サ、よしか、羅漢樣が揃つたらまはそぢやないか、

ヨイヤサのヨイヤサ、』とまはし始める拜見してる私はあまりの可笑しさに苦しくて〳〵、まアどうしてこんな眞似が出來るものですか。それでも皆樣感心に笑ひ出す方もなく一生懸命『ヨイヤサのヨイヤサ、ヨイヤサのヨイヤサ』と調子にのつてだん〳〵聲が高くなる。

了ひには藝づくし。ヂャンケンをして負けたものから一つづゝやる事となつて須磨樣はつと次の間へ……讃美歌の悲しい一節、細く細く、情にせまつてとぎるゝおん聲、拍手は急雹の如く湧き立つた。

八雲さんは曉鐘の『花上の露』を美聲はり上げて御朗吟。

生れてこゝに二十年、これほど美しいと身に沁みたお聲はない。高く透きとほつて、少し震へる、たとへば水晶の水盤に岩間清水の走るが如き、何と云ふ美いお聲なんだらう。

八雲さんはじめ先生にしろ丹波さんにしろ青柳さんにしろ、いづれも演壇にきた

へられた方達、何遊ばしたつて惡からう筈はない。ことに丹波さんがお得意のマルセーユ、ローレライ、はては取ときの阿呆陀羅經までかつぎ出し『何が何よとたづねてみたら』チョツ〳〵と舌で調子をとりながら。もう〳〵新年會とカルタ會の三つも一時にかち合つたやう、夢中になつて遊んで了つた。

夕方八雲さんはお歸り遊ばす。さぞ奥さまがお待ち遊ばして被居るでせう。

花瓦斯がパツと點されて、一時に明るくなつた。室内はまるで光明世界のやう。嘉久子樣は何につけてもあまりお袖にお顔おあてになるので、お鼻の頭の白粉だけツルリとはげて了ひ、何だか斑猫のやうで可笑しい。お鮨だのバナヽなど頂きながら、なほもいろ〳〵なお話。丹波さんは人知れず、櫛を出しちやア手ぎはよくお髪をかきつけて被居る。

歡樂の後にせまり來る不安よと、須磨樣は先刻から帶の間の時間ばかり氣にして被居たら、終にお迎ひのお俥がまゐる。これを動機に皆さま續いてお立ち遊ばす。

私もお暇をと小聲で云ひ出づるをお兄妹に打けされもとの座におしすゑられて、K先生と田鶴子樣と私の三人はとう〳〵泊めて頂くことゝなつて了つた。あまりと云へば愼なしと、何處かでさゝやかれる氣はしながらもうれしくて。

K樣なんかいゝわねえ、何遊ばしたつてもうお母樣にお叱られなさる樣な事はないでせう、私は兄樣と一緒でなければ、何處へ出掛けることも許されませんのよ。羨しいわ、と無邪氣な瑠璃樣、紫のリボンがさやさやと被布の襟に鳴る。

くつろいでお菓子など食べながら、あのね、私先刻丹波さんのポケットに、鹽煎餅のかけらをおしこんどいたのですよ。大勢の前で絹ハンケチでも引出される時、飛び出したらまア何んなお顏をなさるでせうね、と笑へば、丹波さんはあの御新調のづぼんしたオーバを、最新流行だつて大威張なんですけど、私いつか活動寫眞で見た西洋喜劇の茶加兵衞つて爺父にそつくりのスタイルなのよと瑠璃樣も笑ひくづれる。

話題はいつしか大學の秀才物語。大學の秀才とか何とか云はれてたつて、みんなガラにもない失戀さわぎ聞いてみれば戀人に既成品と見かへられたので、あんまり意久地のない方たちねえつて笑つたら、失戀するから秀才になれるんだつて。それが發奮の動機ときいては難有くも何ともない。

それでもう今ぢやせつせと——いゝえ、あの、外交官なんて云ふお役は婦人方への交際手腕が御資格の一つなので、その御練習なのかも知れません。第二のを探してゐらつしやるんぢやなくつて。

頑健な青柳さんでさへ、そんな事申上げると黒いお顔に紅をお潮し遊ばすから可愛いわ。演壇に立ち、竹刀とつてはその名各校に鳴り給ふ鬼をもひしぐべき君が『月夜のヴアイオリン』には涙潜々として下ると云ふ。

田鶴子様はのぼせたと仰有つて、つと椽にお立ちなさる。夜更の冷氣は水のやうに流れこんで、月に輝りそふ一株の梅花さながら、香れる雪かとあやまたれる

瑠璃様は下からお布團運び上げるので大さわぎ、はア〳〵と息をはづまして被居る。

さうして私たち女同士は、お下座敷の八疊に仲よく床を並べる事となりました。瑠璃様のお召故、まだ肩あげがあるのを拝借して長いお袖をかへりみながら、昔なつかしさに含笑まれた。時計は高く十二時を打つ。

朱塗行燈の光りほのかに、半ば黒ビロードの襟にうづめた白いお顔もおぼろ〳〵、お二階からはまだ盛んな笑ひ聲がひゞいて來る。

Love me little, but love me long.

△

明様、はかないお別れで御座いました。御心配ばつかり掛けますわねえ、堪忍遊ばして頂戴な。私故に……お母様思ひのあなた、どんなにおつらい事でムいませう、お推し申上げて居りまする。

私だとて、ならうことなら、あの大磯の御別荘で、養生させて戴いて、月二回のお出ましに、都の御便りを伺ひたかつたのですが、私は、私は、あゝ私は肺病。お母様のお許しにならぬのは、得心致して居りまする。

明様、お隠し遊ばすの？　あなたは、あなたは、恩ある子爵家の姫君との御縁談

を、お斷り遊ばしたさうよねえ。それは、私の樣なものが、ついて居るからだと、お母樣のお腹立。病人で先のないものだからと、大目に見て居りや、いゝ氣になつて、悴の出世の邪魔までする、と私は煙管で打たれました、襟上つかんで引ずりまはされました。あらうことかあるまいことか、姫樣のお姑樣にもおなり遊ばさう方が、と冷たい笑は唇邊に上りましたけれど、あまりの馬鹿らしさに、反抗の念もおこらず、きれよと唇噛みしめて浪にもまるゝ浮木のやう、なさるゝまゝになつてゐました。櫛は折れ、ピンは飛んで、髪はとけて、袖はちぎれて、まるでお芝居のやうなさわぎでした。

どうしたのか、とあなたのお目にとまつて、白(犬)に弄かつて噛まれましたと云ひまぎらせた、左の手の甲の生疵は、實はお母樣のおん齒形でムいました、お察しあそばして下さいまし。

明樣、あなたは何にも御存じないこと、お恨み申しはしませんわ。たゞね、あん

まりなお母様ですよ、今までお見舞下すつたこともない大磯へ、わざ〳〵私を蹴飛ばしにおらしたのですよ。随分惨酷な方ですねえ、道理のわからない方ですねえ。私はあのお母様のために、名誉も人格も目茶々々に、蹂躙されて了ひました。

『お前は何だ、明の妾、』

とまで。あゝ口惜しうムいます、口惜しうムいますわ、明様。

誰が〳〵こんな別荘におるものか、と一時はくわーつと逆上て、飛び立ちましたが、パツタリ襖に突き當つてくづ折れると共に、やつぱりなつかしき君に引かれて……。

すみません、これから氣をつけます、と手をついてあやまつた心のうち。

その夜一夜は泣き倒れて、熱が八度にも上りましたわ。

それから今日の宣告を、今か〳〵と待ち渡つておましたのですもの。併し、あなたの外に誰とて、便る人なき病める子が、かうして茅が崎在の、見も知らなかつた

家に住ふ事となつたのは、あまりにつらき運命で御座います。

せめて一しよに、此家にでも暮せるのなら……あゝ云ひますまい。云ひますまい。兎も角も私を大磯からこゝへ送りつけて、すぐ御歸京になつたのは、何よりつらう御座いました。主婦は、すべての人の忌みきらふ病人を、親切にいたはつて呉れますし、部屋も小ぢんまりとして日當りはよいのですが、私の心は全く日かげです。病氣になつた私が悪いのだもの、誰を恨もう様もない。父も肺病で逝きましたから、私も同じ路をあゆむのでせう。けれど、けれど、その最後の最後まで、あなたの保護の下に居たいと祈ります。

幼にして母なき子、物心ついて病む父に養はれた子は、温かい人の情を知りませんでした。いつの間に十九の坂にさしかゝつたのですが。乙女の熱い血が湧いて、あらゆるものに憧憬し、輝く前途を夢みると云ふ、若い時代は、とう〳〵來ずに仕舞ひました。

醒むればこゝは現實の國、詩もない、戀もない、昨年の春頃から、群り來る心にもなき結婚問題、重りゆく父の病ひ、私は荒みゆく心身を抱いて、やる方なき悶々の中に日を送りました。面白いの樂しいのと思つたことは、たゞの一日も御座いません。あの頃あなたが、顏色がわるい〳〵て仰有たのも、無理はなかつたので御座いました。

『安心なさい。不肖ながら僕がついてゐる以上はです』

もう百合さんを精神上物質上、〳〵不安の位置に陷れる事は斷じてしない。と屬まして下すつたあなた。救の主なるあなたによつて、いまこんな境遇に泣く身とならうとは……。

淸い〳〵妹とし、兄君としては、明さま、世間でゆるさぬより、あなたも宥しては、下さらなかつたぢやありませんか。

『胸のいたみに堪へかねて

足音低く歩みより
獨りひめたる君が名を
干潟に深く書いてみる。

あゝこの文字の永劫に
消えじと聞かばわが戀の
足らんを、もしや夕潮の
頭もたげて寄せもせば。」

この夕、富士紫の海岸に、彳むものは私一人、外に人影も見えませんでした。横はれる、船の舷によりかゝつて、兩手を顔におしあてました。

暮れると浪の音が高うなる、松林の中の桔槹の上に、夢のやうな新月がかゝつて、力なき空氣草履の一歩〳〵、冷たき白砂は深かりき。かゝる時もし君まさば、和手

かくべき肩あらば。

こゝは大磯より、君在す都の方に近くなつたのが、せめてもの心やりでムいますわ。今度お出の時にはおしらせ下さい、ステーションまでお迎ひにまゐります。さらば、

一月廿二日夕　　百合

兄上様参る

△

けふは朝から頭痛がして、それに左の耳がチク〳〵病めて仕様がないから、午前中寝て居りました。咳はあまり出ず。其代りウト〳〵しちやアこわい夢ばかり。

おひるは玉子入スープと、トーストパンにミルク少量。そして床の上で髪をほぐして、引つめに結ひなほしてから、よつぽど頭が軽くなりました。閉め切つた座敷

に居ますと、別天地よ。

午後三時、思ひがけない客來、箱根の千鶴子さんなり。うれしいと云ふより驚きが先に立つて、懐しかるべき久方ぶりの對面乍ら、胸もをどらず、血も湧かざりき。チャームされきつてゐた私の冷めたるこの態度は、千鶴さんの眼にどんなに冷かに映つたであらうと思へば、氣の毒でたまらないけれど、もう私は昔の私ではありませんものを。

重い頭をかゝへて、夕飯のお相手、とう〳〵泊める事にする。雨となりて、寒村の夕、淋しく侘し。

夜は火桶かこんで、密柑の露を吸ひ乍ら、千鶴さんの笑ひ聲のみ美しく華やかなり。

早寢、八時頃から床をならべたれど話もなし、千鶴さんは疲れたとて先に眠る。

私はこの手紙書く。

あゝ年毎に思ふことのみ多し、傷心のたねのみ多し、逗子の小波、葉山の夜雨、小ゆるぎの朝、南湖の夕陽、かゝりし折もありけるよと、泣くはいつの日ならむ。梅の花の干からびても梢を離れぬやうな、過去に執着する女を、哀れとおぼせ。

かばかり人の戀しきは何の故そ。相見て、いかにせんとはする、たゞ、なつかしく、逢ひたく見たく、空しう一日〳〵を過せど、かくて明けぬれば、暮れぬれば、おんめもじの日の近づくがうれしくて、ひたすらに待たるゝぞうたてき。

Yuriko

二十六日

To my Heart

△

けふは此家のおばさんが俄の病氣、近所の人も來ましたけれど、私も見衆ねて少しは手傳ひました。何だかガツカリしちやつて、机に倚りて轉寢。せめてこの間だ

けでも、胸の思ひは忘れます。

あゝ何と云つたらいゝのでせう。お話申上げたい事ばつかり。此頃はすべて物憂く、手につかず、貴重の時の過ぎ去るも思はず、たゞ或ものをのみ待たれて……病氣のせいぢやない、あなたのせいです。

あはれ、人の憎からば、かくまで物は思はじを

初めてお目にかゝつた去年十月、父の病床の頃を覺えてゐらつしやいますか。私、あの時は、それほど強い印象を與へられた方ではなかつたのですよ。夫れが今。

來月三日の晩には、近所に村芝居があるんですつて。いらつしやいな、御案内致しませうね。何事もおんめもじの上にこそ。

月の逝く日

待たるゝ君に

茅が崎の女

わびしき夕に候よ。うづみ火かきおこしつゝ火鉢に伏して、ひとり大地を震はしゆく列車に涙出し候。口惜しとにもあらず、恨めしとにもあらず、たゞはかなくて、さみしくて、この漂泊ふ心をいかゞ候べくや。人は何を求めんが爲に生れ、何をなして、いづくにゆくや。父母に離れ、戀しき人をあとにして、地獄天堂、いづれにてもあれ、ゆかんとは願はず。行かでかなはざる身、悶ゆるこの心は、油いりにさるゝ樣に御座候。

△

この日頃さめては幻、夜は夢に、御姿のみ見え候、一日も長く世にありたきを、命を刻む心臟の呼動、肺を滅ぼす病魔の進行は、寢ても醒めても、休まず倦まず。乙女十九の文字をとゞめて、遠からず一片の墓標となるべしと存じ候。月と松風のみ訪ふおくつきどころ、年ごとに苔の深めば、去りし少さき子は泡の如く消え、御

記念遊ばさるまじきは當然。あゝ何事も知らざりし昔にかへりなば、生れおつるとすぐ、もと來し冥府にかへりてありなば、今宵さしぐむ咳をおさへて、なまじの自覺あるを呪ひ申候。此文御手に届き候頃には、おちし涙は干きてあとなく、君樣は復た病人の囈言と、お笑ひ遊ばさるゝならんか。さはれ、この心文せではあられず候、悲しきあはれなる者よと、許したまはらん事を　かしこ

二月七日もの憂き夜　　流るゝ水に數かく子

御なつかしき

明　樣

御許に

△

おはがき拜見。

美しいわ、あなたの様に、どん〳〵活動遊ばしたら、どんなに御愉快でせうね。爲すべき事、爲したき事は山ほどあるのに、私は不安と不愉快とに、身を削りつゝ、いら〳〵し乍ら、空しく其日〳〵を送つて居ます。

今朝、復た血を喀きました。少量ですが、これも私の生命の幾分です。あゝ私は呪はれて居る。其の代り私も世を呪つてやる!!

健かに美しき同性を見ると、嫉妬と知り乍ら、憎くなります。かゝる時あなたの愛の涸れざる泉のほとりに走らざるを得ませんわ。でなければ、私は憤恚の炎に自分を焼きつくして仕舞ひます。

明樣、明樣、私はおん名を死ぬまで呼びつゞけませう。血を吐く不如歸、またの名を『死出の田長』私には今は寧ろ死の宮殿が戀しい。

サッポーは崖より海に身を投げぬ
浪音聞けばわれもとおもふ

さりながら世にたゞ一つ希望あり
君のおん手に倚りて泣く事

相みなばわれはすねむか泣くべきか
たゞほゝ笑みて別れむものか

松原の中に家あり朝な夕な
君待ちわびて黒髪を撫づ

二月十八日
希望の星なる君に

△

早百合

きのふから、まだボンヤリ考へ込む癖が始まつて、許して頂戴、明樣、私こんな事でどうするのでせうねエ。仕方がないわ、どうせ亡びゆく身ですもの、死にゆく軀ですもの。

強ひて氣をとりなほして、筆をとりあげて見ましたものゝ、こんな折に書くものは、かたよつた不健全な感情ばかり。兄さまに長手紙さし上げやうと思つたけど、昨夜例の氣狂ひじみて、三十枚の封筒を殘らず引き破いて仕舞ひ、狀袋がないからやめました。

考へるのぢやない、眼に見えるのよ。ハッと氣がつくと、柱にもたれたり、緣に出てゐたり、戸棚の前に立つたりしてゐるが、横つ降りの雨の夕、御一緒に傘さしかけて歸へつたところ、別莊の二階、大磯の月夜、さうかと思ふと夏の茅が崎海岸で、白飛白の人が大勢散歩して居たり、夕方雨戸を閉めやうとすると、螢が流れこむやうに感じたり、芝生の中にダイヤモンド入の指輪が落ちてゐたり……まさか狐

が憑いてゐるのでもあるまいに、自分で自分が判じ兼ねます。起きても夢を見る。いつかおつしやつた『白晝の夢』つてこんなのでせうか。

夜、博文館の鏡花叢書を讀みましたら、この矢先、わるいものをみたのです。『梟物語』あゝ常顯寺の奥方が羨しい……。

十九日夜十一時

狂へる早百合

冷靜なる君に

△

明樣、二十一日にはいらして下さるつて、お待ちしてゐましたのに、また二十四日に延て了ひましたの？　これから五日も待つのですね。でも仕方がありません、お目にかゝらねばこそ、悲しいお別れもせずに濟む——とでも、まあきらめておきませう。けれどけふは月曜、それを今度の土曜まで。つらいことちやムいません

か、あゝ。

書きたい事もありますが、毎日同じやうな事ばかりになりますから、よします。

麗らかな二十日の朝　　失望の子

つらき子にまゐらす

△

いつも〳〵同じ様な事ばつかり、でなければ泣言か、早くお出下さいとの紋切型。いゝわ、叱られたつて、生ひ先きの短かい子なんですもの。甘やかしといて下さい。私、一寸低能兒なのよ！　あなたは感化の任に當る先生様。ホ、、、、お氣に召しまして？

けふハガキ二通、一つは先生様(！)からなの。一つはお珍らしい、番町の翠子様。この間赤ちやまがお生れ遊ばしたのださうで、それは〳〵大變な御滿足、お名はと

うさまのを一字とつて「良夫」まるで忠臣藏だわ。ところで良夫さん、うでたピリケンみたい。これでも今にもつといゝ顏になるでせうかとか、早く二本條の帽子に、柏の徽章つけて、向陵健兒のお仲間入りをしてくれゝばいゝの何のつて、日本中の福德をひとりで背負つて立つたやうなお喜び。私の氣も知らないで……。とは云へ、家庭にお笑ひ聲の續くのは、果していつまでゞせう？　決して呪ふわけではありませんけれど。

新聞を見たらば、あなた政治學の御本をお譯しになつたさうですね　拜見したいわ。新世紀の婦人ですもの、少しは政治も話しますわ。時の內閣大臣の名も知らないやうではね。何？　今の總理大臣？　知つてゝよ、寺內のピリケンさんでせう。違つてゝ？　ホ、、、、。

ほんとうに戲言はさておいて、拜見さして下さい。あなたのお名を刻んだ金文字さへみて居ればいゝ、中味は白つ紙でも刷りそこねでもかまひません。

けふはいゝお天氣、こんな日に桃の蕾がふくらむと思はれます。椅子にもたれて見上ぐる空は、松が枝ごしに薄納戸色の羽二重のやうに光る。こんなお振袖を三越へ注文したいなどゝ、のん氣な事を考へる。頭が重いので、髪を洗つたらさつぱりした。凡人は境遇に司配されるもの。私なんかお天氣には悲觀がおこらないから不思議。矢つ張、人生つてやりかたによつては、樂しいものでせうか。

草の扉に雲夕ばえてけふも暮れぬ
君まつかげの病める子の家

三月四日

感化院の先生樣

御前に

△

ピリケンの叔母樣

お醫者さまつて、ほんとうに人の病氣を治すものでせうか。治さうと云ふ氣のあるものでせうか。

少くとも私の病氣は、ヂリ〳〵惡くなつてゆくばかりです。色づけた水つぼいお藥なんかもう呑まない決心です。御飯すら戴くのも面倒くさい。今朝は九時に起きて髮を結つて、お菓子を食べ、紅茶のむで、一食ですまします。

近頃、尾の長いゴマキジの野良猫が、毎日の樣に來ます。これをつかまへてヒグと尾をチヨン切り、出來るか出來ないか知らないが、筆をこしらへて見やうとおもつて、手なづけやうとしますけれど、お魚やつてもにげて了ふのですもの、何かよい工夫は御座いますまいか。

夕方竹椽に立ちますと、風呂たく煙、かなしく消ゆる邊り、月が、月が、忘れてゐた月が銀色に……。

砂山も松も家も浪の音も、たいほの〳〵と夢の樣で御座いました。なつかしい月

光を心ゆくまで浴びて、立ちつくしてゐると、憎い咳が。お風邪召すな、と主婦が氣をつけてくれましたつけ。

では明さま、おやすみ遊ばせ。

三月廿二日夜　銀の早百合子

黄金のあきら樣

△

化粧だにものうき今朝の黒髪や
思ひ亂れて頬にこぼるゝ

瞳とづれば晝もうつゝの物おもひ
針の手やめて壁にもたれて

夢さめぬ頬に頬よせておん君の
　み肩にすがり泣くとおもひし

夢なれや醒めてわびしき悔の日の
　來べきをわれは思はぬにあらねど

二十四日

高ねの松なる君へ

谷の早百合子

△

明樣、今朝はうれしくつて！　だつて思ひ設けぬ御いでゝ、よしや時間は一日に滿たすとも、私の爲めには永遠の思ひ出が、また一つふえました。

お見送りしたステーションで、椋鳥邊さん達の行列は面白う御座んしたわねえ。

お立ちのあと、プリッヂを渡らうとしますと、丁度二時五十何分かの下りがゴーッとやつて來ました。いつもはこの汽車でいらつしやるのにと思ふと何だか悲しくなりました。お歸りのあとの半日の辛さ淋しさはまた格別ですわ。今日は幸ひ咳も出ません。とは云へ、こんな病人に見込れなすつたのは、あなたの御不幸ねエ。おのこしになつた、ゲーテ詩集をのぞきました。姿も心も思想も高く美はしかつたゲーテ、私は大好きになりましてよ。

夜、一寸硯の水を新らしくしやうと、庭に出ましたら、まアいゝお月夜い春の夜風はそよ〳〵と襟を撫でゝ、覺えず井戸側にもたれてうつとり……。あら、いけません、身投げと間違へては！

星も輝く薄月夜
ひとりに惜しき宵なるを
浪の音きく松原の

小路細路み手とりて
そゝろ歩かばいかならむ

二十六日夜　ホワイトリリー

私のゲーテ様

△

夕ぐれ時のさみしさよ。
空は水のやうに澄んで、仰げば丁度櫻の梢にお月様が……蛙がしきりと鳴きたてます。田螺の聲も聞えます。コト〳〵コト〳〵つて。
咲き亂れた小米櫻が雪のやうで、手を觸れるとゆら〳〵震へる。桃の花もぼつて り暮れ殘つて、繪よりも艶ですわ。
早くから戸を閉めて仕舞ふので、家の中は猶ほ、獨りにはつらいさみしさです。

この夕花壇に立つて、夢見心地の果しらぬ想ひを馳せました。隣りの小娘の桶下げて水くみに來る氣配に、ハッと歩き出せば、薄すりと地に引く影法師。

戀しき君よ、と胸の中に幾度か繰返して、はら〳〵と涙こぼれつ。湘南に妹は御上をのみおもふて、思ひ亂るゝを知ろしめさずや。

交際多き君は、いま何の會の席上に、演說やしたまふ。はた、何の高樓、銀燭金屏のうちにや居たまふ。淋しいわ、淋しいわ、松かげの家に病める子は只一人、くらき灯に對して……

三月廿九日夜　　百合子

なつかしき君に

△

待ち〳〵し御便りもなく、御越のほどもわからず、あまり口惜しかつたのでつひ

…御許し遊ばして頂戴ね。お恨み申して居りましたのよ。御病氣とはちつとも知らないで。

まだお風邪がぬけないんですか、この間、雨が降るのに、寒いのに、おとめしたのに、大磯へお出遊ばしたからよ、私、もう、知らない！

と云ふのは皆んなウソ。かりそめの御風邪とは云へ、何とはなく心細くつて……。いつ頃茅が崎へいらつしやるの。月と花と、さうして君には氣の毒だつて！　うちの八重櫻はまだ咲きませんわ、『けふ來ずば、明日は雪とぞ』なんて申しませぬ。月も曉月夜ならいゝでせう。みんな〳〵お待ち申して居ります。都の春に背き給ふを、強ひてと申上げるのでは御座いませんが。

今朝はねエ、癇癪をおこし〳〵、八時から二時間半もかゝつて、髪を結つて居りました、そしたらお手紙がまゐりました。今度お目にかゝる時には、日本髪の思ひがけない姿で、驚かして上げやうかしら。でもいつか、田舍くさいつてお笑ひ遊ば

したのをおぼえてゐます。

お晝過ぎ、丁度使ひは誰も居ません。この封筒と巻紙を自分で買ひに行つた序り、草履の鼻緒が切れちやつて、片足ハダシで、心地よい青草の上を、ヒヨイヒヨイ飛んで來ましたら、息切がして〳〵。けれど草の中には色々な小花が咲いて居て、可愛いのですよ。

今日は土曜日、家の前を人は群れてゆけど、私ばかりは淋しい。

三十日午後、浴後　　さゆり

あきし樣

△

昨日から輕い風邪、しかし御心配下さいますな。ほんのあるかなきかで御座います。

ものを考へると頭が痛いから、ぢつと寝て居ますけれど、平生寝あきてるものだから、よくも眠られず、夢ばかり心を責めます。

夕方七時頃、ふと目を覺ますと、薄葡萄色の空に白雲がちぎれ〳〵。玻璃戸越になつかしい春の月が輝いて居ました、うれしうムいました。

覺えて居たともなくふと思ひ出した、去年のけふは、私の一番親しくしてゐた同窓の美由紀子樣が、處女としての最後の日でゐらしつたのですわ。エンゲーヂの期間が長い方がいゝ〳〵つておつしやつてた方が、御見合後お支度も間に合はぬほど進んでお嫁きなすつたのに一年も過たぬうち早くも良人なる人の不身持に泣かさるゝ境遇になつて仕舞はれた。してみると私なぞ、病んでいもあなたのお情の露に生きて、淋しくもまた樂ある生活を送れるだけ、幸福なのでせうか。世の若く美しき處女たちよ、嫁ぐ勿れと、忠告したい。

束髪が襟元にほけかゝつたので、手を上げると、机の上の桃の花がほろ〳〵と散

りました。

摘れては花の命は脆きものを。さりとていづれ散るべきは花のさだめ。人生、女と生るゝは不幸の頂上ですわ。

四月二日　　ゆり子

明さまみ前に

△

茅が崎では五月五日は凧のお節句だつて、村中競ひ合つて上げますの。今つから大さわぎよ、ずゐ分大きなのもありますよ、それこそ大人が赤いねぢ鉢巻して、三人がゝり五人がゝりで大汗ですの。子供は奴凧を飛ばす、けふ此頃からだん〳〵ふえて、今では青、赤の色をつくして何百とむらがり、それこそ照る日の影を掩はむばかりです。長いしつぽをぶら下げて、空中からブーン〳〵、八ヶ間敷つて大嫌ひ。

こつちぢや一つハイカッて、飛行機凧でも飛ばしてやりたい。

羽織をぬいでも汗ばむ日和、それで咳が出てなりませんの。目に立つて痩せました。いかになりゆく身の果やら。

こゝまでかくと、お手紙が着きました。久し振なので、何だか封を切るのが躊躇はれました、恐いやうな惜しい様な氣がして、胸に抱いて、つと庭へ出た。松の木の間に月見草が星かとばかり、黄ろい花をひらいて居ます。一きは大きな松の樹にもたれて、心ゆくまで御文くり返しました。

それから、さつきの手紙に書きそへをする。二度になつたのだから、木に竹ついた様でせう。これが私の本領よ……こんな下らない事ばつかり。

四月九日夕

ア、キ、ラ、さま

うなだれて咲く百合の花

△

ねつおきつ、終日薬にしたしみ候ほか、申上ぐることなき日に御座候。昨日かなしかりしも、明くれば何事もおもひ殘らず。椽に櫻の花散りそめ候。走り使ひする隣りの小き娘、白すみれつみ來れる、情ある子よと可愛ゆく、興ある物語りなど、御めもじの折聞え上ぐべくさふらふ。　かしこ

四月十三日

湘南にて

荒野の白百合

△

あづまなる君へ

まゐる

きのふは久々にてのおんめもじ、一日千秋と鞭うたれた日の苦しさに引かへて、すかゝしい心地になりましたけれど、お話をするまもない程のお急ぎ、悲しうも御座いました。何か御計畫の御事業がうまく運びましたとやら、それ故の御多忙となれば、是非もない事ですが。

まあ何と云ふ明るい美しい、靜かな、おだやかな、夢のやうな晩、珍らしく私にもうれしいことがあるんですもの。湯上りの身も心も溶けて了ふやうな快い春の夜風、よくないと知りつゝまた庭に。

月見草のゆらめき、浪の音、一つとして氣を浮き立たせぬものは御座いません。おもひ出は盡ることなく、十何年か昔、鈴のついたボックりに、お人形おぶつてあるいた頃の樣子まで、繪卷物のやうにくりひろげられ、ひとりほゝゑまれつ。寢るのに惜しく、夜の白むまで、思ひあかしたい願ひでムいます。

私の病氣のよいうち、今度はもつと御ゆつくりね。お待ち申して居ります。

月の半ばの夜

御なつかしき　明様

△

かしこ

大きなねゝさま

昨夜、非常な喀血しました。急報に驚いて、ドクトルが駈付けて下さいまして、應急手當で、どうやら落ちつきました。シカシ、虚無寂寞、！　今度の今度はもう運命を自覺しました。私は。

一時グッタリとした精神はかう思ふと、昂奮をはじめ、そつと、灯をともして、長い〳〵お手紙を書きました。もうこれが、この世の名殘の様にも思はれて。

けさ未明に夢さめて、ひや〳〵肌に寒き朝風や、天地まだほの白きに、たゞはら〳〵と青葉打つ雨の音をきく。

川にも井戸にも野に山に人に、世は逝く春の深かい恨が散りみだれて、地にまみれたる花びら點々……考ふれば、昨夜の自分のあまりにはしたなさ。何事も沈默の黃金にしかずと思ひ返して、すた〳〵に寸裂いたしました。けれど、私の生涯の終點は近づいた。いつか近々に、この心、殘りなく申上げて、お前に思ふさま、泣いて見たうムいます。

あゝ灯は消えんとして、一度びは明らかに、花は散らんとして、美しさの頂上に達するとか申します。私の短かい生涯の終りを、神樣はあはれとおぼして、幸福な樣に、あなたの前に導いて下さいました。シカシ、それは果して私のために、幸福であつたやら。

あらゆる保護者に先だゝれ、弱く震えてゐる此の雛鳥をかばつて下すつたあなた。亡き父のお友達の御子息——とより外、思つて居らなかつたあなたが、はじめは兄樣のやうに思はれてならないのでした。この君に倚ゝば——と思ひました。明樣、

私が、あなたを嘆美し、憧憬する心は、いつしか戀に陷つてゐたのでした。あなただつて、これをお感じになつてゐたでせう。

夢の樣な、うつゝのやうな、はかない、わびしい、美しい、たとへば櫻の花の散りぎはの樣な、日ばつかり續きました。物事は手につかず、ボンヤリして、仕方がないから、いつになつたら醒めるだらうと、自分で自分を眺めてゐました。さうしたら、醒めない中に呼び起されたんです。それはこの病によつてでした。

人皆なの呪ひと云ふ病ひ、あゝ見はてぬ夢は破られました。けれど、けれど、明樣、あなたは私の父の、臨終の口づから、御依賴した後見人——。私は如何にしても、あなたを離れられませんわ。

御用多く、人望あつき御身を以て、よくこの病める子のだゞを聞いて下さいました。私はもう遠からず散り果てゝ、もとの土にかへる殘んの花で御座います。紅き血の爛漫として、牡丹花の如く亂るゝとき、されば明樣と、幾度口にのぼせました

やら。

この病ひにかゝるものの常として、肉體の滅びゆくに反して、精神は益々たしかになると聞く。さらばこの動機から、眞の藝術の生活に入ることも出來やうかと：：傷める心を抱いてさびしくも、元の棲家にかへらうとしたのですけれど、文筆はもう私の生命ぢやなかつた。背きし罪が詩の神の、賛けありとも思はれず。希望も期待も多かつた、昔にかへる術はない。

宗教によつて、まこと安心立命が得らるゝものなら、クリスチャンになつてもよいと思ひました。それで、聖書をお願ひしたんです、バイブルつて、どんなものかと、樂しみにして居たんですけれど、これも失望に終つて仕舞ひました。とてもあんなもので救はれやうとは思へません。マグダの白ではないけれど、

『私！私ですもの』

と叫びたくなりました。

一身の血を吐きつくして斃ほれるより——と考へるとき、恐ろしい旋風の様な思想が、脳中をよぎつて、吹きまくるをおぼへました。拂つても〳〵拂ひきれぬまぼろし。最後のさまや遺書の文句まで、あり〳〵と頭に浮かぶのですもの。ペンを執つてその通り書きつけた——と云ふよりも、何者か大きな魔が、背後から私の手を握つて書かせた。けれど、あまりの淺ましさに、その上に泣き伏すより外ありませんでした。わがゆく方にはたゞ一死あるのみ。自殺、自殺、と誰かに呟やかれる心地……。

萬事を一死にまかすとは、あまり單純な、腑甲斐ない、卑怯な考へである。すべてに打ち勝たなければならぬ。『強くあれ』と一方の心は敎へますけれど、夫れにはもつと〳〵苦しまなければならぬのでせう。そして、解脫した、大悟した人間になつた處でつまりません。せめては奔放な感情のゆらめきの儘に身を處したい。

お優しい私の明樣、いつからかう呼ぶ心となつたのでせう。君戀し、君樣戀し、

此の寄寓する家の人々のおもはくもかまはず、ステーションの人達に笑はれ乍ら、茅ケ崎驛にお迎ひにゆく私の心の中を知つてゝ下さいますか。露骨に申せば、あなたの爲めにではない、自分の爲めにゆくのです。たとひ三十分でも、二十分でも早くお目にかゝりたい。家にじつとお待ちしてる事は出來ぬほど逢ひたいからです。お目にかゝればそれでいゝの。夫れ以上何物も求むる處はないけれど、別れてゐれば戀しいのですもの、なつかしい方なのだもの。戀ではないと云はないわ、これが戀なのでせう。清い戀なのでせう。だから、人にどんな浮名をたてられても、だまつて居ます。

あなたがおいでの間は病ひの苦しさも忘れてあるものゝ、お別れして了ふと、張りつめた氣もゆるんで、あゝこの胸が痛い。若いうち、清いうち　幸福なうち、目をつぶつて仕舞ひたいと泣かれるのです。何と云ふ不健全な思想でせう。

悶ゆる心よ、煮ゆる吾よ、この業火を消す福音はなきか。

「だつて、私は私ですもの」

マグダの叫びをこゝに其まゝ――しかしマグダにもなり得ぬ女、マグダは現實の女、健康の女。

あゝ明樣、私はおん手に身を投げかけて、息を引きとりたい！

昨日の朝、日記を燒き捨てんと庭へ出ました。いつか文からを燃したと申上げた彼所へ。

すると、する〳〵小さな音立てゝ、金色に黑く三筋の立縞のある三尺ばかりの小蛇が、前を橫ぎつたので、はつと見送れば、傍の叢の中にかくれました。三尺と離れぬ處に蛇が此方を見て居ると思へば、氣味がわるくてたまらないけれど、かまはず火をつけました。草つむ手籠にみち〳〵た紙片はめら〳〵と舌を立てて燃えてゆく。もう太陽の下、地の上、私なるものゝ記錄は亡びたのだ。

蛇は執念深く立ち去らうともせぬ。米粒のやうな黑玉の眼をみはつて居るのです。

ふと、此奴、たゝき殺してやらうと思ひついて、棒ちぎれやら。石ッころやら、瓦の破片やら、手にあたるものを投げつけたら、四つ目のが命中すると、同時にスーとぬけ出して、走るやうに泉水の方へ下りてゆきました。私は飛びのいて、顔を掩ふて仕舞ひました。

こんな蟲けら一匹でさへ、いざとなれば殺しかねるもの。私、私には果して自分を殺すことが出來やうかと。

まさか自分でも實行しやうとは思ひません『死ぬ〳〵』と云ふものに死んだためしなし、』とか。たゝ夫んな氣がして仕樣がないのです。つい一ケ月前までは、露ほどもこんな考へは起らなかつたのですが。

明樣、申し上げたい心の中は千萬無量……どうかお察し下さいまし。明日をも待たぬ脆きこの身。もしや果敢なくなりましたら、

せめて哀れとおぼしめせ。君樣は前途眞に洋々たるおん身、近き將來に、立派な

家庭をお作り遊ばして、幾人かの可愛い人々に、父さまと呼ばれたまふは必定。そして、そして才學そなはれる美しきおん奥様とおん交情の睦ましさを、目に見る様に思ひます。早百合は草場の陰から、皆様の祝福を祈りませう。

咳が出てなりませんから筆さし擱く。かしこ

花に雨しと〳〵とそゝぐ午さがり　　惱める早百合

戀しき〳〵

明樣御許に

△

晝間のやうな月夜ですけれど、風が寒うて、松影が浪のやうにをどります。けふは土曜日、むだとは知りながら轍の響きに、幾度胸を轟かせたでせう。

安靜にせよと、ドクトルのおすゝめ、雪白のシーツ敷いた和らかい布團に、羽布

閙かけて寝て居ます。私はつく〳〵自分と云ふものに、愛想が盡きちやつたわ。何だかつまらなくなつて、昨日の様に悲觀したり、と思へばけふの様に樂觀したり、私の心は走馬燈の様です。軒先につるして眺めるといゝのですね、岐阜提灯や釣忍といつしよに。

早くお目にかゝりたい。

終日終夜　ことに夜半など目がさめると、蛙の聲が大變です。ギヤア〳〵、ゲロゲロキウ〳〵、ゲト〳〵つて。うちの池には蓮が生えてるから、蛙の倶樂部にでもなつてるんでせう、癪にさわつてなりません。死んで蛇の地獄へおちてもいゝけれど、蛙の地獄だけはまつぴら！　さうすればまた死直します。死んでも命がある様に、あなたに手紙が出せるやうに。そんならいつでも死にますわ。

その翌る日二十日

私のヨハネさま

ソモロンを照る花

△

もうお來車になる頃と、昨日は心まちにお待ちしてましたが、蜘蛛の絲もさがらず、つまらなくて、五時過から、己が書きたる文がらの中に突ぷして、一時間あまり寢て了ひました。目がさめると、悲しさ迫る薄やみの、夕風わびしう松ケ枝を鳴らすけれど、明樣はとう〳〵いらつしやいませんでした。

今朝は晏起半日かゝつて、スッカリ本箱を整理致しました。さきに日記や手紙は燒棄てあるので氣もせい〳〵。

午後二時、お手紙來る。私は胸に抱きしめて、あゝ明樣、堪忍して頂戴、全く！　あゝ濟まない〳〵と思ふ、なぜ、なぜこんな弱い心でせう。夢中になつて、幾度くり返し〳〵、はては涙にみえわかず

明樣！

（弱き者よ卿の名は女也！）

されどあまりに弱くても難物ならずや、僅かばかりの病氣に、さわぎ、悶え、愚痴を云ひ、天を恨み、人を羨み、はては乃至を思ふ。何たる不心得ぞや。人の命は醫者の云ふが如き脆きものにはあらじ。少くとも希望ある人には病魔も退散し、乃至はしばしその鋭鉾を避くるもの也。卿の病ひは一肺病のみならずや。僕の友人には、身心を噴ふ五病を一身に兼備して、益々奮闘しつゝあるエラ者もあり。勿論、男と女とは異なれど、理は一つのみ。多きを云はじ。卿もし希望あらば生きよ。僕を愛さば生きよ。天もし眞に卿を呪はゞ、必ず今迄に死し居るなるべし。

三合五合の喀血の如き何かあらむ。血は花也。青春のシンボル也。雨宮敬次郎君は吐血しつゝ天壽を保ち、あれだけの事業をなせり、小村壽太郎君も肺病にて多年國事に盡力せり。この次郎太郎兩君に對抗して、巾幗のレコードを作る氣はなきや。

野に咲く百合の一本は、ソロモンの榮華にも勝りて美しかりしとよ。茅が崎に惱む早百合花は、我が爲めには、何ものよりも好もしきよき花也。

生きよ、生きよ。病ひの儘百年の壽を保てよ。

弱き者は強くならざるべからず。

……うれしい、明樣、何と云ふ底力のあるお言葉でせう。いつもの言文一致とちがつて、文章體の、豫言者の叫ぶが如く、萬能の神の宣告の如く。あゝ私の心は暴風雨の中の一本杉の如く震えました。

大風一過して、杉は雨にぬれたる葉の一つ〳〵に、美しき日を宿して、暉々とさわめくやうに、私の心は歡喜に滿ちました。

迷ひ纏はる心を振捨てゝ、私はこれから強い新らしい生活を送るつもりです。生の意義が不可解の、つまらぬのと、すねたり泣いたりしたつて、與へられたる生命ならば仕方がない。生きられるだけは生きなくつちやア……イヽエ、厄病神ぐ

らが、とり殺さうと騒いだつて、負けるものですか。新らしい希望を生じた私は、血を吐きつゝも、百年の命をながらへて、きつと〳〵御心に添ひたいと思ひます。此の覺悟さへあれば、いつかおつしやつた樣に『世には進歩せざるもの、退歩せざるものなし』で、進まぬ病勢なら、必ず、退きませう。どうか期待してゐて下さいまし。

いま、手近かの洋書をとり上げましたら、余白の處に、こんな俚諺が御座いました。

"Love me little, but Love me long."

あゝ明樣、私の心おわかりになつて？

今や窓外、六十の春光老いて、花は繚亂として散り去れど、夫れに代る若葉青葉、希望の色に滿ち〳〵て、いづれも美しう燃ゆる樣ですのに……。

今日からは喜んでお藥も頂きませうわ。養生も致します。四月廿四日は永久の紀念

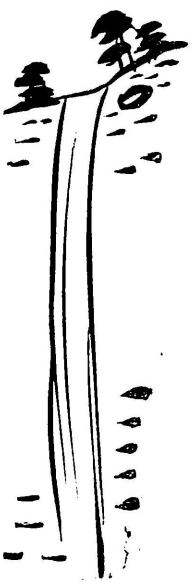
日ねエ！

私、私はもう何とは知らず嬉しくつて……。

夕榮の紅き雲を見て

御恵み深き

あきら樣御許に



蘇生したる早百合子

名殘りの旅

暮の二十八日――處女に別る、旅行

朝十時、多榮に手傳はせて髪を結ふ。どうしても思ふやうに出來ないで、泣きたくなつてきた。松鶴結びも何もあるものか。

『多榮、多榮、多榮』

立てつゞけに呼んで、鏡臺おしやつて立ち上りながら、手早くウキンナに直して了ふ。いつもより前髪が出過て氣持がわるいけれど、リボンは黒地に紅ばらの刺繍飴色のさし櫛、大きなヘヤピンで平つたくとめる。

今年は父樣母樣も、謙ちやんも千枝ちやんも鎌倉で越年遊ばす筈なので、それは山木も乳母も居るけれど、主人なしの邸内の塒のなさつたらない。女中達では私のことを、「雷樣、」つて云つて居るさうな。その雷樣も居なくなつたあとでは、どんな眞似をすることでせう。こんな時には番町の嫂樣たちと御同居であつたらと思ふ。

まあ何でもいゝわ。山木は、是非新橋までお見送りすると云つたが、兄樣はそれには及ばぬと、ハネられた。

金糸入り緋縮緬の長襦袢に、青磁色の半衿は地味過ぎた。お襟を少しかうぬいて、乳母は突膝してきゆうつと帶をしめて呉れながら、

『政ちやま、あんまりお轉婆が過ぎて、孝樣にお世話をおやかし遊ばしてはいけませんよ、』だつて。それより兄樣に、『政ちやまをおいぢめ遊ばすなよ』と云つてくれた方が早道だわ。追つかけた犬を叱らないで罪のない誰に小言を云ふ人の心理作用もこんなものでせう。兄樣はのん氣なもの、一足先に電車でお出掛。

私ばかりつまらない。別に膝掛やトランクを載せた車を従へる。山木や乳母や書生や多葉や稻やずらりと玄關にならんで、

『それではお氣をつけ遊ばして、御無事に、お早くお歸りあそばせ、』なんだのかんだのつて出先に立つて蒼蠅こと。

『左樣なら、行つてまゐります、』

梶棒が上る。車上で手袋はめながら、今一度ふり返つてみた。

途中で△△へよつたのが、思ひの外に暇どつたので氣が氣でなく、抱えの吉に得意の韋陀天、宙をゆすつて新橋へかけさせた。

うちでも美音樣とこみたいに自働車があれば、相乘で走つて來られるのにねえ。……この春まで通學の途中、ブブーブー〳〵ブーと風を切つて飛ばして來るのをみると、あの象の足みたいなゴム輪なんぞが癪に障つてならなかつたものだけれど、自分がのつてみる場合になると、さうでもあるまいと思うわ。お約束通り一二等待

合室へ行つて一寸顔を出すと、すぐ兄様が見付かつた。「待つて居た」つてすぐ二階の食堂へ上る。

私の時計は八分ほどおくれてゐた。十二時二十分前。一時十分の發車までに入いそぎでお晝餐を食べる　パン、コンソーメー、エビフライ、ロールキャベツ、チキンカツレツ。

もうあたりの人々はずん〳〵立つて行つて了ふので、好きなコーアの半分飲みさしたまゝ椅子を立つ。五分鈴がやかましく鳴り渡つた。

エンジンの響、白い湯氣、コンクリートに驛員等の靴音のみだれる中を、大また に歩く兄様のお後から、たまらなくなつて私は小走りに走つたら、忽から首差出して、みんな笑つてゐるのですもの。

二等室は滿員、兄様と別れ〳〵に席をしめた。

多勢の中に婦人は私一人。隣席にはカーキー色の長いマント着た軍人がこそ〳〵

バックを讀んでゐる。

吉、御苦勞さまね、みんなによろしく。もう歸つてもよろしいよ』

『おゝまだ居たのか、かへれ〳〵乳母によろしく』

汽笛一聲、ホームの柱は徐に後がへりを始めた。

私と孝兄樣とは一番仲がよかつたけれど、一緒に出かけるなんて云ふことは、今までほとんどありませんでした。毎月母樣のお供して帝劇へ行く時か、今年の一高紀念祭に澄樣と二人ホールへつれてつて頂いた、あの時くらゐなもので、今度のこの企は、兄妹してする旅行の最初であり、また最後である。兄樣は來年英國へ出發なさる。二年たつておかへりの頃は、私は眞田家の人でもう八雲男爵家の人ではない。重い丸髷いたゝいて、兄さまと澄さまとのホネームーンを見送らねばならぬ身である。

あゝ運命は急轉する。さらでだに去るにやすき青春、昨日の蕾は今日咲く花、今

日の櫻は七日過ぎての葉櫻、草木に似て春榮を爭ふ人の上、我が身の上、この尊い一刻千金の青春を、あだやおろそかに暮してなりませうか。

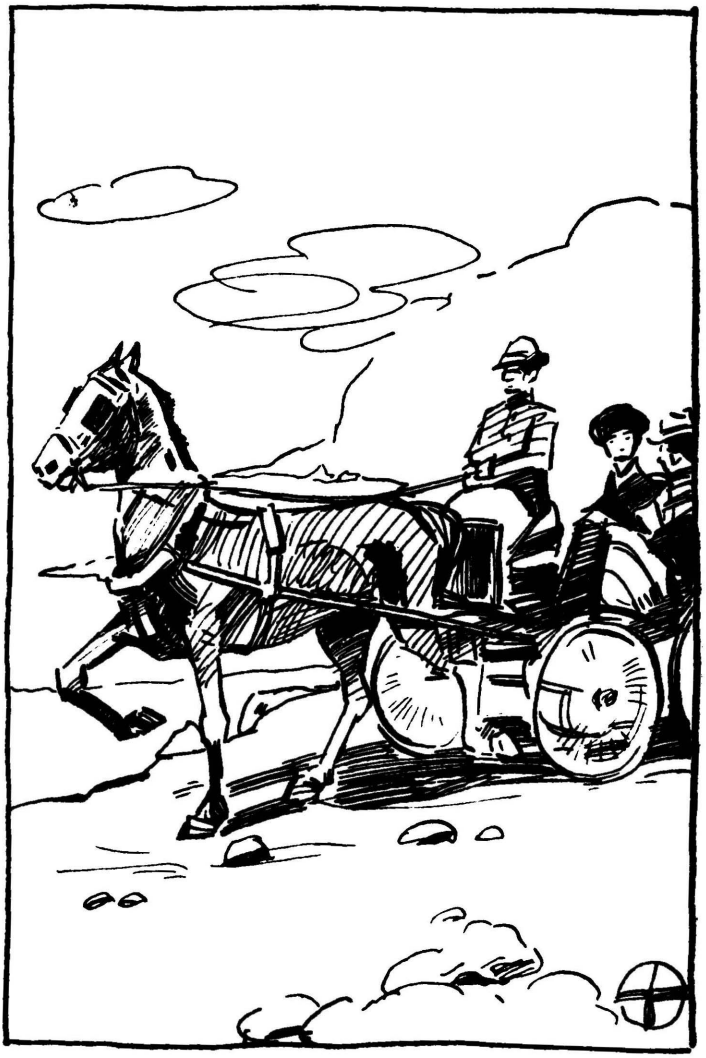
兄樣が大學時代には『學生時代享樂主義』と云ふ主義が流行したとやら、大學生は責任がなくて、自由で尊敬される呑氣な時代である。なまじつか學士樣になれば、就職難や生活難でやり切れない。夫れより少しでもこの學生時代の樂しみを味ひたいと、わざ〳〵落第する者さへあつたと云ふ。

私が今度眞田家へ嫁くについて兄樣の考へは人並とは違つて居ました。いつまでも〳〵オールドミスで暮せはしない。マダムになるのは至極賛成だが、大河の水一度び海に注いで復た還らぬ如く、處女の時代はもう長へに來ない。して見れば、今の間に出來るだけその時代を樂しんでおく必要があるではないか。某公爵へ嫁く話の纏つた某子爵の令嬢が、輿入れの前々の日、學習院時代仲のよかつた友達を招いて、公爵夫人となつたらもう氣儘な振舞ひはされないから、今日は一つ娘時代

のお名殘りに、思ふさま遊びませうよと云つて、かくれんぼ、鬼ごつこ、さては羽根つき、かるたまるでお正月が三つも一しよに來た樣に遊んで、永き春の日を短かしと喞つたときく、あゝその心はどんなに悲しく淋しかつたらう。だから政ちやん惡い事は云はない。今の中にうんと茶目つておけ、つまり『處女時代享樂主義』なんだ。

僕は政ちやんに友達を呼んで遊べとはすゝめない。僕も兎に角法學士の端くれになつた。文官試驗にも通過した。シカシ父のお蔭で今急に安官吏になる必要もない。心の目を開くために洋行して來やうと思ふ、そこで二人が新生涯に入る紀念に茶目旅行をやらうでないか。新婚旅行は樂しいものと聞くが、それはそれ。これはこれの面白味があるとおもふ。

『處女に別るゝ旅行』と云ふものをして見たくはないか。これは兄さんの發明で西洋にもない話だ。それについて旅行費だが、僕が書いた論文の賞金百圓、輕少な



がら、僕が初めて儲けた金だ。あれで、質素な、そして愉快な旅行をしやうではないか。

私はかう云はれたとき、兄樣の情が胸にしみて、ホロリとしました。

『處女時代享樂主義』

『處女に別るゝ旅行』

私は心の中で幾度もさうくりかへし乍ら、車窓に飛ぶ山村離落の光景に眼をうつしました。

大森から兄樣のお傍に往けた。橫濱で女學世界と新公論を買ふ。大船から電報二通打つ、一通は鎌倉の別莊へ、出立の通知、一通は修善寺溫泉の菊屋へあてゝ……。「ヒアタリヨキフタマツゞキ、タノム、ケ：ユク、ヤクモ」その料金を出す時、ころ〳〵と白銅一つ何處かへ轉げこんで了つた。

私はスチームが暖かいから、シートの奥に手をつゝこんでゐたら、兄樣つてば、

失した五錢が惜しくつて探して居るんだらうだつて……。いやな人。

山北でお辨當と鮎の鮨を買ふ。そしたら私達の方の窓が買物口の様になつて了つて、みんなそこへ立つて來て、密柑だの餡パンだのと云つてるうちはよかつたが、十二三になる品のよい男の子が、熱いお茶をだら〳〵こぼして、私は飛びのいた。お父様ともく〳〵ひた謝罪にあやまつてるものを、怒るにも怒られず……。燃ゆるが如き夕榮も暫時、あたり小暗くたそがれ初めて、鐵橋の下には轟々と水がをどる。私は空になつた土瓶を力一ぱい投げ落した。第三に居た頃の修學旅行を思ひ出したのです。小山あたりを過ぎ行くとき、枯草だと思つたのは、薄すりと雪がつもつて居るのであつた。

三島へついたら、どや〳〵下りる人があつたので、赤帽を呼んでも間に合はず、兄様が鞄をお持になつたから、私は兩手に籐籠や包を下げて下り立つと、

「政ちやんの女赤帽」だつて。私口惜しくつて打付てやりたくなりました。

乗替た豆相鐵道は發車までにまだ四十分、眞暗な寒い構内に立往生してるので、私たちは外へ出て、木柵に倚つて語りました。兄樣は薩摩下駄で石をけりながら、寄添ふ私はコートの袖を胸に疊んで顏を埋めて……。

窓から首さしのべてゐる人目には、甘い私語を交すとも見えたでせう。一寒驛の夜の汽車。星は輝く。北風面をつんざいて、かさ〳〵と地上をころげる何かの落葉。

私達の對座の横濱から乘合せた可愛い姉妹は邪氣もなく眠りこけて了つた。それに付添てる乳母が小憎らしくつて……。うちの乳母によく似て居た。姉妹ともお揃ひの被布の上に白毛つきのお納戸のマント着て、大きな西洋人形抱えて、千枝ちやんの面影が髣髴とする。

隣席には檜柿の腐つたやうな息を吐く紳士が居て、不愉快でたまらないけれど、いましばらくの後には明るくあたゝかい溫泉宿にくつろぐ事が出來るのだと思つて

我慢して居た。窓ガラスをかすめて蟠合戦のやうに汽罐車の火花が亂れあふ。やつと大仁へ着くと、直ぐ番頭が飛び込んで來た。一まづ茶店へ導かれて前髪の亂れなどつくらふ。

お迎ひのお馬車がまゐつて居りますと云ふ。私は極力、俥を主張してみたけれど、仕方なしに兄樣にたすけられて移乘る。

丁度この町の年の市で、まるで祭禮の樣な人出、カンテラの灯晝の如く、その中を掻分て行くのだから、高等馬車、高等馬車の聲四方に湧いて、あらゆる視線をあつめ、いくら兄樣とだからつて、私少しはきまりが惡かつたわ。だまつて下向いてると、

『内々大いに得意なんぢやないか』だつて、隨分ひどい。『誰か兄樣のやうなヒトと……大いに人格に關するわ』

つて云ひ返してやりたかつたけれど、ほんとに私の樣なものと相乘では、少々お

氣の毒さまなので御座いますわ。でもいゝわ、こんどは澄樣と御一緒なんですもの、ねえ。

幌を掛なかつたので、身を切るやうな山颪。月は亂雲の間を出つ入りつ。ほの白う照りくねつた坂道を一散に駈させる。

もう行き逢ふ人もありませんでした。山も田甫も川も水もおぼろに夢の樣。あら〳〵しい馬の鼻息が、煙のやうに靡いて、馬丁は鞭をふるひながら、幾度も幾度も振返る。

これは山櫻散る春の夜頃であつたらば、このまゝ一生走りつゞけてもいゝと思ひました。もう〳〵眞田家へなんぞは嫁かずに……。

菊屋別館の玄關には提灯つけた人が走りいで、口々にお着樣で、お勞れ樣で、先刻はお電報を有がたうなどにぎやかに、お待ちうけの二階へ通される。一人の女中はコートをぬがせてくれた。戀しい〳〵火鉢のそばにくづ折れて了ふ。何だかくた

びれて、苦いお茶を一口すゝつたまゝ、しばらく顔を上げ得なかつた。兄様は直ぐ鎌倉と東京の本邸へ無事菊屋着の電報を打つ。

挨拶に來るものがどれも〳〵、

『先刻はお電報を、〳〵』

つて云ふものだから、

『政ちやん、三十五錢の電報だ、もう十ぺんほど云はれたから、三錢五厘づゝだね』

なんてお笑はせなさる。女中が敷居際に片手をついて、

『失禮で御座いますが、お夕飯のお支度は、』

『政ちやん、もう一度食べないか。新橋でなんぞろくにありやしなかつたぢやないか、お腹が空いたらうネ？　イヤだ。困るなア』

兄様つてばいつも食りもしないくせに、お辨當の時と云ふと、食ひ足りない〳〵つて。いやしんぼ！　みつともないわねえ、イヤな方。

『ヂャとにかく風呂にでもはいつて來やう』

トランクから糸織の褞袍を出して着せかける。私は帶だけときすてゝ、七ッ道具かゝえて、拭き込まれた長廊下をゆく。

湯殿の中に這入たものゝ、如何して善いか不可解で、しばらく其處につゝ立つてゐた。だつて困るわ、〳〵。兄樣とわかれ〳〵になつて、見も知らぬ他人なんぞに飛びこまれてもなほ困るが、兄樣はきつと、肥つて居るの、豚の樣だのつてお冷かしなさるんですもの。

お湯にしづみながら、見上げると、湯氣にぬらされた電燈の球は、おぼろ月をみるやうである。兄樣は近眼鏡を湯槽の緣に置き忘れ、探してくれ〳〵つて大さはぎ。可笑しくて〳〵笑ひころげたら、君が何所かへ隱したらうつて、いきなり冷水をぶつかけれる。

思はず、あらアー兄樣はひどい、と特有の金切聲。室へもどると、もうちやんと

床が延べてあつた、今更御飯とも云はれないが、私も何だか食べたくなつて來た。兄樣の感化力は偉大なもの、敎悔師にでもおなり遊ばしたら、さだめし効果があがることでせうとつい申上げて、馬鹿つて一喝の下に撃退される。宿帳をつける。もとより男爵家など知らしはしない。無冠の太夫の兄樣が「會社員とおつけになつたのは面白い、早速澄樣に御通信の材料がふえた。何のかの云ひ合ひながら、十時過ぎ坊主枕に髮をうづめて寢ました。ドウ〳〵と落ちる水の音が耳について、幾度か入りかけた夢の樂土から引もどされる。

『政ちやん、寢たかい、寢たかい』

ポン〳〵と夜着の袖をたゝかれて、ウツラ〳〵としてたのがはつと、

『いゝえ。兄樣も……』と暗の中ながら寢返ると、

『お化エー』

と手を伸して顏を逆さに撫でまはさうとなさる。よく小さい頃なすつた惡戲、

『イヤア、兄様』

『やかましい、あつちの室に聞えるぢやないか、夜中にそんな大きな聲して』

『だつて。だつて……』

ばつと障子が赤くなつた、顔を上げると、それは夜番が廊下をまはつて歩くのでした。

二十九日——年賀状の一日

『政ちやん、政ちやん、』

『はい』

はつと目が覺めると、私は兄様に揺ぶられて居ました。いつか夜は明けはなれて、次の間にチン〳〵と鐵瓶のたぎつてる音。

『いま妙な夢を見たんだ、政ちやんのことを』

『何んなこと』

笑ひながら両手に顎をさゝえる。絣縮緬の長襦袢の袖が、白い手首にはらりとこぼれた。

『今朝は何故だか政ちやんが非常に美人に見えるね、馬鹿に可愛らしくつて、花嫁さんのやうに艶麗で……』

『いやな兄様、ヒトを馬鹿にして居らつしやる、』刎起きて了ひました。

障子を開けると、昨夜夜もすがら渓流の音ときいたは泉水に落ちる瀧の音で、大きな緋鯉や真鯉どもが轟く水の下にウヤ〳〵と集つて居る。

まつ白な霜、青い空、濃紫の嵐山、朝日まばゆき水晶日和。

洗面場の鏡にチラとうつしてみながら、「湯みち」と掲げてある額の下を通つて下りてゆくと、玻璃戸ごしに轟となり響くは桂川の急流。すーつとならんだ湯殿の一番奥まつたのへ導かれる。

朝の温泉はなみ〳〵として透き通る様に奇麗である。私が這入と半分以上溢れ出して了ふ。

クチャ〳〵の御飯に冷たくなつた半熟卵、お味噌汁、焼海苔、兄さまと差向ひで御飯戴くことなんか始めて。何だかきまりが悪い。やつぱり邸で食べるパンとミルクが戀しい。まづい〳〵と云ひながら箸を投げて、果物を取寄せる。この座敷はいかにも閑靜で日當りはよいけれど、一等旅館としてはあんまり結構な室ぢやない。でもいゝとこはみんな鍋島さんや何かに占領されてるのだから仕方がない。どうせ次男坊の私等なんぞ……これでも優遇されてる方なのだと兄様は有仰る。

雀のやうに圓くなつて日光を浴びながら、黒塗の机に片肱ついて、兄様はこの間から中毒られてる年賀狀の殘をお書き遊ばす。私は昨日のお召物のお袖に何か這入て居るので、引ぱり出してみると、メチャ〳〵につぶれた中折帽。ほんとうにうちの兄様つたら、七月角帽ぬぎすてゝ以來お帽子をお召しになつたのをみたことがな

い。みつともないわ。

『一寸、かぶつて御らん遊ばせよ』

無理にお頭へのせて了ふ。ホヽヽヽ、よくお似合遊ばすのに。すると、

『あ、一寸貸せ。』と引たくつて、中指についた萬年筆のインキをみんなすりつけてお了ひなさる。ハンケチと間違へてゐらつしやる。

眼鏡をかけた番頭が御機嫌伺ひに來る。兄樣とお話の花が咲く。夏目漱石先生のことや、乃木大將の噂。いま隣の部屋には山中隣之助さんが來て居られるさうな。こつら隣の室は北海道の大地主だつて。

あとで兄樣つてば、

『女中達は君のことを何と呼ぶかい、』つて笑ひたさうなお顏してらつしやるので、

『どうして？』

『だつて先刻風呂場の男がね、奥樣はと尋ねたよ、僕もあんまり面食つちつたから、

返事が出なくつて……』

『ひどい〳〵、ひどい。私知らない、』

『ハヽヽヽ、面白い〳〵。』

午後からは切手はり。一錢五厘のを四百枚だけとりよせる。

片つぱしから口でなめてポン〳〵はつて行つたら、

『馬鹿な、あとで唇がたまらないぞ。かう云ふ例がある、』つて、西洋の何處とかで、女が戀人の心がはりをいかつて、手紙に返信の切手を封入して送つた。男は何心なくその切手を嘗てはつたら、それに劇藥が塗つてあつたといふ話を聞かされた。

怒つたり、怒られたり、室中から縁側かけて一ぱいの繪葉書だらけ、足のふみ立てやうもないくらゐ散亂させた。アラビヤゴムのおかげで、口も手もベタベタお湯に行く。

ずん〳〵と兄樣はおみ足が早いから、とても湯殿まで御一緒については行かれな

い。

『兄さま、上草履を外に重ねて脱どいて頂戴ね、何處へお遣入りになつたか、わからなくなつて了ふんですもの、』

『よし』

後からゆる〳〵出掛けたら、まだ廊下に立つて待つて居て、下すつた、やつぱり兄様は意地の悪いことばかりなさるのでもなかつた。

お夜食のとき、兄様は私がお飯つけて上げる手元をみいりながら、あんまり氣を利かせ過ぎてお給仕に來ないんぢやないか、と有仰つたので大笑ひ。

兄様がこの日の入浴數五回、お燗徳利ぢやあるまいし……。輝く電燈の下、割れるほど火鉢に炭をおこして、林檎剝きながらお話する。

何の動機でか、ふと兄様つてば、今夜は政ちやんの戀の歴史をきかう、話せ、と有仰る。

私には其樣なものありませんと申上げたら、

『ウソ云へ、嫁入りしやうとする女ぢやないか。熱烈な乙女時代に何にも知らなかつたと云ふ筈はない、さうは云はせぬ、政ちやん、』

『だつて、だつて兄樣……』

何と云つていゝのか解らないので唇を噛〳〵て了ふ。

それはもう、感じやすき乙女氣に、懷しい方や忘られぬ君、優しかつた人、逢ひたい人、いくらもいくらもあつたけれど、それは戀とは申せますまい。たゞ何故か親しく懷しく、近〳〵棲みたく語りたく思ふは人の情ならずや。

神から賜はつた五尺の黑髮、美しき肌、この純なる一身を捧げてまで戀しやうと云ふ人は、恐らく私の望んで居るやうな人格の人は、この世にないのかも知れません。あゝ淺ましいと、寧ろあわれに思ふその人達に、どうして戀することが出來ませうぞ——こんど眞田家へ嫁くのだつて、私はのぞんで嫁くのぢやない……。

兄様、それ故に、可愛氣がないと云はれても、打算的と罵しられても私には私には戀なんか出來ませんでした。

あゝいつまでも嫁かずめとらずこのまゝに……私は兄様のお膝に泣きふしたかつた。

三十日——海豚法學士

うつとり眼がさめると、もう鷄の聲。室はほの白い。あゝ昨夜は夢も見なかつた。寢返るとさや〳〵と夜着の袖がなる。

何だかさびしく、つまらないので、兄様を起さうかと思つたけれど、あんまり靜かな息をしてゐらつしやるから、私も天鵞絨の襟に深く頰をうづめて、ぢつとして居ました。女中が來てぱつと次の間の電氣をひねつて、火鉢へ炭をついてゆく。雨戸の繰られるのを待ちかねて、枕元の懷中時計をとつてみる。七時十五分前。

兄様もぱつちり眼を開いて、

『政ちやん、』

『兄様、』

泉水の瀧の音が耳につく。まぶしい朝日の光り、障子に鳥の影がさした。あたゝかい衾のはなれがたうて、いつまでも夜着をかぶつて居たら、

『みつともないから起きろ、政ちやん、いゝ加減に』と叱られて、仕方なくはね起きた。ピンがぬけて櫛が落ちて、大童めく朝がたの髪。

『早く髪でもときつけなさい、そんな頭ぢや顔洗ひにも出られやしない』

『はい〳〵』

次の間の鏡臺の前にゆく。

邸に居れば毎朝のお髪上げに一時間はかゝるのだけれど、そんなこと兄様にめつかればまた何と云はれるか知れないから、合せ鏡もせずに手早くして了ふ。

寝坊した罰で浴室は滿員。仕方なく洗面場の氷をくだいて口をそゝぐ。冷たくて〳〵總身カンテンの樣に引しまつた。室へお湯を取りよせて、日當りの緣側で顏を洗ふ。

『今朝は白粉がきれいについたね』つてヂロ〳〵笑つてゐらしやる。

今日から朝食はパンと牛乳にする。

女中が『奥さま』と呼んだのを、つい『エ』と返事して了つたら、泣きたいほど兄樣に冷かされる。口惜くつて〳〵。

それから兄樣は朝つぱらから晝寢。塗板の献立表もつてお晝飯の賄ひのお伺ひに來た。私にはわからない。

『一寸、一寸、兄樣、起きて頂戴、起きて頂戴、』

『ムニヤ〳〵ムニヤ、』

ホネームーンのそれならねども、平素忙しい私達は、此上、人に逢ふのは邪魔く

さい故、箱根や熱海なんぞより未見の地ではあるし、とそれで修善寺をば選んだのであるが、こんなにひとりぼつちでもまたつまらない。

澄樣や、鎌倉の千枝ちやんや、乳母のとこへ手紙をかく。

滅多に人に逢はぬ大きな宿屋だけれど箒星でさへもかち合ふことがある、お湯のかへりに兄樣は廊下でばつたり大佛樣に逢つた。馬のやうに大きく肥えた方で、黃縞の褞袍着て玉つきの棒をもつてゐらしつた。私は後の方で知らん顏して池の緋鯉をみて居た。

御飯がすむと、案の如く大佛樣がやつて見えた。兄樣よりずつとお背がお高いのに、踵にからまるほどのイヤに長い着物で、高貴織のお羽織、紐は銀くさりである。何となく海豚に似たお顏つきしてらつしやるので可笑しくて仕方がない。兄樣の紹介で御挨拶をする。

『貴女の御文章はいつも第三の校友會雜誌で拜見し居ります。』だつて。お風邪の氣

味と見えて、ハンケチ引ずり出しちやアお鼻をかんだり、クン〳〵〳〵。

女中に、『何かあまいものを、』と云つたら、餅菓子をコテ〳〵と重箱に詰てもつて來て、見るばかりでもウンザリ。それでもワップルだと思つて一つ取つてみたら、ジヤミの代りに青い餡がはいつて居た。

大學では、大佛様〳〵と呼ばれてゐらしたから、私仇名かと思つたら本姓の音よみであつた、これでも法學士様なんだから痛み入つて了ふ。それは〳〵調子にのつて、此の間二階からころげ落ちた失敗談までなさる。

『あの梯子段は二十二段ありますがな、丁度政ちやんのお年のとこからふみ外して……』

下に雜巾がけして居た下男の上へ落ちたんですつて、まさか。

『政ちやん、先日丸木でお撮りになつた寫眞は、』いゝ氣になつて政ちやんだなんて。兄様はそつちのけで私にばかし話しかけやうとなさるので、つと座を立つて廊下へ

出て了つた。

大佛樣のおかげで今日も散歩に行かれやしない。

中庭の老梅は二三輪綻びてゐる。

なか〳〵お尻が重くつて、とう〳〵四時頃まで話してやつとお立ちになる。お見送りしたあとの障子を、ピッシャンと一寸ばかりはね返るほど強くしめた。

兄樣つては

『彼奴はお前を張りに來たのだよ』つて。

オーイヤだ、それなら鹽湯でも飮ませてやるのだつたのに。

『いゝさ、明朝は早く湯ケ島へ立つんださうだ、もう來やしない、』

『來られてたまるものですか、』

夕方兄樣がお風呂に行らしたあと、鞄の錠が下ろしてなかつたので、千載の一遇と、虎の子の樣にしてゐらつしやるノートをみる。

氣が氣ぢやアなく夢中で走りよみをしたのだから、ちつとも頭に殘らなかつたが、そのお和歌だけはよく覺えてゐる。

梅多き家にのこれる美しき
　人おもほひつ春の夜の月。
蠟燭を消してピアノのふたしめて
　君は今頃廊下ゆくらむ。
妹の林檎むく手をみいりつゝ
　君と似つかぬことなど思ふ。

ホヽヽヽいゝことよ。

早速澄さまに申上げるわ。そしてたゞではすまさないから——澄樣がお大切のあの薔薇の鉢植ぐらゐでは私承知が出來ないから。

イヤに電燈がくらいので、二十四燭の球と取替させ、次の間のも一つとこへ引ぱ

りよせて紐でつりわたし、その下に机をならべて、八時から兩人とも勉強する。兄樣はこの間丸善で買つてきた洋書を、ナイフで切り裂いてはよみ、切り裂いてはよみ……。

番頭が挨拶に來て、例の通り敷居ぎわに手をついてヒヨコ〳〵。

『誠にどうも混雜の折から失禮ばかり、お座敷もひどう御座いまして、さぞお氣味が惡うおらつしやいませう。何で御座います、込み合ひますのもこゝ一寸の間で、何で御座います、二三日致しますると、あちらによいお室も空きますで御座いますよいと申しましても……とてもお邸のやうにはまゐりませんが』しきりに恐縮して居る。兄樣の方でも大いに恐縮する。あとで二人は顏見合せた。

きつと大佛さんが何かしやべつたんでせう。唇の厚いくせに口の輕い人だ。

あゝ私もう眠くなつたわ、コーヒーでも入れませうか。

三十一日——修善寺散策

昨日にこりて七時前に起きる。丁度日はきら〳〵と昇つて、霜に飾られた庭の松の木など、まるでクリスマスツリーの様、湯殿へ行くまでにスリッパつゝかけた爪先のち切れさうな寒さ。

室で髪を梳いてたら、いつのまにか私の羽織を裏返しに着て、襟かき合せながら後へゐらしたのを、鏡の中にみつけて失笑だして了ふ。緋綸子の袖たくし上げて、よく似合ふだらうと有仰るから、えゝ〳〵まるで辻待の車夫か、鞍馬山の大僧正の様でと申し上げたら、つく〴〵鏡面を見入りながら、

『僕がみんなに年齢より更けて見られると云ふのは、こんなに額のぬけ上つてる故だなア、』

つて大發見でもしたやうに。まア今更お氣がおつきになつたのだらうかと可笑し

い。それは出世の相で御座いますつて、と申上げたかつたけれど、澄樣にわるいから止した。

あゝ青春十八の年もいよ〳〵今日かぎり、今年は私も兄樣も學校を卒へ、眞田家との約束はきまるし、兄樣と澄樣とのお結納もすんだし、實に思ふこと多き一年であつた。來年の今月今夜はもう人の妻として迎へねばならぬ『あゝ放たれど過ぎゆく矢ばね早かりし、止むるすべなき年のゆくてに』……。

泉水の瀧の水がゆら〳〵ゆら〳〵と天井に映つて、それがまた床のまの鏡の中でゆら〳〵ゆら〳〵をどつて居る。女中がお鏡餅を三寶にのせて捧げて來た。あの九谷の大花瓶に中庭の梅を折つて活けたいと思ふ。

兄樣は肱枕して、いつのまにかゴー〳〵と高いびき、私は淋しくつてたまらない。新聞も讀みあきてふと顏を上げた時、丁度ぱつちり目をお開きになつたので、思はず笑ひ出すと、『よく眠る兄と笑ひそ、妹と溫泉にある時が眞の極樂、』つて有仰

る。歌だかヌタだか解らない。兄様の御自作かしら？

けれど全く東京ではお忙しいんですからねえ。

午後から兄様と散歩に出る。三日目で始めて修善寺の土をふむ。

まづ指月ケ丘に登つて、小さな頼家公の墓にぬかづく。

古人の歌に、

この里に悲しきものの二つあり
　頼家の墓と範頼の墓と。

草の原屍朽ちてもますらをの
　恨や湯とは湧きかへりけむ。

興亡すべて夢に似て、歴史は長し七百年、あゝ親子恩絶え君臣義絶え、代々骨肉相殘ふた源家の惡緣よ。この指月殿は二位の政子、我子頼家公の冥福を祈らんが爲め建立して、何とか經をおさめたところだと云ふ。その堂も今は哀れに零落して、

松吹く風や溪の音、日は暖かう徒らに枯草を照らして居る。

途中で時事新報の社會部長さんの御夫婦に逢ふ、奥さんが藤色がゝつたお羽織に白のショールして、寶石入りの髷止めがおそろしく遠くから光つて見えた。兄樣は慶應義塾の西洋人夫妻に紹介されて頻りにお話してゐらつしやる。

修善寺へ上つて見たけれどつまらないからよして、有名な獨鈷の湯は、兄樣のお袖にぶら下つて、わざ〳〵小橋を渡つて行つて浴場の中をのぞいてみた。湯氣が薄すり立ちまよふて、裸體の男が二三人石に腰かけて居た。川の中に湧いてる溫泉何だか這入つて居る人は蛙みたいに思はれた。

疑雨來館と云ふのは、牛が居るのだとおどかされたので どんな家かと思つたら、白糸瀧のそばにある立派な旅館、ほんとにひどい兄樣だ。

あゝつまらない、つまらない。やつぱり菊屋二階から嵐山をながめて寢ころんでる方がよかつた。政ちやんに引ぱり出されて町を歩いたばかりに、見果ぬ夢をやぶら

れて了つた、つまらないとこだ、修善寺はイヤだつて駄々をこねてしやうがない。御散歩で御座いますか、へ、、、と番頭の追従笑ひ、いやな奴、鼻の先を指でピーンと弾いてやりたい。室へかへるやくづ折れて、甘い冷たい密柑の露を心ゆくまで吸ふ。

何だかすぐに日が暮れた、豫定の佛語の勉強はちつとも進行せず。

夜、三つばかり向ふの室で、先刻からいつにない撥さばきがして居ると思つたら、

「サノサ」なんて大陽氣。私たちは月下の散歩をしてきた、厚く〳〵霜が降りて、温泉の湯氣白く飽くまで寒いけれども、月に輝く桂川の流れは美しかつた。

私は、十八で居る中にもう一度、と澄様へ長い〳〵お手紙をかいた。

それで油斷をして居たら、何時のまにか兄様は、私の日記をみてゐらつしやる。

「いけません、」

「けしからん!!　こんな惡口が！　ほれ、」

私の硯から筆をとつて墨をどつぶり含ませて、抹殺しやうとなさるから、急いでそれを取り返さうとすると、いきなり筆をふりまはして墨で防がうとなさる老猾さ。鳥賊の化物みたいだ。

口惜しまぎれに金ぶちの近眼鏡引たくる、お顔も引かいたかも知れない。

『アッ、ようし、それを取つたな、』

私は廊下まではつてにげる、追かけられる。アラ、ヒドイワ、バタ〳〵、ガタ〳〵。

あんまりさわいだので咽喉が痛くなつて了つた。夢中で穂先をつかんだと見えて、両手は眞黒。左の袖の紋に一筆、あごから襟へかけて三寸ばかりと、あら、こんなに右の肩にも！　いやだ〳〵わ。

兄様は、つるが曲つちやつたと小言云ひ〳〵、せつせと指先で直してらつしやる。ヤ、、、、兄様が眼鏡なしの顔は可笑しいこと。

いま頃東京ではどうでせうねえ、電車は夜通し運轉で、人は旋風にまかれる木の葉のやうに、東西に飛んで居るでせう、靜かな麹町の邸でも、今夜はみんな徹夜ですもの……。

あゝ何とは知らず思ひが湧く。筆をとつてインスピレションの溢るゝ儘に、東が白らむまで書いて〳〵書き續けて見たい。兄さんに此事申上げると、萬年筆とつて、さら〳〵とノートの端に走り書、手早く引き裂いて『政アちやん』つて投げて下さる。

洋行をする兄、嫁ぐ妹に

もの思はすよ溫泉の宿の除夜

來ん年をわれは花なき國にあらむ

おんみは人の母にてあらなむ

まアひどい、そんなに早く赤さんが生れてたまるものですか……けれども來年の除夜こそは……。

アツデユー明治四十四年。アツデユー。アツデユー。

元日――梅園行

溫泉宿の春はのどかなり。歌もなく夢もなくて、七時起床、東の空に朝燒が美しかつた。やつぱり霜は雪の樣、紫色にまばゆく輝く。

朝湯から上つて、次の間に鏡の前に帶をしめてると、女中がお膳をはこぶ、みなつや〳〵と結立の銀杏返しを光らせて、銘仙ながら折目正しき春着の裝ひ、私ばかりは去年のまゝのバラ〳〵髮。

『明けまして、お目出度う存じます』と改まつての挨拶。

私もお傍に手をついて

『兄樣、お目出度う』ツて云ふと、

『ヤ、お目出度う』思ひもよらぬ叮嚀なお辭儀。少々面食ふ。

御祝儀のお屠蘇を笹の葉の露ばかり酌かはして、つゝましう お雑煮の太箸をとる。

二色玉子や、栗のキントン、車海老、かまぼこ、、、、、ひよどりの焼物、お口取は美しうかざられて、かんばしいお吸物の香はたちのぼるけれど、何故か痛切にさびしい冷たい元朝であつた。

あゝ兄様は來年からもう、ロンドンの霧の中でお餅も門松もない、異境のお正月をお迎へ遊ばすのかと思ふと、御出世の爲めの御洋行乍ら胸が一ぱいになつて……。

いま頃番町の大兄様は騎兵中尉の禮裝勇ましく御參內。大禮服燦と、肥馬にむち うち給ふは澄様のお父様、島村の伯父様……うちでも官邸に居た頃のお正月が、夢の様にたのしく花やかであつた。

兄様、澄様のお島田が拜見したう御座いますわね。と申上げたら、まア憎らしい。だまつてゐらしつた。

九時頃から、南條ステーションに程近き長岡の高田博士の別荘へお出掛、私はおいてきぼり！

怠惰てちやいかんぞ、留守の間によく勉強しておけと云はれる、私は默つて點頭いて、ステッキとお包もつて玄關までついて行く。

『行つていらつしやい、お早くね』と云つたのに、御返事がなかつたので悲しかつた。お俥の影の見えなくなるまで立つて居たので玄關には私一人。一緒にとんで行きたいやうな氣がした。

昨夜のサノサ節の室では元日の朝つぱらから、活惚れなんか彈き出した。髮を結ひ、お友達へ二十枚ほど年賀狀書く。お母樣から兄樣へのお手紙が來た、私の分もはいつて居るかしら、開けて見度てたまらないけれど、我慢してたゝ幾度となく裏打ち返しつ。

大きなチャブ臺にボッネンと向つて、淋しいお晝餐をすますと、兄樣のおいひつ

け通り、梅林へ行つて見ました。

奥様、奥様、と云ふ生若い番頭に途中まで送つて來て貰つたけれど、それから先は一人ぼつち、心細いこと夥しい。玉の如き流れの淙々たるを聽つゝ、橋を渡つて打ちつゞく杉並木の中を登り盡すと、四方枯草山に取圍まれた荒野原。麗かな日和、空は鏡の樣に晴れ渡り、二枚も綿入を重ねて居るので、額はしつとり汗ばむくらゐ、コートを着て來なくつてよかつたわ、邪魔くさくつて襟のあたりのショールなんぞもとつて了つた。

しばらく東屋に這入つてやすむ。裾を引きのべたやうな小徑は彼方此方についてゐるけれど、何方へ行つていゝのかわからない。犬ッころ一つ通らない。

先刻ふり返つた時遥にチラ〳〵して居たお納戸の羽織もインバネスも、心待ちにして居るものを、何處へ行つて了つたのだらう、いよ〳〵路は嶮うなつた、それはノ〵ひどい霜解、黒塗下駄がまるでお團子の樣になつて、澤庵石でも結はひつけ

たかと思はれる重さ、一歩〳〵に引ずりながら息を切り〳〵、螺旋の様な山路を登る。老いた薄が折々日光に閃めいて居る。

ふと見かへると、思ひがけない、白銀輝く富士の頂。歓喜の胸を打つて、ひた登りに攀た。

萱葺のしやれた一かまへ。早く〳〵あすこで火の様な咽喉を潤ほさう、お菓子を食べやうと楽しんで来たものを、こゝにも人は住まぬ。ガラス戸をすかして、テーブルや椅子が埃にうづもれ、軒にさら〳〵注連飾ゆれるばかり。落寞してベンチにうつぶす。

散りしいた枯松葉に、ともすれば下駄がすべる。

松吹く風は颯々として、さながら浪のよするが如く、鎌倉の春も偲ばれて……。

面白くつて、さく〳〵と霜柱をふみ散し〳〵して、歩いて見た。廣い梅林にたゞ一人、躑躅ケ岡の綠濃やかに、玲瓏としてコバルトの空に浮き出たやうな雪の富士。

雑木林をざアーッと風の渡るのは、すわ十萬の軍兵一時に押寄たかとばかり。

また頭を廻せば寒林の簇々たる上には、薄すりと晝の月が浮いて、打群た可愛い小鳥は枝から枝へ飛びうつる。寂しいけれど、宿へ歸つたつてもねえ、兄樣がいらつしやらなければつまらないんですもの、お土産は何でせう？　と考へても見た。桃色の躑躅の花がたつた一輪咲いて居たので、欲しくつてたまらなかつたけれど、手がとどかないから……梅の梢はまだ膨らまうともせぬ。

夕日も傾いて、風が寒くなつたのに驚いて下山、途で朽葉にうつもれた動かぬ水車を見る。物悲し。

菊屋ではとう〳〵私を奥樣にして了つた。憤慨に堪えない。ウソと思ふなら華族名鑑でも見るがいゝ、其樣なことで温泉宿も凄まじい。一たい最初に兄樣が面白がつて、抗議を申し込まなかつたから悪いのだわ。シカシ後日にわかるでせう。

一息にサイダを仰ぐ。

それから机によつて澄様へのお手紙書き始めたが、いつの間にやらつい轉寢を……。

はつと我にかへつて顔を上げる。もう電氣がついて時計の針は五時二十分。兄様のお歸りの時分、室を片付て障子を開けました。

ゆくりなくも伊香保の浪さんが想ひ出されて……。

千明の三階のそれならで、夕月匂ふ菊屋の欄によるは妹の政子だけれど、兄様だからつて良人だからつて、その懐しむ情に於いて、變はあるまいと思ひますわ、門に交叉された大國旗は、風なき故にだらりとして、庭の電燈が泉水にうつツてゆら〳〵、玄關へは先刻から二三臺の馬車が乘付られたらしい、兄様も同じ汽車であらう。華やかなるべき都の様を想像しながら、いつまでも〳〵立ちつくして居たと、がら〳〵がら車の音がして、

『おかへりッ』とばら〳〵一同出迎へた様子に、胸は春駒と跳たけれど、下までお迎ひに行くのも何だか女中達に顔見られるやうな氣がするから、室にはいつて座布團の上に坐つた。息をつめてると、

とぼろと近づく足音。

『兄樣』心で叫んで顔を上げるや、からり障子が開いて、なつかしい立姿。『お歸り遊ばせ』とうつむいて何だか泪がこぼれて了つた。

『お寒かつたでせう、でも割合にお早くつてねえ』

お羽織をたゝんだり、熱いコーヒーを入れて差上げたりする。

『政ちやんも一緒につれてゆけばよかつたねえ。いろ〳〵話もあるけれど、君、今日の新聞見たか、東京ぢや昨日から電車のストライキだつてよ、痛快ぢやないか、時も時、借金取は困つたらうね、尤も電氣課長君も修善寺に居るさうだよ……、あゝ寒くつて〳〵たまらんから先に風呂へ行つてくる。』

私はタオルもつてお供する。

若き血のかけめぐる頬を薄紅に匂はせて、湯上りの心地よく、たのしく食卓をかこむ。

途中で井上侯の令息にお逢ひになつたとやら、どの方にと伺へば、それは賄賂がなくては敎へられぬと有仰る。まあ憎らしい。

いつか汽車中で見かけた三令息、お十八ぐらゐと二十ばかりと二十二三と、みな學習院の制服制帽、花の樣な玉の樣な輝かしさ。貴公子とはこの方達の爲につくられた言葉ではないかと思はれた、今日は獵の姿をしてゐらしつたとか。

兄さんは博士御夫婦と少さい坊ちやん孃ちやんや、川名博士のお老父樣やお孫さまと散歩なんかしたのだつて私を羨ましがらせるやうな話ばかり。そしてそのかへり、一人で韮山から北條へまはつて、江川坦庵の反射爐やその邸、さては蛭ケ小島のあとや、茶々丸の何とかだの、光照寺で二代將軍賴家公の臨終の面をみてゐらし

たと云ふ。頼家公は欺されて漆風呂へ入れられたんですつてね。たまらないわ。目も鼻も口も酷たらしう腫上つて二目と見られぬ。それを鎌倉の方へはこんな病氣に取りつかれたつて讒言して、毎日〳〵重つてゆくその顔を面に彫つては注進したのですつて。

とう〳〵十四日目とかに、その使者が光照寺まで來たら、頼家公の御最後をきいて、そんならもうこれにも及ぶまいと云つて、其儘置て行つて了つた、それが寶物になつて居るのですとか。ほんとに酷たらしい、もうその面のエハガキの嫌らしくて嫌らしくて、それに昨日詣つて來たお墓の下にその人が横たはつて居るのかと思ふとたまらない。兄樣はまた頻りにそれをみせつけて、こいつは痛快だよ〳〵と喜こんでゐらつしやるけれど、ちつとも痛快なことはありやしない、私こんなお土産なら欲しかない。元日からこれでは、今年は一年中定めて振つたお土産ばかり貰ふ事だらう。

お夜食後荷物の整理。兄樣は一氣にエハガキを十五六枚かく。水さしに水を盛つて來た女中が、降り出しまして御座います、と二人を等分に仰ぎ見る。

兄樣のお顏は曇つた、私は落膽して持つてたスタンプを投りつけたくなつた。明日は早朝出發、馬車で十五里、天城山を越えて、下田港へ出やうと云ふ相談なのだのに。

兄樣、どうしませう、どうしませう、と口綴けに言たら、人事意の如くならず——どうともなされ、明日は何でも修善寺を立たう。降つてたら、湯ヶ島で遊ぶが、伊東へ出ても、熱海へ行つてもいゝぢやないか、張子の虎ぢやあるまいし、心配するには當らんさ、と大束をきめる。それに勢を得て急に呑氣になり、優勢に茶目る。

兄樣は、お別れにとて溫泉をとりよせて召し上る。

咳の藥の代りに一口飮んで見て、『まるでこれは、なめくじの樣な味だ』つて。

お魚だ〳〵とだまされて、乳母になめくじをのませられだと云ふ兄樣、その時分

から食辛坊でおらしたのねえ。併しまたこれは聲の藥だともいふ。いま演壇に立つ時、ガラにもなくいゝお聲をお出しになるのは、きつとそのお蔭かも知れない、乳母は私にも食べさせて呉ればよかつた。

今夜のうちに會計をすます。女中達がぞろ〳〵とお禮に來た。宿の者も逆樣になつてどうも只今はいやはやと廊下の外から……。

軒を傳ふ玉水の音悲し。おそくお湯にはいつて眠る。夢は拔けていつしか、九十九折の天城へ……。

二日——馬車の天城越え

『うれしい。うれしい。兄樣、歌んじまつてよ』

と、薄暗いのに飛び起た。灰色の曉深う、修善寺の村を封じて、また空合はわからないけれど、雨垂の音だけは絶え果た。ほんとうに嬉しくつて〳〵

樂しかりし五日の記憶、けふを名殘と思へば、いくらお轉さんでも後髪引かるゝ心地して、湯道のかへり廊下に人しれぬ泪も拭いた。まア一夜の中に池の水嵩の增したこと、濁つたこと。丁度、冷えたお味噌汁を引掻きまはしたやう。

會計は昨夕すんでゐる、仕度も整ふた。宿の者は、言葉をつくして引きとめ、天候も危いし、路も惡いでせうし。……お部屋がお氣に召さねば、どうとも都合致しますの何のつて云つたけれど、もと〳〵待遇が不足なのぢやない。電光石火的の兄さま、今更誰が申上げやうとも駄目なんです。

それやこれやで、七時出發の筈が一時間遲れた。玄關に勇ましい馬の嘶き。いざとばかり、女中たちに取かこまれて立ち出づる。

山越の爲に選拔して、三日も前から特別のかいばを與へたと云ふ觸れ込みだから、どんな逞ましいのかと思ひの外、もぢや〳〵とムク犬の背中みたいな、赤ちやけた、きたならしい馬。おまけに馭者は山賊然たる面構の愛想氣のない男。お約束は

したが、昨夜の雨に道がぬかつて居れば、兎ても下田までは行かれぬと云へば、兄様はどうでもやれと命令する。やつさもつさの談判は劇烈であつた。宿の主人が見兼ねて駅者をなだめるけれど、まだ強情張るしぶとさ。

私は式臺に立つた儘どうなる事かとハラ〳〵して居ると。

『背水の陣だ〳〵。早くお乘り!!』

と叱る様に仰有る。小さくなつて、お傍に並べば、やうやくに鞭は揚つた。轍ぐわら〳〵と、小石敷きつめた門を出かゝる。一しきり、道中の無事を祈る聲々が聞えた。

朝風に髮を震はして、勇みに勇んだ駒の足掻き。やがて景色は展開する。桂川の水は薄みどりに濁つて、轟々と藍色深き、山々の裾をゆく。ショールを通して襟元に泌む川風の冷たさ。暫くして下田道へと折れ込む。

薄雲とぎれて、雨上りの朝日は鈍くさす。見上ぐる山々、水蒸氣立ち迷ふて田舍

道ゆく喜ばしさを思はしめる。

お定まりの藁屋、萬屋、首なし地藏、さり乍ら私は物珍らしく、はしやいで話しかければ、兄さんも機嫌よく相槌を打つて下さるから、ちつとも退屈しない。尤も今から倦きが來るやうでは今晩まで十五里のガタ栗毛道中は出來ないけれど。

初荷と書いたビラをくつゝけた馬が三十俵ばかりづゝ炭をつけてポカ〳〵ポカポカやつて來るに、いくつも出逢ふ。天城の奥で燒かれた炭なさうな。

高等馬車々々々々と口々に囃し乍ら、驅け出る子供達その二本棒の青鼻汁に緣ある、青根村にさしかゝれば、しばらくは並木道、振りまはす鞭かげに、碎け散る雫、二人の衣袂を打つ。

一里半はいつかあとに過ぎ去つて、湯が島に近づいた。此邊の水車ではみんな木を挽いて居る。私には珍らしいのでお願ひして降りる。水に辷る石ころ道おりて半町、川岸の凹地に半永久の掘立小屋、浦島太郎の樣な腰蓑をつけた男や、耳を聾す

る大鋸の廻轉、ブーン〳〵と飛び散る鋸屑、フランス革命の折、一日に二萬人の首を刎ねたギロチンなど想ふ。三太夫の八ケ間敷い爺やの首をチョン切つてやりませうかとつたら、馬鹿な！　と叱られちやつた。

再び馬車に還つて、ゆられ〳〵、十一時頃湯が島へ着く、兄さまは落合樓で晝食しやうと有仰つたけれど、こゝにはあの大佛海豚さんがゐらつしやる筈故、極力お袖を控えて揉つぶし、行き過ぎてから夫れと打ちあければ、あゝ成程おさゝんかとニッコリ。

いよ〳〵天城の御料林にさしかゝる、松多く、嶺に孤松の秀づる冬山。草は黄褐色に、山は赤褐色、空氣はいよ〳〵寒さを增した。兄さまは用意のお鮨を取り出して、私にもお食り〳〵……。

『みつともないわ馬車では』

と　横ちよを向けば、ぢやアやらないからいゝよと憎まれ口きゝつゝお一人でム

シャ〳〵平げる。お茶もないのにまア呆れた。私よりも馭者が食べたさうな顔して、何度か振り返つてたわ。兄様は口の方へ一生懸命、夫れには頓着せずの本領發揮。杉の闇さは益々加はる。上り路の泥濘ときては泣面に何とやら。重い車臺は上に下に、右へ左へとガタつく。

『兩人馬車に乘るは船に乘るに似たり』

など丶、兄様つてば、口達者。馬こそ全く以てやり切れない。ビシャ〳〵と引つぱたかれて……顔まで泥まみれだわ。

毎年東郷大將や乃木大將が天城の御獵をなさるのは、何處かしら、林盡きて山の臺地に出た時の眺めの淋しさ。高き峯には雲流れ、深き谷には水音滾々。一鳥啼かず悲風徒らに蕭條。茫々と草はうら枯れ、骸骨の手とまがふ枯薄、何だか髑髏でも落ちて居さう。『夢にも人に遭はぬなりけりと』咏んだのはこんな處か。

法科仕込の兄さまは、悲しい事は嫌ひです。

『政ちやん、僕アしばらく寝る』

睡眠自在を誇るだけあつて早いもの。グー〳〵と高鼾、私一人つまらない。馬の鼻息たゞ白く、空に半圓を描く鞭聲ばかり寂寞を破る。

再び日光の洩れぬ杉の並木道。

遙か彼方の林間に、白き煙ふす〳〵と立ち昇る。胸に泌むその色よ調子よ。何の煙と見てあれば、夫れは炭燒であつた。私みたいなお轉さんぢやない、深閨の姫樣が、玉の御手をかざし給ふ炭火のもとは、人里へ三里、濕つぽい谷間に、むくつけき男が燒くのである。あゝ此處にも人生ありとおもふ時、云ひ知らぬ涙、煩を傳ふ。

目を覺した兄さんは歌が出來たと口づさむ。

冬山に炭やく男汝にも
戀はありしや笑ひはありや

ホ、、、、。流石は演說家だけあつて、お歌まで討論口調と笑へば、

ゆけど〳〵草鳶色に木は黑に
　うらがれはてし天城の六里
涙なくて對しぬと云ふ人あらば
　いつはりとせむ冬山のさま

成程、これは私なんかより上手だわ。恐れ入りました。流石は私の兄樣、赤門の秀才……つたら、また叱り飛ばされる。

處々にペンギン鳥の突立つた樣に立ち枯れた木を多く見かける。あとで聞けば二十年前の山火事の名殘とか。

流れと別れ、流れと合ひ、曲りくねり、登り登つてやつと頂上のトンネルに着く。もう午後の一時。

入口の茶屋で休む。馬はびつしより水を浴びた樣な汗、ポツポツと盛んな湯氣！

軒の低い、眞闇な家お伽ばなしで見るやうなチャン〳〵コを着て、子供をしよつた嫁さんと、六十あまりのお婆さんとが腰を伸し〳〵出て來て、歎待する。二人は圍爐ばたへ上りこむ。

大きな根つこが、トロ〳〵と燃えて、降りかゝる灰は雪の樣、でも感心に疊が新らしいから氣持がいゝ。煤で眞黒になつた自在竹の鐵瓶おろして、澁茶を汲み、手製だと云ふエタイの知れない黒羊羹を頻りにすゝめるので、一寸甜めて見る。オ、にがい！

お辨當は馭者のとも三つこしらへて居たけれど强情な奴だつたから取り消して、殘る二つを二人して開き、齋らしたサイダを抜く。その美味かつた事は今迄に覺えのないくらゐ。お婆さんや馭者にも少しやつたが、舌つゞみを打つて賞翫した。

お婆さんは小さな　オバコの髪に火埃をあび乍ら、歎待ぶりの椅折りくべつ。兄さまの問に答へて、いろ〳〵な會話、こんな山の中に住むで居ても薪なんか一坪い

くらとお金を出して買ふので、御料林の事だから、枯薄一本とつても大變だと云ふ話や、此家は郵便の交換所である。昨日など年賀狀のために、一便三十六貫目あつた話。さてはだん〳〵と世の中がせちからくなりまするとて、自分達の生活狀態など、眼をしよぼ〳〵させ乍ら、二人を見あげては、長い金火箸で爐の燃えさしをつくらふ。

お支度がよければと、馭者に呼ばれて、驚いて、茶盆の隅に銀貨一つ。コートの紐引きしめつゝ、急ぎ車上の人となる。

「ぢやアまア旦那樣御さげんよう」

と二重の腰を八重にして云ふ。

「お機嫌よう。左樣なら！」

と兄さまはお優しい。

あゝ好婆、幸くあれかし。私はもう再び天城の山など越さうと思はぬ——もう長

へに相見る折はなからうよ。

二百四十五間のトンネル、馬車には燈火が點いた。何とも譬やうのない風は八寒地獄の底から吹き上ぐるかとばかり。黑闇々の中に銀の雫がポタリ〳〵。不意に襟元に零たので、思はず、兄さまにすり寄ると、肩に手をかけて下すたので、其儘御胸にすがりついて仕舞つた。

トンネルは深くなりゆく夜の國に
旅するごとく二人默しぬ

×

洞を出づれば下り坂、何しろこれまでは上り三里下り三里、また上り三里を經て來たので、これから再び、下り三里なのだ。

幾度か牛に逢ふ、一人の牛方が三頭位づゝ引ばつて居るから大騷ぎ、牛でも山家

育ちは困るのね。東京あたりの鶏は自働車だつて驚きはしないのに、あの大きな圖體で馬車を見るとへたばつた儘、叱らうがすかさうが、叩かうが、いつかな後ずさりばかり、駈けぬけるのには路は狹し、もしあの角を振つて突きかけて來たらどうしやうと氣が氣でやない。……けれども、枯草山の麓を赤布毛着て、黑い牛を曳いて行くところなんか、全く活きた繪だわね。

ある曲り角で、パッタリ學生の一組にあふ、制服制帽、草鞋ばき。どつかに清水がないかなど云ふて居た。何となく懷しいので、振り返らうとすると、復た曲る、岩背に隱れて見えずなつた。

『まアよく曲りますのね』と兄さまに云ふ。

『ウン、九十九折とよく形容に云ふが、夫んな生やさしい事ぢや駄目だ。平均一町に一と曲りとしても、天城十二里で……エ、と、四百三十二曲りさ』

などと可笑い事をおつしやる。

二時間で湯が野着。山の麓に片側町の小部落、川を隔て、向ふの方に山を望む。お正月中とて角力だか芝居だかの小屋がけ。ドコドンドンと人を呼び、三々五々ぞめきあるいて居る若者たちは、魂ぬかれた様に、口を大きくあけて兄妹のあとを……。

馭者の案内で、はし岡と云ふ宿屋に入つて、改めて暖かい御飯を註文する。大佛様の傍に落合樓を素通りした故か、お茶屋のお鮨はどこへ行つて仕舞つたやら、食辛抱のお肚虫はグー〳〵と糧を求めて居る。

埃だらけの椽側に爪立てゝ、手欄に倚ると、眼下に歌ひゆく、河津川の清流。

×

御飯の出來る間を湯殿へ遊びにゆく。宿は地方紳士のであるから、こゝで一等と云つても古いガタ普請だが、お湯殿は、割合に奇麗で明るくつて、こん〳〵と溢る

ゝ玉泉。兄さまのお身體が透きとほる樣に美しく見える。背を流して呉れとの御註文、はい〳〵と胸に一物、甲斐々々しく褄からげして、一生懸命引こすつて上げたら飛び上らんばかり、お前のは洗ふんぢやない、引つ掻くんだつて、人を猫か何かと間違えてゐらしやる。

考へれば私は茶目さんね。こればかりでは氣がすまず、頭から水をかけたら、兄さん噴慨して、湯をかける。アッ！　御免、御免、裸相手に水かけ論は、どうせ負ける。

お膳と七輪とを運び込む。まアどうでせう、牛鍋とは振つて居る。その外には骨の樣な澤庵と、鬼の角の樣な菜づけのお香々ばつかり。それでもおいしくつて何杯食たかわかりやしない。尤も兄さまのお給仕しながらでは、お箸とる間もない程だから苦しかつた。

食後エハガキ取りよせて、コロリと肱まくら、しきりに書いてらつしたが、寢がへ

る拍子に、スタンプの朱肉の上に轉んだからたまらない、お羽織の背中へ飛むだ紀念の跡……。

ホ、、、イ、氣味だ。やたらと牛の様にごろ〳〵なさるからわるいわ。と云つて、梯子段の處まで追ん出される。もう御免……と入らうとするのを、兄さまつてばひどい、蜜柑のつぶて！　アラと身をかはすと、スポリと障子を射ぬいて、川へ流星の如く……。

アハ、、、、オホ、、、と高笑ひ、流れ〳〵て、遙か下の里で、天城のトンネルのお婆さんの様なのが、川へ洗濯に來て、拾ひ上げるやらと、お伽噺みたいな事を話しあふ。

ふと氣づくと、襖の仙人と童子は、大きな眼鏡をかけて、カイゼル髭ピンと生やして居る。宿泊人の落書に相違ない。天下に我黨も多いと心強いけれど、これは少し罪だ。兄さんは尾竹國觀さんにこんな癖があつて、稻の繪の屏風に幾百の蝗が飛

ばしたり、牡丹の掛物に双の蝶々を書いたりした話をなさる、國觀さんなら願つてもない幸ひだけれど、田吾作杢兵衛の様な、馬骨にやられてはたまらないわ。

この中にガタ馬車の用意が出來た。とう〳〵馭者の強情が中ば通つたのである、憎らしい奴。尨犬馬にアッデューを告げて、違ふ馬と馬方とに曳かれて出發。こんどこそは、居眠つて居れば、外へはね飛ばされて了ふ。優勢な上下動、左右動。

はせ紅葉美しく、枯尾花風になびきて、夕暮迫る山路を紫の袂、黒の羽織淡紅色のショールの妙に心をそゝる様なラッパの聲にはやされてゆく。ふと目をあげた私は。

『あれ、お兄様』と叫んだ。

はるかに相模灘の夕潮、酒よりも濃く湛ゆるを見る。落日は金朱の盆の如く、山は赫々として燃えなんとし、壯嚴なる光景であつた。

『オ、海、なつかしい海！』

と仰有つて顔をあげた兄さんの眼鏡は、金と閃めきつ。

駒のあがきの一歩々々に夢のごと、日は沈みゆく、日は……。

やがて、海も山もたゞ薄墨に打煙りつ。河津のトンネルを出はづれると、雲間に浮びし十日あまりの月は、にわかに光りを放ち初め坂も下りなれば一瀉千里、流るゝやうに走り行くチャン〳〵チャンと鈴がなる。蹄の響トツトツトツ〳〵、路は川に沿ふてうねりくねり。

不意に後から呼止められて、馭者は手綱を扣へ振り返れば、馳寄つたオーバコートの學生二人、早くも飛び乗らうとするので、『これは貸切です〳〵』と叫び乍ら學生が『さうか、』と後ごみしたとたん、一鞭あてゝ馳せ出す。旅は道づれ世は情、あとでわるかつたと思つたがもうおそい、今、改めてお詫します。

薄闇の中に水勢高き流のみほの白う、吹く風そよら、月はかすみて、あはれ床しき梅が香の、匂ひ靡るゝやうなる夜にもあるかな。

とある茶店の前に、馭者は私達を馬車ごとおいてきぼりにして、向ふの家へ這入つて了つた、店からは心得顔に塗盆に茶椀のせて捧げ出た、その澁茶を啜りながら覗いて見ると、茶店では今一家團欒晩餐の最中、大きな三毛猫がニヤオー〳〵と甘へて一同にこすりつく。つかまへてあのヒゲとシッポを切りたくおもふ。兄様づてばニヤゴ飯にして食ひたいなだつて。

やがてもどり來りし馭者、ぷーんと安酒の香りあり。再び鞭をあげ、橋を渡り、田甫をかけ、行き行くまゝに遙に下田の灯見ゆ。向ふから提灯ぶら〳〵煩かぶりの男、何だかお芝居のやう。

町を駈けぬけて海岸に近き久津輪館、これでも下田では一番だと云ふ旅館に引こまれた、女中が門まで走つて來る、まださめやらぬ夢心地、下りたつた足もとがふら〳〵して、思はず袖に縋る。敷石に鳴るステッキの音、空氣草履の音。

鶯ばりの梯段をふんで、ぱつとまぶしい室内に、前歯で手袋のホックを外す。

つと火鉢に倚添ひながら。

『こら、兄さま、まるで氷のやうね』

おん手の上に重ねて莞爾、冷え切つた頬には紅がのぼる。眞向ふの料理屋では皮のたるんだ三味線ペコ〳〵。

『今朝も羽織のほころびを、縫ふておけとは氣のつよい、イヤな私にたのむより、好いたお方にたのまんせ』

野良聲はり上げて歌ひつれる。

それからお風呂にお召しなさいましと云つてきたので、私は少し後れてから行けば、アラ、アラ〳〵！　兄さま過つて五衛門風呂の栓を飛ばしちやつたところ、湯殿中大洪水、女中は草履を片手に飛び込むやら、てんでにお玉杓子や擂木をかつぎ出さない計りの騒ぎ。早くどうかしてくれ〳〵つて兩手でしつかり栓の抜けたあとをおさへてゐらつしやる兄さまの風つてありやしない。私は呆れて見て居たがもう

〳〵たまらずお腹の痛くなる程もころげて笑つて了つた。ホヽヽヽヽオホヽヽヽヽとう〳〵半分へつちやつたわ。ドン〳〵湧かしますから、どうぞうめて下さいましつて、委細おかまひなしにお釜の下をフー〳〵と焚きつけられる。兄さま弱り切つて出るにも出られず……日本の中でさへこんな失敗をなさるんですもの、英國へいらしつたらまア、どんな眞似ばかり遊ばすことでせうね、澄様にいひつけ人がないからいゝと思つて……。

橙々風呂、その故かお湯が白くにごつてきたないこと、あまりせまいので私のやうに横に大きなものは、そこら中へ身體を打つける、ほう〳〵のていで上る。

十七ばかりの田舍なまり可愛き娘のお給仕、けれどお膳に大嫌ひな酢鮪がついて居たし、晝間湯ヶ野の牛鍋にへこまされてるので、ちつとも御飯が美味くない。私達のために別室へ左遷仰せつけられた隣り座敷の奴、大いに噴慨し、女中をとらへてあたり散らしてる。可笑しいやら、氣の毒なやら。あちらの室では藤八拳の眞最

中、ハツ、トツ、ハツとやかましいことおびたゞし。

兄さまを引ぱり出して町の散歩。活動寫眞があると云ふので行つて見たら滿員、仕方ないから引返して雜誌店など冷かす。寒になりさうなお天氣。

寢しなに宿帳を持つて來る。流石港だけあつて、どれも〳〵行先舟、出發地舟、住處舟、なんて眞黒々に塗りたくつたのばかり　農商これに次ぎ、學生や東京の人なんか殆どないと云つていゝ、ひとり兄樣がする〳〵、萬年筆の走り書、このレコードをやぶる。

三　日（水、はれ）

七時起床、名殘なき日本晴、海も長閑と見えて、海岸だのに浪の音も聞えぬ。

ちつと兄さんのお寢顏をみいり乍ら、去年の今日を懷ふ。

私のクラスの方ばかり十六人、あの新築の洋館の客間にお集りになつて兄さま

のお友達　大兄樣のお連中、それは〳〵盛大でした。今年だつたら、番町のお嫂樣も、まさか大きなお腹して、お出かけなさることも出來まいし、私だつて、兄樣たちと一しよに、デカンショどなる勇氣は失せて仕舞ひました。あゝ青春は刻一刻と過ぎて行く。來年の今日はまた、どんな思ひ出に耽る身であらう。

うつむいて、ほと息つく拍子に、するりさし櫛が前髪を辷つて落ちた氣配に、パツチリと眼をおさましになる。ウオツチさぐり見て、

『ヤ、遲いぞ油斷は大敵』

パチ仕掛の樣に刎ね起なさる。顏を洗つて、安全剃刀で手ばやく始末して、お出かけになる。

『どちらへ』

とお袖にすがれば、

『一寸汽船會社……』

と云ひ捨て、褞袍の儘いらしつた。

お歸りを待ち、せき立てられつゝお膳に向ふ、お祝儀のお印だつて、尾頭つきのゴマメ二尾、それにお猪口がついて、お酒を運び、お雜煮はいかゞですなんて問ふ。御飯半ばに高島田の女中が會社から電話で早くと申して參りましたと御注進だから云はない事ぢやないわと、私は御飯を振りこぼし乍ら遽てゝコートを着る。兄さまは突つ立つて、お吸物を召し上るさわぎ。

船乘場までは直ぐでした。たつた半町、八時半の出帆と聞たから、こんなに急いで飛んで來たのに、まだ店先は靜まり返つて、朝日を碎いて白金流す靑波ゆたゆた。何だか狐につまゝれた爲體。

『一の子、二の子、三の子さくら――』

カチン、コチンと羽子の音。あの少女達のお正月はどんなにか樂しい事でせう。トランク持つて、ヨタついてきた、頰つぺたの赤い女中は無理に戻して、二人は

砂の上に引き上げられた、和船の縁に腰かけて、心ゆくまで長閑さの情を味はふ。

ふと思ひ出したのは昨夜馬車を斷はられた學生、矢ッ張下田泊りらしかつたが、もしや、この汽船に乘り合しはしまいかとお話する。

こゝから半里ばかりの沖中の柿崎辨天島は、兄さまのお好きな吉田松陰先生が、米艦に投じやうとて潜むだ遺跡である。松陰先生は廿九で斬られなすつた。この時にはまだ廿六七でしたらう。いま兄さまは同じ年ごろ、思へば兄さんなんか茶目つてばかり居て、まだカラ小供なのねえと申上げたら、何云ふのかい、君だつて——南部のお祖母樣は、君の年には三人のお母樣だつたんだぜ。君に眞似が出來るかいと、やり込められる。

かれこれ三十分も待たされて、切符を賣り出す。頻りと住所姓名年齡をたづねられる。土左衞門の時の用意でせうか。艀には十五六人の乘客、その外には箱だの、樽だの、袋だの、俵だの、犬だの。

漕ぎつけた天城丸、百噸あまり。明日の朝六時ごろ、靈岸島に着くと云ふ。ガラにない程黒煙を吐き乍ら、けたゝましく汽笛を鳴らして居る。その舷側のエメラルドグリーンに透通つた波の色は、乙姫が洋裝のスカートの色か。

横ッ腹の荷物を出し入れする三尺ばかりの窓から、兄さまと船方とに兩手をとられて、引ずりこまれる。低い天井、鐵の柱、暗い臭い、アンペラ敷いたる船室にと案内されたが、御免と……すぐに甲板へ逃げ出す。兄さま欄に手をつかうとしたら、塗りたてのワニスがべつたり。ボーイがござを板の間へ敷いてくれる。

推進器が捲きかへし、掻き返す船尾のウエーキーカーレント。大きな心臟——汽鑵——はいよ〳〵活動を始めた。あれ島が動く、斷崖に波が散る。嘴と脚だけが紅い白き海鳥一羽ツート飛ぶ。檣上高くはためく日の丸の旗……。

薄藍色の絹を張りつめたやうな海上、舞踏靴でもはいたらば、スル〳〵何處までも辷つてあるかれさう。

いくら私がお轉婆だからつて――お池でならばボートも漕げるけれど、海へなど乘り出したのは始めてですもの。雜誌をひろげて見た眼がだるくなつてハタリ頁を伏せて仕舞ふ。頭がおもい。胸がむかつく。もう口を利く氣力も消て、袂の上にうつ伏した。

『どうした政ちやん、心地がわるいかい』

『何だか、息が苦しくつて……』

『ぢやあお寢なさい〳〵。大丈夫だ。兄さんがついてるぢやないか、ね、さ、ね、！』

小さい子をすかすやうに有仰るので、仕方なく鞄枕、毛布を敷き、膝を折つて、横になり、ショールで顏をかくす。風が寒い、何だか乞食の樣だ。どうせ甲板乘客なのだから、それも仕方がないけれど。

うと〳〵して居るうち、何處か二つばかり、港へ寄つて、今度は稻取へ停る。まだフラつく。稻取は名高い模範村なので、將來の內務大臣を以て自任して居る

兄様は、僅か二十分の停泊時間を利用して、上陸すると仰有る。御一緒にとも云へず、たゞ起き直つて、お見送りした心細さ。いつの間か知らない顔の新客が大分ふえた。梅の枝に水仙添えて持ち、手欄によつて居る三十ばかりの紳士が、頻りと此方ばかり見る。

私は望遠鏡あげて兄さまの行衛を物色する。キッと唇を結んで、こちらを眺めたその眞面目な顔！

淋しくつて困つて居たら、解ゆら〳〵。思はず白いハンカチを振る。懐かしい御笑顔、無事にお歸り遊ばしたので、泪の飜れるほど嬉しかつたが、村役場を訪ふて、治蹟の材料貰つてゐらつしたとか、薄つぺらな二三冊の報告書を見せびらかし、これさへあれば大願成就、是非洋行前に大演説するんだつて大威張。

廿分速成の視察談なんぞ聞される人達こそ、全く以ていゝ面の皮。あつち向いて赤ンめでもして上げたい。

色々の笑話に稍々元氣を恢復して、目眩は治つた。一時間あまり、川奈を經て伊東着。

今度は時間がないからおよしなさいと止められたけれど、何でもいゝと押し返すと、ぢやあ切符を貰ふべいと、受取つてしまつた。變な奴つてば。

郵便局へ行くのだつて、あの洋服姿の人も上陸。細い長い髯の赤い事、まるでビール色。オーバー着て。氣取つた妙な帽子かぶり。眞直に立つ。

兄妹は大急ぎで伊東の町を歩いた。エハガキ買つたりするうちに、二十分殘り少なく、ボー〳〵と松原のかなたで、忙しい汽笛。それッと小刻みにあるき出したが、

『あら兄樣、私、大變な事を』

……ふと髮に手をやつたら、大切のかんざしがなかつたのだ。

『え、どうした』

『落したのかしら、一寸待つて頂戴』

氣も漫に引きかへしかけると、兄樣も不性不精五六間。

『困るなあ。出船人を待たず……どんな大切なものか知らんが、歸京つて何でも買つてやるから――』

『だつて〳〵』

『チョッ、いやな事だ。ちやア僕先へ行つて艀をとめて來るからね、政アちやんはあとから急いで』

ひどい兄樣！　ひどい！！　仕方がないから私も息せき切つて海岸へ……。

アラッ！　艀の影だになし。ステッキ打ち振りつゝ橫飛びに飛んでいらしつた兄樣は、

『オーイ、オーイ、船頭ウ、オーイ』

と得意の蠻聲。

私は望遠鏡を目にあてた。いま本船にこぎつけた處で、甲板には右往左往の人影。

何だか皆んな笑つて居る様な。エ、口惜しい。

返せ戻せと足ずりしてるまに、一聲二聲汽笛を鳴らして、徐に動き出す。磯にはさりげなき浪の音。呆れ果てて、眺むれば、見つむれば、船は黒煙のこして、正々堂々と遠ざかりゆく。

吾にかへつて顔見合せて苦笑する。甲板にはトランク、毛布、みんな其儘であつたのに……並木の松の烏啼きも、二人を嘲けるかの様、癪にさはるわ。

春の磯石にもならぬ女かな

兄さんてば呑氣にも俳句。それどころではない。これから一體どうしやうてんでせう。

×

石にもならぬ女は、兄さんに促されて、引き返しました。取りあへず落着たのは

伊東館、よいお部屋は一つも御座いませんが……と断り付きで導かれた、障子の動かぬ、床の間もないひどい部屋、丁度筋向ひには、今着いたばかりの醫學博士、佐々木東洋さんが、同じ樣な境遇に苦笑最中、全く以て滿員らしい。聞けば北里博士、外數人の醫學博士がおらつしやるつて。正月から醫者では到底助からないとは、お兄さま、惡い洒落だわ。

熱海の青木館へこれ〳〵で、オイテケボリを食つたから、荷物を受取つて、よい部屋を開けておけと電話を懸けたら、あちらの番頭驚いたの何の。エーッと腰を抜かさんばかり、そして、畏まりましたと、ゴツン〳〵受話器に額を打ちあてる音がしたつて、兄さま益々優勢な氣焰、熱海はこつちの勢力範圍だから、こんな離れ業も出來るのです。

廊下ゆきかふ女中の上草履徒らに騷しいけれども、お茶一杯、火一つ持つて來ない。虐待と怒るのは野暮、可哀さうに女中は手が二本しかないものねエ。

『吾を妨るアルプス豈あらんや』とナポレオン氣取りの兄さまは是が非でも、今日中に熱海へ行くと、最初、網代駕屋を呼ぶと、二挺六人がゝりで十三圓と大きく出る。兄さま憤慨。次には船の相談になつた。

『箱根路をわれ越えくれば伊豆の海や、沖の小島に浪の寄る見ゆ』

と實朝朝臣が咏みたりし、熱海の沖の離れ小島、初島の早船が一艘、急病人で醫者を呼び、それを伊東へ送りといけたその歸り途だと云ふ。双方虚實の押問答、聞いて居れば中々面白い。兄さまも隅にはおけぬ應對ぶり。

折合がついた頃に、電燈もつき、夕御飯の膳も運ばれた、白髯ながく美しき宿の主人が挨拶に來る。町長だとやら。此處でも私の事を一同で『奥様、奥様』と祭り上げる。

『一寸、兄さま、私もう知らなくつてよ。早く澄樣引つ張つてらしつて、此の寃罪を雪いで頂戴！』

『でも今度のは二度目の夫人だと思はれたらどうする』

だつて。オ、嫌だ。

お箸もつ手を擧げて打つ眞似をすれば、お刺身の醬油が、ポタリと一と雫、あとはまた大笑ひになつて、お晝ぬきにした二人は、お給仕にキマリがわるい程、食が進んだ。

『旦那、船はいつでも降りまする』もみ手して船頭が、廊下に跪づく。

『應』

兄さまのお返事は重々しいが、荷物は一つもない。玄關の賑かな聲をあとにして、人のよい老番頭の提燈に送られて出づ。

角を曲れば、オー美しいお月樣！

×

提灯なんか不用のに、伊達にかざして、いづくともなく歓聲湧く夜の街を急いで、松の並木過ぎれば、高くなり勝る濤の音、忽として眼前に展開した雄大な夜の海の色、海の音樂。

月、今し昇る。濃紫の空に金色の横雲長う、金蛇、一道未だ黒き波の上を辷つて、潮風やゝ寒し。磯に繋げる舟幾艘。番頭のオレンジ色の提灯それを遶りゆく。

『オーイ』

『オーイ』

と呼びかはす陸と海。詩的の情趣、小説の口繪？

兄さまは飛びのり、私はおぶさつて舟の中の人となる。同時に船は二三間沖へ突き出されて、番頭の振る灯が「さやうなら」と云ひ顔であつた。

『オイ、一人は女だぜ』

と棹持つ一人が驚く。女だからつてどうしたの。……けれどもね　萬線叢中の紅

一點、十挺櫓、熊を欺むく荒くれ男の中に女は私一人、實はビク〳〵ものである。敷物もない、板子の上に横ずはり、兄さまを小楯とたのんで、髪のほつれ毛かき上げてホッと人しれぬ吐息。

澄みゆく月影に、兄さまのお顏が正視しがたきまで端麗に見えた。穩かな波を、半ば帆をあげて、分けてゆく、ひたり〳〵舟底叩く小波の心地よさ。

いつか羅の樣な白雲流れて、月はその間を、ひた走りに走る。一明一暗。夢、夢すべてが、美しい夢だわ。

顧る伊東の灯も遠くなりゆけば、兄さまの豫期の通り船頭ぐづり始めた。胡座の毛脛あらはに、煙草すぱ〳〵。

『旦那、地獄の道も金次第、たんとたあ申さない。一兩だけさうすれば精出して熱海へ着けますがね、でなきや、病人を抱へて居る急ぎの人が居るもんだから、初島へ廻つて下つし』こちらは笑つて之を斥け、

『約束の外は一文も出ぬ、初島でも大島でも寄つて行け、其代り、今晩の十二時までに熱海へ行かないと承知しないぞ』

痛快に鼻つ柱をへし折る。

「ちやァ仕方がねェ』

口惜しげにつぶやく折も折、俄かに曇る空一面、何だか風位が變つて、帆を引きおろす間もなく、灰色の浪淘湧し、芝居の荒模様そつくり。さしもの政ちやん、いさゝか驚いて了つたけれど、動せぬ兄樣の手前もあり、じつとこらへる。船の動搖、銀と崩るゝ浪頭、眞珠と飛ぶ、浪のしぶき。船頭も空手では居れぬと見へ總立ちになつて、

『ヤツシツ、コラサ！　ヤツシツ、コラサ！　シツコラ、シツ！』

力瘤入れて漕ぎに漕ぐ。假にもこゝで弱身を見せてはならぬと、擬勢を張つて、

『痛快だわね、兄さま、痛快だわね……』

其くせ内實、痛快の快は消えて、痛だけ殘つて居るのです此の兄にして此の妹あり。いつも澄さんを見習へ〳〵つて仰有る兄さまも、此の時ばかりは賴母しい政公と思ひなさつたでせう。あら自惚れてるつて？　ホヽヽ。

搖られ揉まれ乍ら、初島の物語に聞いた。周圍は二十六町、戸數は四十三軒これより增しもせねば、減る事も許さぬ。島の人は農三分漁七分。雜貨を商ふ萬屋は一軒よりないから一番貧乏な家に之をさせ、三年たつと、外の貧民に移す。泥棒なく、火事なく理想鄕、それに水仙の美しい事、非常に大きな鼠の居る事馬が居ない事。初島の娘が、祖父につれられて熱海へ渡り

『ぢいや！　大きな鼠が薪を脊負つて！！』驚いて見れば、夫れは馬であつたなどの話を伺ふ。すると船頭の一人が冷かし半分に『水仙は十貫目ほどのがあります。鼠も猫ぐらゐのが居ます』と口を出して『ふざけるな！』と兄さまの一喝を食ひ、ヲレかくしに、櫓を押すべく立ち上つて、ギーイ、ギーイ。

風は勢ひを收めて、空も追々明るくなつた。やがて島に近づく。

森漫三里の海上に、眞白き浪の寄る處、古松を載せて横はる初島の青螺。夜目には黒くてたゞ恐ろしかつた。澤庵石の樣なのが磊砢たる岸に舟とめて、家に病人を抱えてると云ふ二人は降りる。

『これ忘れつろが……』

こちらから白鳥の死んだのを陸へ投げる。パッサリと音して石に落ちた。おゝ可愛い罪のない鳥を。

雲はとぎれて、月光蒼然と下界を照らした。風は身に泌み思はず打ち震える。わざつと舷叩いて、

『あゝ涼しい〳〵。ねえ兄さま、もつと沖へ出たら愉快でせうねえ、風よ吹け〳〵雨なら降るな……』

おかみさんは活潑だ。全く！』

老船頭の感嘆の錆びた聲が頭の上から降る。兄さま苦笑遊ばして、

『ウム、此奴ア隨分、お轉婆だよ』

×

いよ〳〵熱海に船首を向ける。もう安心と思つたので、急に頭がフラついてたまらなくなり、兄さまのお膝へつゝ伏す一昨日までは宵から霜が一寸も降る修善寺にさへ居たものをと思ひ直しても、冷々と爪先が切れる樣。

いつの間にか手提袋を枕に横にされて居た。そつと目をあけると、藥にしたくも雲はない。月が小さく高く〳〵輝いて居る。滿帆、追手を孕んで一直線に走る。これぢやア船頭はまるで只儲げだわ。兄さまは鼾聲とぐろ〳〵と華胥の國、いゝ氣になつて、船頭のひそ〳〵話を皆な聞いて了つた『よく寢入つたなア、寒かんべ』だの『熱海へ着いたら蕎麥屋で一ぱいやらう』とか『兄ア達は今晩も一と晩中烏賊釣

船で震えて居るだらうが、此方等には、思ひがけねえ、甘い鳥が引つ掛かつたもんだ』だの『物好きな客人達だ。これも若いからだつべ』……まだあつたけれど忘れちやつた。

月は益々冴えに冴え、空裡の流霜飛ぶを覺えずとでも云ふか、慾には船頭達から追分節でも聞きたかつた。それとも兄樣の寮歌でも。

十一時頃、熱海の横磯に着く。晝は汽船の發着場、しかし夜の淋しさは、また一しほ。月、天心、浪に金波も湧かず。初島黑く小さく遠く、その左右の水平線に漁火明滅。あゝ一月十七日の月はどんなでしたらう。ドボン〳〵と波の音、一灣の風光、慘として憺として、樗牛先生がサッポーのリウカデアの懸崖にたとへられた漁見岬徒らに動かぬばかり……何ですつて美文集から抜いた樣な形容だつて？　ひどいはねエ、これは一寸兄さまの漢文調を眞似たのよ。どうせ眞似ですもの。どうせ……。

墨をこぼした様な松影の影定まらぬを踏んで、磯傳ひゆく。灯火ほのかに洩るゝ板小屋から、誰が子ぞ嬌喉追分をうたふ。

『兄さん詩的ねエ、私、もうすつかりチャームされちまひましてよ』

と申上げれば、

『ウム』

と力ある御返事。しばらくして、

はら〳〵と涙はおちぬ法律を
學びし身にも淋しき月夜
月白く松かげ黒し貫一と
お宮はいづくぁゝ浪の音

と口ずさんで呻いて下すた。三四間おくれて、送り狼の七人がぞろ〳〵つゝいて來る。宿まで出頭せねば船賃が貰へないから。

青木館では割れんばかりに戸を叩かれて大騒ぎ、いくら先さまの爲人を知つて居てもまさか此時刻にとは思ひもかけなんだでせう。大歡迎をうける。

×

青木館は兄さま高等學校時代からのお馴染。肋膜のお惡かつたあと半年ばかり居らしつたのですもの。昔の儘の坊ちやま扱ひ、兄様ひとり氣取つても駄目なのよ。新らしい部屋に、船におきざりのカバン、毛布が人待顔、早速お湯殿へ。寒い折の溫泉ほど氣持のいゝものはない。身體が伸る様な氣がして……修善寺のより、チト熱いことよ。心持ち硫黄の匂ひがする。でも滑らかに美しい、玉を鎔かした様ですわ。

裸の女差もなく、罪も驕りも打ち忘れ湯槽にひたる夢心地。

サイダを飲んで寢る。絹夜具に顔を埋めて……枕頭の亂れ箱には藤色の羽織が半

ば緋綸子の裏を返して、牡丹花の咲き崩れたやう。腰帯の白、帯揚の淡紅、薔薇、菫の香を高み、さながら温室の中のやう。今宵の夢は安かるべし。

兄さまのお歌、

妹と呼べば應へて寝がへりぬ
さみしくあまき浪の音かな

四　日（木、はれ）

×

海の日の出のことに美し。

麗な日かげ満身に浴びて、安楽椅子ゆする兄さま。亞字欄に倚る私。大きく壁にうつた二人の影法師、兄様は背がお高いから、褞袍ラの衿も丈もつんつるてん、その可笑しい事つたらない。二階——けれども三階と同じですわ。おそろしい蜾蠃み

たいな高臺の上に建つてる家なのだから。

病人の時分、階下の室でも眺望のいゝやうにと、昔は三流の旅館であつたに拘らず、此家をお選みになつたのですとか。梯子段すら上れない程、衰弱し切つてらしつたお身體が、よくまア、あんなにと、思へば何故か泪こぼるゝ。英國へなどお出でてなくともよからうに、また風土の變化で御病氣でも出たらどうしませう……エゝ緣起でもないわ。鶴龜々々。

兄さんの太い指は東を西を指さし乍ら、色々の說明。今は紳士の宿と云はるゝ樋口ホテルは、もと醫王寺と云ふお寺であつたとか、金色夜叉の富山はあすこに、お宮親子は相模屋に居たのださうなと、眉唾のお話、あすこのあれが、お宮の松つてんだ。嘘でせう。馬鹿、誰が君なんか擔ぐものか。押問答の最中に、この宿の娘のお竹さんが茶器を運んで來る。ほんとなのと訊けば、先づ左樣として御座いますんですと賑やかに笑ふ。愛嬌のあるいゝ娘。

兄さんは相變らず椅子をギチ々々。

『あゝ熱海は何日來てもいゝ、僕の第二の故郷だ。政ちやん洋行から歸朝とね、是非こゝに別莊を作るんだ。今の鎌倉の別莊の樣なあんなのぢやない。南歐風のいゝのをこしらへるぞ。さうして政ちやんのにしてやつて、僕ア時々遊びに來る』

『あら、まア』と微笑を禁じ得ず。

『何があらまアだ？』

『だつて〳〵其頃には、私はもう眞田家の人ぢや御座いませんか、澄樣とのお間違ひで御座いませう』

『何にさ、處が先生、何處へお嫁に行つたとて、永く居つかう譯はない。すぐに飛び出して來る。その時に枕すべき家があるか、謹んで留守居を拜命しろ』

『ホヽヽヽ。無理壓政なお兄さま。ですが、ノーサンクスよ。どつちにしたつて、次男坊のお世話になんかなりませんわ』

『では其の次男坊のお世話になつて何故今まで旅行したか』

『夫れはね、良君が出來るまでの間に合せ……』

『口の減らない奴！』と笑つてらしつた。

朝餐後、車連ねて魚見ケ崎に向ふ。

私のを曳く車屋は芳さんと呼むで、兄さま御病中背負つて呉れた人なんですつて。淺碧の空、山腹を縫ふて、海に添ふ崖の上をゆく。綠青な浪は、ざぶり〳〵と、山が根を洗つて、透きとほる水底に、なびく海藻は、海魔女が髪を漂はすとばかり。

一徑蛇行しつくす處、トンネルがある。名づけて觀魚洞、蓋し、こゝから、寄り來る魚の群を見て、熱海へ信號すると云ふ。これを越えれば網代路、その脚下の斷崖は錦が浦と云つて、實に景色がよいとの事。

トンネルぬけて、錦が浦のとりつきの邊の茶亭に息ふ。風がひどい事。暴風となればどんなでせう。こんな時に一枚雨戸を吹き外されゝば、家全體、フッ飛ばされ

て仕舞ふさうな。

海の中へ石の投りつこする。兄様一番お上手で、私がピリ……夫れ處か水際までといかない。

曲りくねつた亂松、奇巖、洞窟、碧潮、『陸上松島』とは兄さまの評、あの青い美しい水の色は丁度ラムネの瓶を横にした様と云へば、そんな形容の仕方があるかと笑はれる。

引返して梅林見物、金色夜叉で紹介された例の有名なのです。

十八町とか、細い道をゆられ〳〵登つてゆく、重い私は車が碎げぬかと、氣もそゞろ。急な坂の動かぬ處は兄さまの車夫が驅けもどつて押す。半分路で、三十あまりの色の白い——けれども犯しがたい威を含んだ支那人に逢つた。兄さまはオーと叫んで、車を飛び降り、握手して暫くお話なすた。九州男兒で、今度の革命軍に加はつて居る人とやら、これ以上のお答へはなかつた。

梅林はいま眞ッ盛り、三十里東に去れば、東京の梅は蕾も一寸見られぬ位だのに、こゝには雪と輝く花、滿地の芳香、凉々たる溪流、眞に正月らしく、眞に春らしい。花下を逍遥する紳士淑女、中で目立つたのは、大島お召の半コート、セルの袴つて云ふ新婚らしい夫婦や、侍女につき添はれた御後室様、成金の一家族のけばゝしい身なり、袖下模様のお被布めした學習院の方らしいのが二三人、頻りに私の方ばかり見てらしつた。どこかの會でゝもお目にかゝつた方かしら？

生存競爭の巷をよそに、傷病兵の一群古松の根かたに語るも見た。私はお轉婆して枯草に踏み辷る。

歸りに來の宮の大楠へ寄つた。杜鵑の名所、古來名歌名吟も多い。近く熱海水道の瀘過池があるけれど、役場の證明がないと入れないんですつて、東京の百分の一もない癖に生意氣だわ。

宿へ着けば十一時、一浴、晝餐。

兄さま箸をカラリと捨てゝ、

『これから土産でも買つて來べいか』

『オヤいよ〳〵……』

『む？　何？』

『きつと大江屋へいらしやるんでせう。ホゝゝゝ』

兄さまの大秘密よ、スッパ抜きませうか、まアお聞きあそばせホゝゝゝ、大江屋とは土地の物産など商ふ店で、そこに三人姉妹の美人があつた。今は姉死し、妹嫁ぎ、末の一人だけですが、兄さまが以前御病氣でこゝに居らしつた時分には、まだ三人とも健全で、その美しい顏を店頭に並べて居た。島流しの兄さまは、詮術なさに、毎日此家へお百度、三月の轉地中に買ひも買ふたり、二百圓程のお買上げ。ひよつとしたら外にローマンスがあつたかも知れません。

『ホゝゝゝ一體どの娘を張りに行しつて？』

と伺へば、ガラにもなく紅くおなりなさつた。少々薬が利き過ぎたかしら。このお蔭で、お土産説も立消えになつて仕舞つた。

熱海は僅か半日のみ。名殘は盡きないけれど、色んな處へ寄つて見たく、宿の者の言葉も斥け、午後一時何分熱海發、輕便鐵道に乘込む。ブリキ細工の鳥籠ソックリ、狹い小ちやな箱、おまけに滿員、これで窓外の景色がよくなかつたら、囚人馬車と撰ぶ處はないわ。輕便でなくて不便鐵道だ。

各旅館の番頭の口々に繰りかへす御嫌機ようの挨拶をあとに、貧乏ゆるぎして走り出す、小汽罐車一輛、小客車一輛、ピー〳〵カラ〳〵。十分で伊豆山溫泉。一寸降て見る。

×

伊豆山溫泉は崖下に取て付けられたやうな一部落。二町餘もデコボコの石段を下

りなければならないのだから、脚氣、肺病、心臟病の患者などは自然に寄りつけないわけ。逆上を引き下げるさうだから、腦にはよいでせうけれど、リウマチスの人には毒でせう。

反對の方向を山に登れば所謂伊豆山神社、名所圖會などに『磴道千級、雲と連る』とある位、事實石段が八百段はあるさうな。その社の後方は和歌に聞えた『古々比の森』とて、ほとゝぎすの名所とか。しかし享樂主義の私らは面倒だとて登らず。

伊豆山には渡邊國武さんの御別莊がある筈だから、被居たらお伺ひするわけだが、いつか兄さまが何某博士と御訪問しやうとなすつたら、丁度犬を曳いて出て行らつしやる所、帶の間から、大形の金時計がぶらり〳〵。夫れを御存じなく、眞面目で御挨拶なさつたのには笑ひもならず苦しかつた、と兄さま何だか一人で可笑しがつてる。無邊俠禪、全く人間離れがした方なさうな。

有名な千人風呂のある相摸屋に高杉さんをおたづねしたら御不在。きけば大町桂

月先生がいらつしやるとの事に、名前を申上げて通される。

飾り氣のない老書生風、優しさうな親しみのある、ほんとにいゝ先生、學者はかうあらねばならぬと思ふ。一度で大好きな方になつちやつた。

お茶をついで下さる、お菓子をつまんで下さる、私はまるで娘あつかひ。兄樣は調子に乘つて、月夜の海上を乘り切つた昨夜の活劇をお話し遊ばしてゐらうしやるんですもの。御令妹も御一緒に、フーム、それはえらい、それは！　と私を御覽になるので、思はず頰の紅らむを覺えた。ひどい兄さま、これからこの旅行譚のたんび、政ちやんのお轉婆さ加減を吹聽されてはたまらない。今の中何か妥協の方法を講じておかなくつちや。

『まア、こゝへ來たら、ちつとは景色も見たまへ』

かしこまつてお緣ににぢり出る。海にのぞんだ廻廊、すぐ眼の下は漫々とたゝえた大海、千波萬浪、おもむろに小石を捲いて、どうどうと打ちよする。沖の初島、

大島も手にとるやう。詩想を養ひ文章を練りたまふには屈竟の仙境。しかし龍神一度怒らば、この一村は海濤の一なめに跡形もなく全滅して了ふであらう。

大町先生は海原を指し示し乍ら、徐ろに唇を開いて、色々おもしろい御話をなさいました。

船にのりおくれた恨も深き、伊東の、妙照寺の寶物に、『天狗の詫證文』なるものがある、いつの世にか、天狗が暴行を働き、高徳のお上人様に鼻柱を折られ、あやまり證文を書いたのだと云ふ。兄さまは此の前、伊東で御覧になつたさうなが、全く、サンスクリットでもなし、滿洲字でもなく、エヂプトの象形文字とも違ふ。これを名高い字引の著者たる、さる文學博士が、わけはない、讀んでやるつて、東京に持ちかへつたが、もとより讀めさうにもない。寺寶を紛失さしてはと、寺の坊さま氣が氣でなく、上京して幾度か催促、とうとうその卷物をとり返したばかりでなく、博士が讀めなかつたと云ふ一札を認めて貰つてきた。つまり、これで『天

狗の詫證文』が二つ出來たわけですねと大笑ひした。それからこの走り湯溫泉は源の賴朝と平の政子との新婚旅行地であつたとやら、兄さまと先生とは、政子論をおはじめなすつた。政子々々と、まるで私が叱られてるやうで、ほんとにきまりが惡かつたわ。

ヌーボー式に見えるけれども先生は浮世の甘いも酸いも嚙みわけた方らしく、兄さまが話した『處女に別るゝ旅行』『處女時代享樂主義』を同情を以て聽いて下すつた。

『今夜は是非此室へ泊りたまへ。外に明室もなからうから。何アに一晩ぐらい僕はどこか友人の部屋で寢る。旅は道づれ、世は情け、遠慮したまふな。』

と御親切なお言葉。大抵な事では嬉しがらぬ兄さま乍ら、この時ばかりは、心からお禮を云ひなすつた御樣子。あとで大町先生が一寸中座なすつた折、

『大町先生はエラいねエ、天下の靑年の崇拜の中心とならるゝは、あの誠である。

飴のばしにして、五十錢でも澤山原稿料をとりたいと云ふ賣文々士に、この心があるものか」と非常に意氣に感じてゐらしつた。

そのうち高杉さんが歸つておいでゐしたとの注進に一寸失禮申上げて、その部屋に行く。

×

高杉さんは、兄さまが中學時代からのお友達、外に木内さんて、私達の知らない方と御同室でした。

高杉さんはイヤに沈んでゐらしつた。その反對に木内さんはお愛嬌のこぼれるやう、男には惜しいお愛憎のよさ。婦人科だけはきつとおよし遊ばせ。ホヽヽヽヽ。

お二人とも醫科の生徒です。

違ひ棚のあたり、獨逸語の本やノートがコチヤ〳〵。その亂雜な中に、香水の瓶、

化粧水の瓶が水際立つて立ち並ぶ。どちらかお使用なさるのか可笑しくなる。

毎日〳〵の御勉強にも倦きて退屈を重ねた矢先、異色ある新來の二人は、忽ち宿中の目にとまりました。大學の方などウジャ〳〵と居らつしやる。勿論兄さまのお知己も多からう。高杉さん達はお仲間を語らつて、今夜、兄妹に散々な惡戲をしてやらうとの計畫がある樣子、コレは大變と兄さまのお袖を引く。その惡戲の一端を聞けば、上草履をお菓子折に入れ、水引かけて、恭しく女中に持參せしめるなどはまだよい。猛烈なのはインキ玉子とて、玉子の中味を吸ひ取り萬年筆のスポイトでインキをつめ、蠟で封して、お膳についてくる鷄卵と、すりかへておくのですつて。何、嘘なものですか。これがこゝでは大流行、御飯の上で割らうものなら落紅微塵！　お帳場では疊がよごれてならぬので、インキ玉子だけはなるべく御見合願ひたしと云つたさうな。なるべくが振つてますね、ハヽヽヽヽ。何しろコワイコト、コワイコト！！

世に陰謀はえて發見しやすいもの。かくと見て取つた此方は、長居は無用と、時間を見はからひ、うまく口實をもうけて逃げ出し、折よく四時何分かの輕便に間に合ふた。二等は滿員、命カラ〳〵三等へころがり込む。神經衰弱的の汽笛をあげて、

ピ――。

處へ追かけてゐらした高杉さんのお顏、木内さんの風つたら！　兄さま意地わるく窓から首をつき出して、

『君、惜しいかなすでに手遲れです。せめてもう三分早かつたなら、、、、、ハッハッハッ!!　諸君にどうかよろしく!!』

小ドクトルはおとなしく帽に手をかけて

『ぢやア失敬!!』

『御機嫌よう!!』

とたんに汽車は岩背をめぐつて、二人のお姿はかくれた。

眼下に海を見て、細道をあぶなく二十分驅け通して門川着。こゝから湯ヶ原まで凸凹きはまりなき一路、畑を貫いて三十五町。

茶屋の婆樣を買收して、すばやく買切の馬車を仕度させた。赤地に白く天野屋と拔いた小旗を夕風に飜して、勇しく鞭をあげる。

振りかへれば、まん圓い大月、しづ〳〵と昇る處。澄み渡りたる碧空には、雲の片影だもなく、さながら天つ姫神のおん衣の裾とばかり。路は水車多き流れを左にして、しきりに左右する。この川は豆相の國境、昨日まで伊豆の海に浮びし月の、今宵は相模の山の端にあり。

途中多く見かけるのは、水車の外に、蜜柑の樹と網代垣。褞袍にマントはおつた人達も三々五々。

もう昏くなつて湯ヶ原の町に入りました。どこも變らぬ温泉場風の宿屋、雑貨店、立ならぶ中を通りぬけて、一番上の天野屋についた。幸徳秋水が、こゝに居たので名高い家、

『満員で誠に早や』と斷はられる。

『おい僕だよ、僕だよ、どうか都合がつかないか』

兄さまとわかつて大さわぎ。まア突然にあんまりで御座いますよとか、ほんとうにお恨み申して居たので御座いますとか、左右からして、トランクを持つ、バックをうけとる。

『まあこれは〳〵、姫様でいらつしやいますか。よくこそ、さゝどうぞ、ほんとうによくお似合遊ばして、まるで御夫婦人形のやうでムいますよ、ホ、、、、、』

丸髷のつやゝかな、昔偲ばるゝ主婦の調子のよさに、こちらは反つて一言も云へませんでした。

長い廊下を幾曲り、梯子を上り下りして、迷宮の様な奥深く、これで御辛抱をと祭り込まれる。

すぐ大町先生にお詫の電報を打つ、いろ〳〵お世話になりながら、先刻のドサクサまぎれで、ろくにお暇乞もして來なかつた。

新館の、湯殿まで快い新木の香が漂ふ。浴終りて、晩餐の箸をとる。

この宿も兄さまに、多く紀念のある家なんです。去年のお正月、こゝで越年遊ばした折或る夜、突然、隣室の大久保侯爵に來襲されて、書生氣質の頃とて、四角くなつて仕舞つたお話や、また裏の空地の岡の上で演說練習をやつて居たら、女中達に猿まはしの喧嘩と間違へられたことや、元日に市會議員の坪谷様と、もう一人どなたかとお三人で、熱海へ馬車を驅られた途中、新橋邊のをつれて拔け遊びをして居た、吉江代議士に出あひ、道は一すぢ、兩方ともいやでも行き逢ふ處であつたが、吉江さんは逃げやうとして、泥田の中に踏み込み、腰をぬかしたの何のと、可

笑しいことばかりきかされて、樂しい〳〵夜食でした。

兄さまそゝのかして散歩、街をそぞろあるく。橋上霜白く、清潭銀を流して。岩に水の碎けるところは、氷の破片を撒き散らすやう。温泉宿の廂からほの〴〵と、優しく湯氣が靡いて、夜の空氣の中に溶け去る。

小さい寄席へ、何も研究と無理につれ込まれて、はじめて浪花節なるものを聞く。驚くべきほどいやなものなり、すぐに出てまた川づたひ、いつしか見附の松の下まで行つてしまつた。

歸途には、松かげ小暗き路を、兄さまつてば私の肩につかまつて歩きながら、窯歌やらデカンショ節やら、どなり立てる。はては本郷あたりで、墮落書生の歌ふ唄まで。まあ三太夫の爺やがきいたら、學士樣の、若樣の、お名前にと、畳みかけて諫めるでせうね。

酔ぱらつても被居らないくせに、よくこんなさわきが出來たもの。見つともない

から止して戴だくとたのめば、いよ〳〵蟇聲はりあげて始末におへない。しかし流石は向陵仕込の、いゝ咽ですわ。お月樣も、ジツと聽いてらしつた。宿へついたのは十一時過、身體がすつかり冷えて仕舞つた。破天荒の事も、名殘りの旅であればこそ。

それから兄さま。机の前に坐り直して、計算がはじまつた。象牙細工の可愛いソロバン取出してパチ〳〵。

いつのまにこんなもの、持つて居らつしやるかと不思議なり。仕方なし私もおつきあひに起きて居て、片づけたのは午前一時近く。

夫れにこれからまだお湯だとの事、私も好奇心でついてゆく。電燈のみ煌々たる深夜の風呂場は、シーンと靜まりかへつて、人間界ではないやうな氣がする。そこの枠に身を載せると、ゴトンと音して、もう少しで十五貫！　ホヽヽヽソソよ、ウソよ。まあこれは云はぬが花、着物の目方が馬鹿に重いのですわ。

湯槽にはどれも一尺ばかりより湯がたまつて居ず、而かもぬるさうなので、兄さま憤慨。およし遊ばせよとすゝめて、引返さうとすると、梯子の中段で、大タオル下げて、降りて來る褞袍の髭男にあふ。猿のやうな顔に見えた。ダルウヰン先生進化論中の一標本たるべき資格が充分だわ。

此夜疲れて夢も見ず。

五日（金、はれ）

×

六時、女中が火を入れに來て目が醒める。まだ眠くて〳〵ボンヤリするけれど、無理に氣を引き締めて起き、電燈の下で髪を結ひ、手まはりの物など仕末する。兄さまは一人よい子、寒いからつて、私の夜具布團、さては座布團まで、みんな御自分の上につみ上げさせ、龜の子の樣に首を伸べたり縮めたり、あれは斯うしろ、そ

れはそちらへ入れろと、人使ひが荒い。

洗面所で楊子ふくんで居ると、丁度主婦が通りかゝつて、傍へより

『まゝ姫さま、おひとりで、お髪がお奇麗によくお出來遊ばしましたこと』

などと云ひかけて

『おや〳〵まア』

と吹き出す。何かと思へば、珍らしからぬ兄さまのいたづら。知らぬ間に、少さな赤い熨斗を前髪につけてあるのだもの。口惜しくて〳〵、兄さまの處へ飛んで行つたら、

『いゝさ〳〵、兄妹喧嘩も今日がお名殘だよ』

なんて相手になさらず。

朝飯はミルク、其うち俥が來る。宿では會計を今度は一緒に戴きますと商賣上手、仕方がないから水繪のある札を一枚買かうとすると、夫ならばとつけを出

す。何にしても釣錢もお茶代ばかりにと大いそぎ。

冷たい朝風を切つて、昨夕馬車で來た路を逆にゆく。門川の茶店では、犬にパンをやつて子供らしく興じ合つた。すると傍に大丸髷の奇麗な若奥樣と、その旦那樣とが、どうでせう、丁度熱海から見た大島と初島ぐらゐ離れて、おとなしく腰かけて居るんですもの。やがてのこと、その奥さんが、私たちの眞似してパンをむしつて犬に投げてやり出したの。それで大分、二人の親しみが開けかゝつた樣子、當世にめづらしく初心な人達だと思ふ。私なんぞお嫁さまになつたら、其日から花婿樣の首つ玉にブラ下つて歩いてやるわ。あら、これはウソよ　言質にされては、私、立つ瀬がない！　ホヽヽヽヽ。

輕便が來て乘り込む。昨日梅林でお目にかゝつた成金の夫婦に子供が先客樣、少さな洋服着て空氣銃もつた男の子は可愛いが、妻君は廂髪の幅の廣い顏に金ぶち眼鏡を閃めかし、恐ろしく大きな毛皮のショールに猪首を包み、さま〴〵の指環を五

つも六つもはめて、指の屈伸も不自由さう。女だてらにこちらの腰かけへ足踏み伸ばして、巻莨をふかしたり、縫のしたオペラバッグの中から、蜜柑、お菓子など取り出して、絶えずムシヤ〳〵。いくら昨日儲けたお金を、今日使ふ成金だからつて、あんまりな人格だ。

私は新聞を買ふ。この二三日ろくに目を通す暇がなかつたので、耳を塞がれてた様な氣がする。支那の革命、益々旺ん也。痛快〳〵。二十世紀は婦人の世界ですもの、それは多少時事問題にも留意しますわ。保守と纏足のみと思つた支那婦人にも、フランスの刺客婦人シヤルロツテコルデにも比すべき秋瑾女や、また牛込の赤旗祝賀會で演説した葉慧哲とか、吳墨蘭とか、みんな妙齡の窈窕花の如き佳人だつたときゝます。その他彼國には、娘子軍あり、婦人參政沖動あり、突飛と云はゞ云へ、後の雁、かへつて前の雁にならうとする。私ら日本婦人はあらゆる方面で覺醒し自覺せねばならない。三面とお芝居の記事にばかり讀み耽つて居るのは、ホラ丁度同

ふの妻君の様な人達です。

『オイ〳〵政公、何を考へ込んで居るのだ。少し窓の外でも御覧』

兄さまに注意されて沖をみる。穏な海上はまるで青畳を敷きつめたやう、また兄様に叱られるからもうちつと上品な形容はないかと思つたが、それが一番適當なのだから仕方がない。『怒る時は大空の星もはためき、静なる時は船板に幼子ねむる、』逍遙先生の新曲浦島の一句を思ひ浮べる。

摺違ふ熱海行の二等などカラッポ。各種の遊客に充された各温泉場も、これから、毎日〳〵、かうして來る客は少く、歸る人は夥しく、追々と減じゆく頭數、どんなに淋しい、味氣ない氣がするであらうと、人事乍ら、たえがたい哀愁をおぼえる。

根府川驛で、林檎めしませ、うで玉子はいかゞと、物賣る老婆、兄さまがはじめて御覧になつた五年前から、ちつとも變つてないとかで、あれは萬年婆アだとおつ

しやる。萬年婆アとは奇拔なお言葉。

早川の寶石樓の荒れあとの無慘さ。

こゝは日向きむ子夫人の御定宿だつたのですつて。馬上ゆたかに手綱かいとり、良人の君と前後、夕日傾く、箱根路や、八ッの鐵蹄砂塵を蹴つて、乘りつれ來る、美しき夫人の面影が幻とあらはれた。

龜屋だの三好屋だのは、いつか一高の演習の時、南部の誠さんや、藤岡の淑夫さんなどが泊つて騷いだ古戰場。あの眞面目くさつた、むつつりやの從兄さん達が、お酒のラッパ飮をやつて『あの子よい子だ、あの子と添ふなら』なんか唄つたかと思へば、可笑しくてならぬ。

やう〳〵小田原終點着。入木亭に憩ふ。評判の妙な番頭——男のくせに女のやうな——は、去年の八月からもう居ないとのこと。松濤園へ電話をかける。

何心なくかざした瀨戶の大きな火鉢のふちが、手もつけられぬ程熱く燒けて居た

から、兄さまのお手を引つぱつて、いきなりそこへおつゝけると

『アッ熱ッ！　ッ！！』

持つてらした時間表の板を、一間も先へ投り出して了はれた。ホ、、、、いゝ氣味だ、今朝の熨斗のお禮よ、と云つたけれど、あとが赤く痛さうに、火ぶくれになつて仕舞つたのよ。御免なさいとあやまる。

×

松濤園前まで電車。對座の紳士がしきりと三角術の書物に讀み入つて居る。そんな三角より夏目先生の猫ぢやないが、『恥かく、義理かく、人情かく』の三かくでも研究した方が、世渡りは當世でせうに。

酒匂川に近くさしかゝつたとき

『富士が見えますのよ、兄さま、兄さま、』

あんまり大きな聲でどなつて、首をちゞめる。

徐行して渡る酒匂の橋、水は河原を幾條にも分れて流れる。誠さん達の發火演習はこゝの川を狹んで開始されたのだ。小松の間に劍光帽影、青煙紅火、漲る硝烟、小銃發射の耳を聾する響、おゝどんなに壯快なことであつたらう。

その時分、中隊長、少隊長した人は、今、大學で、名を稱せらるゝ秀才が多い。獨眼龍將軍山口さんなども其一人、いつも兄樣からお噂を伺つてます。昨今、寺尾博士について、革命軍視察のため御渡清中とやら。學問中毒の帝大に珍らしい磊落な英雄ねエ。

松濤園は八千餘坪。老松の群立つ砂地に、あちら向き、こちら向いて、十一軒の貸別莊、別によい普請とは云へないけれど、葦ぶきの風雅な住居。その中で二番目の大きいのをあけて呉れる、一抱えもある松樹の葉越に、白金ちりばむる海が光る。庭にはブランコ、ベンチ、遊動圓木、ぢいと耳をすますと、かすかな浪の音、はね

つるべのきしるのや、何處からともなく蓼々たる大皷の音。

小ぢんまりと、何から何まで整ふた家。こんな處で、手鍋下げたら、さぞ面白いでせう。でも兄さまは、澄姉さまとでなければイヤだとおつしやるわ。

あちらにある大きな海水の湯殿、色ガラスの障子、外からのぞけば、人間の身體も、五色のはりませに見える。兄さまはお湯に召すやら、まだ剃つたばかりのお髭を、安全剃刀で引かきまはすやら。今日は久し振で澄姉さまにお逢ひ遊ばすのがお嬉しくて、そんなにおめかし遊ばすのね、わづか一週間や十日の旅行でこの位、ロンドンからお歸朝の時は、あんまり磨いて皮をすりむき、赤蛙のやうにおなりでせうと笑ひころげる。

『馬鹿ッ！』

と怒られたつて、ちつとも恐くは御座いません。

兄様は私を鎌倉まで送つて下すつて、御自分はすぐ本邸へお歸り遊ばすとのこと、

私も一緒に東京へ歸りませうと云へば、

『串談ぢやない。カラッポの本邸へ歸つて何するものぞだ。山木の禿頭が夕闇に光る位が落さ。ちやんと政公を母さまにお渡しゝなければ、僕の役目がすまないんだ。さうして兄さんは仕事が目茶々々になつてるのだから、これから大いに活動しなければならない。いつまでも政公のお相手になつてるわけにはゆかないんだ』

『兄さま、わたくし……』

何だか涙が一ぱいたまつて仕舞つて、

『兄さま、私、何處へも歸りたく御座いませんわ』

思ひ切つて云ふ。

『相變らず、駄々をこねるぢやないか。此の次は眞田家の從五位君と、一生一度のホネームーンだ。好きなほど、金にあかして遊んで來るがいゝ。次男坊の兄さんの財嚢なんか、もうカラッポだよ』

と口笛吹いてゐらつしやる。

觀樂きはまつて哀情多しとか。樂しかつた八日の旅、今更兄樣のお情が、恨しいとは勿體ないが、もつと冷淡な兄さまだつたら、心殘りなく嫁くことも出來やうもの。私は、私は、處女時代と云ふものに對する離愁よりも、父樣よりも母樣よりも、兄さまとのお別れがつらくつて。

あゝ人はなぜ、人間は何故、結婚したり、洋行したりしなければならないのだらう。イヤだ〳〵。父樣もイヤ、母樣もイヤ、兄さまあらば戀も名もいらぬ。羨しき英國の湖畔詩人、ウオーヅオールの妹、あのやうな清い尊い、美しい生涯が送れたなら……。

せめて兄さまの御門出を御見送りするそれまでは、兄さま一人の妹で居ませうね。兄さま、外國へいらしても、風の朝、月の夕、おゝその月をみて、西を慕ふ妹あるを想ふて下さい。旭日曈々東に出づる時、更に日の出づる方、鎌倉山の別莊と、

澄姉樣と一緒に、この妹の上を、忘れては下さいますな……。

溢るゝ涙を見られじと袖をかざして、つと緣に立ち、わざと元氣な聲を作つて呼びました。

『兄さま、ブランコしませうか、いけなくつて？ホ、、、、これもお名殘りですものねエ、もう一生出來ないかも知れないから』（了）

大正元年十二月十九日印刷
大正元年十二月廿二日發行
大正二年一月廿五日發行
大正二年二月八日再版發行
大正二年十一月廿五日三版發行
大正二年十二月十五日四版發行
大正三年二月二十五日五版發行
大正三年二月十五日六版發行
大正三年二月廿五日七版發行
大正三年二月廿五日八版發行

エンゲーヂ奥付

定價金七拾五錢

（工場製本）

不許複製

著者　内藤千代

印刷者　大橋新太郎
東京市日本橋區本町三丁目八番地

印刷所　水谷景長
東京市小石川區久堅町百〇八番地

博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百〇八番地

發行所　博文館
（東京日本橋本町三丁目　振替貯金口座東京二四〇番）

千藤内

ニスヰートホーム

全一冊四六判洋装紙數三一四頁

正價金六拾五錢郵稅六錢

收載目次

スヰートホーム　小女の戀
ハーモニカ　おてんば娘
嫁がぬ人　天女降臨
松風　夢より醒めた女
もゆるおもひ　ホネームーン
紅

筆

昔ゝ加賀の千代女あり俳名天下に洽ねく人みなその大才に驚く、後一百五十年にして、明治文界の單調寂寞を破れるもの**内藤千代子**あり、未だ一日も校門をくゞらず、文章の師につかずして天性の鬼才よく、妙齡にして溌溂たる名文を草すまことに聖代の奇蹟ならずや

處女作**スヰートホーム、ホネームーン**

見よ好評嘖々たる才女が快著を

代子著

ホネームーン

全一冊四六判洋裝紙數三三八頁

定價金六拾五錢郵稅六錢

收載目次

若き日の戯れ　華族集　逝く春の乙女　學生の都會　花つみのする夏の夢　ゼラニアム　コスモスの頃　華嚴行　鵠沼日記　虛榮の都へ　帝劇の樂屋へ

の二著發刊日猶淺きにも拘らず好評湧くが如く重版、また重版、その底止する處を知らず都下の女學生は其の初版を珍藏し『千代子式の文』『スヰトホーム』式のスタイルなど新流行語となれりと云ふ、反響の大なりし事以て知らるべき也女流に天才なしと嘲る人々よ、乞ふ來りて卿らの活眼を開き本書の第一頁を繙かれん事を

新たなる一葉わが讀書界に現はる

岡田八千代女史編

●閨秀小說十二編

▼女流作家の肖像寫眞版挿入▲

宮子……與謝野晶子　おはま……森田しげ女
四十餘日……水野仙子　モデル……國木田治子
其一幕……長谷川時雨　路傍の人……生田嘉子
妹の緣……尾島菊子　多事……小栗籌子
機運……田村とし子　行末……木內錠子
實家……岩田百合子　同居人……岡田八千代

源氏の大作枕の草紙の雄篇現れたる平安朝は知らず才媛の輩出近時の如きは蓋し未曾有の事なり殊に筆を小說に染むる閨秀に至りては未だ今日の如き盛觀はあらず本書は現時の傑出せる作家より殊に十二篇を撰びたるもの銳敏にして感情の優婉に觀察の微細なる別に一境地を拓けり就中個々各異彩を放つの感覺で紅紫爛熳たる處近時出版界の美觀と云ふべし。

●博文館發行●
全一冊四六判洋裝美本
紙數三一〇頁
定價金四拾五錢
郵稅金六錢

故一葉樋口夏子女史著

一葉全集

●博文館發行●

全二冊

菊判上製函入美裝紙數八五〇頁

正價金壹圓七拾錢小包料拾貳錢

▼女子の肖像と其の筆跡寫眞版二葉挿入▲

前編

收載目次

○若葉かげ○わか草○筆すさび○蓬生日記○しのぶぐさ○道しばのつゆ○よもぎふ日記○塵の中○塵中日記○つゆしづく○日記ちりの中○いはでもの記○水の上○水の上日記○書簡文範

菊判上製函入美裝紙數五九〇頁

正價金壹圓貳拾錢小包料拾貳錢

▼女子の肖像とその書簡寫眞版二葉挿入▲

後編

收載目次

○にごり江○われから○ゆく雲○やみ夜○大つごもり○經つくゑ○曉月夜○うもれ木○闇櫻○たま襷○五月雨○わかれ霜○雪の日○琴の音○花ごもり○軒もる月○うつせみ○この子○十三夜○わかれ道○うらむらさき○たけくらべ○かれ尾花○棚なし小舟○森のした草○隨感錄○流水園雜記○ほとゝぎす○そゝろごと○棹のしづく

故樋口一葉女史の諸作は明治文壇の光輝也。女史が遺せる所の日記四十四卷は、女史が晩年六年間の記錄にして、操持不撓なる一女性の立志傳なると共に、感情熾烈なる女作家の忌憚無き告白錄也。人生に對する偶らざる觀察誌也。亂謝なりし當時の文壇裏面史也。增訂一葉全集は從來刊行の女史が諸作に加ふるに、此比類無き秘書と女史が小說及隨筆の未だ公刊せられしことあらざるものとを收む。前後兩篇合せて千五百餘頁、此稀世の女作家の眞面目を江湖に紹介するに於て遺憾無からん敢て薦む。

相馬御風君譯

●短篇六種 ゴーリキー集

全一冊 四六判 紙數三百十頁 裝釘瀟洒 美本 郵稅金六錢 正價金四拾五錢

茲に譯出せられたる六篇は、ゴーリキーが最も得意とせる短篇中、更に最も傑出せるものを選びたるものなれば、人一度之れを繙かんか、大膽深刻なる描寫を以て成れる歐洲文壇の新作風と、かの最も男性的の力に充つると稱せられたるゴーリキーが崇高なる新人生觀とを窺ひ知るを得べし。

吉江孤雁君譯

●短篇三種 ツルゲネフ集

全一冊 四六判 紙數三百六十頁 裝釘瀟洒 美本 郵稅金六錢 正價金四拾八錢

ロシヤの文豪ツルゲーネフの傑作三篇を收む。曰く『幻』曰く『ファウスト』曰く『ムムー』。『幻』と『ファウスト』とは作者が現實の世界と神秘の世界との接觸點、可解と不可解との交渉を捉へたるもの、『ムムー』は唖の戀と可憐なる犬との物語にして哀愁と可笑味とに其の筆端に橫溢せり。作者が如何に深く人生を解剖して之れを巧妙に現出したるか其の人生觀は如何、其の自然觀は如何。この一卷は實にこれを明らかに窺ひ知らしむるもの也。

前田晁君譯

●短篇十種 モウパッサン集

全一冊 四六判 紙數三百二十頁 裝釘瀟洒 美本 郵稅金六錢 正價金四拾五錢

內容 一▽モウパッサンの小傳▽ホルラ▽穴▽シモンの父▽顚飾▽盲人▽樽▽二兵士▽大佐の話▽宿屋

博文館發行

田山花袋君著

●近作十五篇

全一册四六判上製　裝釘滿洒插畫七葉（橋本邦助君筆）　定價金七拾五錢　郵稅金八錢

内●拳銃
●寫眞
●一圓
●死

内●鍾
●幼兒
●丘の家

●二階の一間
●一家の主人
●竹馬の友

●町より山へ
●騎兵士官
●二人づれ

島崎藤村君著

●小說藤村集

全一册四六判上製　裝釘滿洒插畫七葉（鏑木清方君筆）　定價金七拾五錢　郵稅金八錢

内●黄昏
●並木
●壁

●收穫
●一夜
●伯爵夫人

●苦しき人々
●旅
●群

●青年
●兄
●弟子

●土産
●雜貨店
●奉公人

●河岸の家
●芽生

小栗風葉君外十一君著作

●小說十二人集

全一册菊判特製　三色版口繪挿入　定價金八拾五錢　紙數四百頁　小包料金八錢　紅紫錯綜、金碧相映じて、當に是れ名花十二容の妍を競ひ麗を戰はすにも似たらんか。爰に裝を改めて江湖の清鑒を俟つ。

島崎藤村君著

●小說食後

（新藤村集）

全一册四六判上製　裝釘滿洒插畫（南薰造君筆）　定價金八拾錢　郵稅金八錢

□博文館發行

第七高等學校教授
文學士 鴻巢盛廣君著

口譯 おちくぼ物語

‖口繪彩色刷四枚挿入‖

●博文館發行●

全一冊洋裝菊判上製頗美本
紙函入紙數三三〇餘頁
正價金八拾五錢
郵稅金八錢

落窪物語は落ち窪んだむさ苦しい部屋に押籠められて種々の困難に遭遇してゐる中納言の姫が左近少將に知られて漸々立身し遂々太政大臣の北の方になるといふ波瀾ある生涯を寫したもので平安朝小說中の傑作である。描寫精緻、筆路の暢達してゐることは他に其類を見ない。殊に滑稽趣味に富んでゐる點は此物語の大なる特色である。かくの如き名篇も讀み難いので現代人には殆顧みられないのを慨いて現代口語を以て譯出したのが即ち此口譯落窪物語である。原書の味ひを出來る丈其儘傳へる爲めに一々語を逐うて譯して猶に省略してはない。これ一は古文研究者に對して直ちに註釋書たらんことを期したからである本書は又家庭に於ける善良な讀物たるを欲したので譯者は又此點にも周到な注意を拂つてゐる。